

# 平安京左京八条三坊

京都市埋蔵文化財研究所調査報告第6冊

1982

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所



635 絞胎陶枕 636・637 銅官窯壺 638～641 吉州窯壺 373・642 象嵌青磁

## 序

京都市が、市域内の埋蔵文化財に対応する発掘調査機関として当研究所を発足させてから、丸五箇年の年月が経過している。その間に、予想できなかったおびただしい調査件数が処理された。経過してみてもわかってきたことは、従来の調査においては、目立った遺跡の存在が顕揚されてきたが、数を重ねれば、遺跡としては少ないにしても、そこに生活していた人の生計を知るような遺跡のあることがとりあげられるようになり、そのような場合が多くなってきた。

ところで、ここに報告するものもその一つである。12世紀から13世紀にかけて、平安時代末期の八条には、その一坊に平清盛の館があり、二坊には重盛の館、三坊には美福門院、八条院などの当時の後白河院をとりまく人達の邸館があり、その人達の需要に添って、仏像彫刻の主流をなす七条佛所がその北側に存在していた。この仏像彫刻に供給する種々の工芸品を製作する工房も存在していたと予想した。

今回、それに関係のある遺物のいくつかを発見したことになる。13世紀、14世紀にかけては運慶・堪慶のいたこと、その作品が川東の蓮華王院本堂（三十三間堂）に遺されていることを思えば、まったく関係がない土地とはいえないものになる。

このような遺構・遺物の発見は、新しい事実を確定し、あるいは伝説的な話も確実にすることができる。今般の発掘調査成果も、以上のように京都の歴史を知る上で大きな意味を持つと考えている。

終わりに、この遺跡の調査と報告書作成に協力を惜しまれなかった関係者各位に深甚の謝意をささげたい。

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所  
所長 杉山 信三

# 目 次

第 1 章 調査の経緯	1
調査の経過	1
調査団の編成	2
調査参加者 整理参加者 調査日誌抄	
第 2 章 遺跡の調査	4
1 調査の概要	4
調査区の設定 地区割り 層序の概観	
2 遺跡の調査	6
I 期の遺構	6
溝 SD29	
井戸 SE20 SE21	
土壌 SK508	
II 期の遺構	8
溝 SD24 SD25 SD28	
井戸 SE11 SE12 SE13 SE16	
土壌 SK478	
III 期の遺構	12
溝 SD12	
井戸 SE1 SE5 SE8 SE10	
土壌 SK7 SK11 SK14 SK16 SK10 SK75	
SK132 SK304 SK146 SK144 SK147	
SK23 SK17	
その他 SX1 SX2 SX3 SX4 SX5	
3 小結	26
生産跡について 墓跡について 遺構の相互関係	
第 3 章 遺物の検討	31
1 遺物の概要	31

2	I 期以前の遺物	31
3	土器・陶器類	31
	I 期の遺物	31
	土師器  第3層の土師器ほか  土師器の胎土  黒色土器  須恵器	
	灰釉陶器  緑釉陶器  輸入陶磁器	
	II 期の遺物	41
	土師器  瓦器  輸入陶磁器  陶器 I 類  陶器 II 類	
	施釉陶器 I 類	
	III 期の遺物	43
	土師器  瓦器  陶器 I 類  陶器 II 類  施釉陶器 I 類	
	施釉陶器 II 類  輸入陶磁器	
4	瓦類	48
	I 期の瓦	48
	II 期の瓦	48
	III 期の瓦・瓦類	48
	軒瓦  SD12 出土の軒瓦  SK147 出土の軒瓦  SX2 出土の軒瓦	
	その他出土の軒瓦	
	丸瓦・平瓦	
	道具瓦	
	刻印	
5	土製器・金属製品・石製品ほか	55
	I 期の土製品	55
	陶製座像  陶硯  土馬  竈  土錘	
	III 期の土製品	57
	仏像  陶硯  埴埴  鋳型  その他の道具類  小型土製品	
	I 期の金属製品	65
	銅製品  鉄製品  銭貨	
	III 期の金属製品	65
	銅製品  鉄製品  銭貨	
	木製品	66

I 期の石製品	66
石鈔帯	
III 期の石製品	70
石硯    滑石製釜    石臼    砥石    その他の石製品	
自然遺物	72
I 期    II 期    III 期    まとめ	
6 小結	74
遺物の年代    墨書土器    特殊な土器類    須恵器のタタキメ	
土器の法量    遺物の数量    土器・陶器類の問題点	
輸入陶磁器	
第 4 章 総括	82
1 遺跡の変遷	82
土層模式図について    I 期    II 期    III 期	
2 遺物について	84
3 遺跡の保存状況	84
4 まとめ	85

## 挿 図 目 次

挿図 1 調査地周辺航空写真	1
挿図 2 作業状況	3
挿図 3 作業状況	3
挿図 4 作業状況	3
挿図 5 地区割り模式図	5
挿図 6 SD29 東西断面図	6・7
挿図 7 I・II 期井戸	11
挿図 8 II・III 期井戸	14
挿図 9 II・III 期土壌	17
挿図 10 III 期土壌	19
挿図 11 SK23	22
挿図 12 III 期土壌・その他の遺構	23

挿図 13	SX2	24
挿図 14	SX3 断面（南西から）	24
挿図 15	SX4	27
挿図 16	基本層序	30
挿図 17	I 期以前の土器	31
挿図 18	第 3 層の土器類	33
挿図 19	黒色土器	35
挿図 20	須恵器	37
挿図 21	土師器	43
挿図 22	SD12 出土の青磁と陶器	47
挿図 23	刻印のある瓦・平瓦タタキメ	54
挿図 24	陶製座像	56
挿図 25	陶硯	56
挿図 26	土錘	57
挿図 27	仏像	57
挿図 28	仏像	58
挿図 29	鋳型・埴塼・その他の道具類	59
挿図 30	鋳型	60
挿図 31	小型土製品	61
挿図 32	小型土製品	63
挿図 33	金属製品	64
挿図 34	金属製品	65
挿図 35	漆器	66
挿図 36	石銚帯	67
挿図 37	丸鞆製作工程	68
挿図 38	巡方製作工程	69
挿図 39	石製品・陶製品	70
挿図 40	石製品	71
挿図 41	特殊な土器類	75
挿図 42	須恵器甕タタキメ	76・77

## 表 目 次

表 1	石銚帯の材質	69
表 2	自然遺物	73
表 3	土器の法量	79
表 4	遺物の数量	86・87

## 遺 跡 図 面

図面 1	調査位置図、遺跡保存状況
図面 2	第3・4面平面図（Ⅰ・Ⅱ期）
図面 3	第2面平面図（Ⅲ期）
図面 4	第1面平面図（Ⅲ期）
図面 5	SD24 遺物出土状況（Ⅱ期）
図面 6	SD12 礫分布状況（Ⅲ期）

## 遺 物 図 面

図面 7	SD29A 出土遺物（Ⅰ期）
図面 8	SD29A 出土遺物（Ⅰ期）
図面 9	SD29A 出土遺物（Ⅰ期）
図面 10	SD29A 出土遺物（Ⅰ期）
図面 11	SD29A 出土遺物（Ⅰ期）
図面 12	SD29B 出土遺物（Ⅰ期）
図面 13	SD29C 出土遺物（Ⅰ期）
図面 14	SD29B、SK508、第3層出土遺物（Ⅰ期）
図面 15	第3層出土遺物（Ⅰ期）
図面 16	SD29B・C、第3層出土遺物（Ⅰ期）
図面 17	SD29A・C、第3層出土遺物（Ⅰ期）
図面 18	SD24 出土遺物（Ⅱ期）
図面 19	SD24 出土遺物（Ⅱ期）
図面 20	SD24 出土遺物（Ⅱ期）

- 図面 21 SD25 出土遺物（Ⅱ期）
- 図面 22 SD28、SE10・12、SK89・120・144・185・478・493、  
SX5、第1層、第2層出土遺物（Ⅱ期）
- 図面 23 SE1、SK14、SX2 出土遺物（Ⅲ期）
- 図面 24 SE5、SK146・147・259、Pit18、SX1・5、第1層、  
第2層出土遺物（Ⅲ期）
- 図面 25 SD12、SK18・35・40・42・115・118・147・246・260、  
SX5、第1層、第2層出土遺物（Ⅲ期）
- 図面 26 SD12、SK10・75・132・147・304、第1層出土遺物（Ⅲ期）
- 図面 27 SD12、SE1、SK14、SX2 出土遺物（Ⅱ・Ⅲ期）
- 図面 28 SK11、SX5、第1層、第2層出土遺物（Ⅲ期）
- 図面 29 SD29、SE11、SK23・61・226、SX4・5、第1層、  
第2層出土遺物（Ⅰ～Ⅲ期）
- 図面 30 SD12、SE1、SX2・3・5、第2層出土遺物（Ⅲ期）
- 図面 31 SD29 出土遺物（Ⅰ期）

## 遺 跡 写 真

- 写真 1 1 SD29 全景 2 SD29 断面（Ⅰ期）
- 写真 2 1 北部全景 2 東部全景（Ⅱ期）
- 写真 3 1 第2面北部全景 2 第2面東部全景（Ⅲ期）
- 写真 4 1 第1面東部全景（検出状況） 2 第1面東部全景（完掘状況）  
3 第1面西南部全景（Ⅲ期）
- 写真 5 1 SD24 土器出土状況 2 SD28 土器出土状況 3 SK478  
4 SE16 5 SE12 6 SE13（Ⅱ期）
- 写真 6 1 SD12 2 SD12 中央部完掘状況 3 SD12 青磁器椀出土状況（Ⅲ期）
- 写真 7 1 SE1 2 SE5 3 SE8 4 SE10・11（Ⅲ期）
- 写真 8 1 SK23 2 SK17 断面 3 SK11 4 SK14 土器出土状況  
5 SK7 6 SK147 断面（Ⅲ期）
- 写真 9 1 SK75 常滑甕出土状況 2 SK132 常滑甕出土状況

3 SK10 4 SK146 5 SK10 6 SK304(Ⅲ期)

写真10 1 SX1 2 SX3(Ⅲ期)

写真11 1 SX4 2 SX5(Ⅲ期)

写真12 1 SX2 検出状況 2 SX2 炭層上面調査状況 3 SX2 完掘状況(Ⅲ期)

## 遺物写真

巻頭写真 輸入陶磁器(Ⅰ～Ⅲ期)

写真13 土師器(Ⅰ期)

写真14 土師器(Ⅰ期)

写真15 土師器(Ⅰ期)

写真16 黒色土器(Ⅰ期)

写真17 須恵器(Ⅰ期)

写真18 須恵器(Ⅰ期)

写真19 須恵器(Ⅰ期)

写真20 須恵器(Ⅰ期)

写真21 須恵器(Ⅰ期)

写真22 須恵器(Ⅰ期)

写真23 灰釉陶器(Ⅰ期)

写真24 土師器 須恵器 灰釉陶器 越州窯系青磁(Ⅰ期)

写真25 緑釉陶器(Ⅰ期)

写真26 緑釉陶器(Ⅰ期)

写真27 緑釉陶器(Ⅰ期)

写真28 緑釉陶器(Ⅰ期)

写真29 墨書土器(Ⅰ期)

写真30 土師器 陶器Ⅰ・Ⅱ類(Ⅱ期)

写真31 青磁 越州窯系青磁(Ⅱ期)

写真32 青磁(Ⅱ期)

写真33 青磁 白磁(Ⅱ期)

写真34 青磁 白磁 輸入陶器(Ⅱ期)

写真35 土師器(Ⅲ期)

- 写真 36 瓦器 陶器Ⅰ類(Ⅲ期)
- 写真 37 瓦器(Ⅲ期)
- 写真 38 土製品 瓦器(Ⅲ期)
- 写真 39 瓦器(Ⅲ期)
- 写真 40 陶器Ⅲ類(Ⅲ期)
- 写真 41 陶器Ⅲ類(Ⅲ期)
- 写真 42 陶器Ⅲ類(Ⅲ期)
- 写真 43 陶器Ⅲ類 施釉陶器Ⅰ・Ⅱ類(Ⅲ期)
- 写真 44 施釉陶器Ⅱ類(Ⅲ期)
- 写真 45 青磁 白磁 青白磁 輸入陶器(Ⅲ期)
- 写真 46 青磁 白磁 青白磁 輸入陶器(Ⅲ期)
- 写真 47 白磁 青白磁(Ⅲ期)
- 写真 48 輸入陶器(Ⅲ期)
- 写真 49 軒丸瓦(Ⅱ・Ⅲ期)
- 写真 50 軒丸瓦(Ⅲ期)
- 写真 51 軒平瓦(Ⅰ～Ⅲ期)
- 写真 52 軒平瓦(Ⅲ期)
- 写真 53 瓦・刻印(Ⅲ期)
- 写真 54 道具瓦 甑(Ⅲ期)
- 写真 55 平瓦タタキメ(Ⅲ期)
- 写真 56 土製品(Ⅰ期)
- 写真 57 土製品(Ⅲ期)
- 写真 58 土製品(Ⅲ期)
- 写真 59 銅製品 鉄製品 錢貨(Ⅰ～Ⅲ期)
- 写真 60 石銚帶(Ⅰ期)
- 写真 61 石製品(Ⅲ期)
- 写真 62 石製品(Ⅲ期)
- 写真 63 植物遺体
- 写真 64 動物遺体
- 附 表 土器・陶器類遺構別一覽

# 凡 例

- 1 本書は昭和 53 年 (1978)9 月から翌年 2 月にかけて実施した平安京左京八条三坊七町の発掘調査報告である。
- 2 本書の構成は第 1 章 調査の経緯、第 2 章 遺跡の調査 第 3 章 遺物の検討、第 4 章 総括となっている。
- 3 本書は各自の担当した整理作業にもとづき執筆を分担した。  
鈴木廣司 第 1 章、第 2 章、第 3 章 4・5  
吉川義彦 第 3 章 1・2・3・6、第 4 章  
永田信一 第 3 章 6 (輸入陶磁器)  
岡田文男 第 3 章 5 (自然遺物)
- 4 整理作業に際し、土器、陶器、磁器類の実測は喜多、木下、黒沢、鈴木(久)、鈴木(廣)、辻(純)、辻(裕)、西家、丸川、吉川、吉崎。瓦の実測は鈴木(廣)、西家、松村、拓本を青山、児島。その他の遺物は鈴木(廣)を中心に黒沢、西家、平尾、深田、松村、吉川が実測した。  
図面のトレースは遺構を山下、遺物を西家、山下、吉川が行った。
- 5 遺跡の標高はそれぞれの図中に数字 (T.P.) で示し、方位と座標値は第 VI 座標系による。
- 6 図、挿図中の方位は同一ページでは原則して同一、例外は個々の遺構に示した。
- 7 本書では、遺物の種類ごとに、写真、実測図、拓本に共通する番号をつけ、本文中でもこの番号を用いた。
- 8 本書中の遺構は、種類ごとに番号を付し、遺構番号の前には原則として奈良国立文化財研究所の用例に従い、SA: 柵、SD: 溝、SE: 井戸、SK: 土壌、SX: その他、Pit: 柱穴などの記号を付した。

# 第1章 調査の経緯

## 調査の経過

調査地は、京都市下京区塩小路通新町東入ル東塩小路町 579-10 の日本生命保険相互会社所有地で、塩小路通を挟んで南側は京都駅、京都中央郵便局に面し、西側は関西電力京都支社ビルに隣り合い、東側は敷地の一部が室町通に通じ、北側は木津屋橋通に面する位置にある。ここは長らく駐車場として使用されていたが、日本生命ビル（現新阪急ホテル）新築の計画が立てられた。当該地は平安京左京八条三坊六町地の东北部に比定されること、これまでの発掘調査や立会調査などにより発掘調査の必要な地点であると認められることから、京都市文化観光局文化財保護課の指導のもと、財団法人京都市埋蔵文化財研究所が発掘調査を実施した。

発掘調査は、昭和 53 年 (1978)9 月 20 日に着手した。調査の進展に従い、時期の異なる遺構面を 4 面確認した。それぞれの遺構面について、遺構の調査、平面・断面図などの実測、写真撮影を行い、翌年 (1979)2 月 2 日に現場におけるすべての作業を終了した。

調査の対象とした面積は約 864 m<sup>2</sup>であるが、4 面にわたる調査であったため実質的な調査面積はこの数倍に相当する。



挿図1 調査地周辺航空写真

発掘調査を担当した財団法人京都市埋蔵文化財研究所の組織構成員は  
**調査団の編成** 以下のとおりである。

所 長	杉山信三	
調査部長	田辺昭三	
同 課長	浪貝 毅（調査当時）	
調査員	29名	
資料部長	木村捷三郎	
同 課長	江谷 寛	
総務部長	松井克也（調査当時）	小林 博（現 在）
同 課長	西崎健次（調査当時）	勝西温二（現 在）
同 職員	7名	

発掘調査は、鈴木廣司、辻 純一、辻 裕司、吉川義彦が現場を担当した。遺構写真の撮影は一部を担当調査員が行い、主要なものについて牛嶋 茂が撮影した。期間中の調査参加者は延べ2,800名にのぼる。調査費用は日本生命保険相互社の原因者負担で賄われた。また調査現場内の安全対策や現場事務所提供などは、（株）大林組の協力を得た。

<b>調査参加者</b>	青木信昭	赤井圭昌	天田 亨	上田栄治
上田 博	魚住真弘	太田芳和	小黒満郎	河端高文
川村篤雄	加藤令之	加藤モモヨ	小島照海	小垂亮爾
小林虎雄	酒本 聡	桜井忠男	真本芳治	関 研一
平良正栄	中川慶太郎	中村嘉久	夏原三郎	西岡千代治
能芝 勉	平瀬友美	藤波充生	本田敏子	松井真弓
安井彰宏	山下俊弘	山本道彦	脇田智子	

遺物整理・報告書の作成は、鈴木廣司、永田信一、吉川義彦が実務を担当し、岡田文男、木下保明、鈴木久男、辻 純一、辻 裕司、平尾政幸、丸川義広、吉崎 伸が担当した。遺物の写真撮影は自然遺物を除くすべてを牛嶋 茂が行った。

<b>整理参加者</b>	青山 均	秋田桂子	浅野信之	喜多貞裕
黒沢哲郎	小島照海	近藤章子	境 真美	桜井みどり
竹本 哲	中山裕子	西家淳朗	深田和美	福井義子
藤原圭子	松村 浩	村瀬 篤	村田 弘	山岡さつき
山下俊弘	吉清水真理	脇田智子	小島真弓（写真）	

## 調査日誌抄

9. 20 調査を開始、重機による掘削を行う。  
SE1 調査。
- 23 第1面遺構検出を開始する。
- 30 重機による掘削を終了、遣方設定を開始する。
10. 1 遣方設定を終了。SE5 調査。  
7 第1面実測を開始する。  
11 遺跡全景の写真撮影を行う。  
SK7・10・11・16、SX2 調査。  
26 土層断面実測を開始する。SK17・23・30、SX3 調査。  
31 第1面検出遺構の平面実測終了。
11. 2 遺跡全景の写真撮影を行う。  
第2面への掘り下げを開始する。



挿図2 作業状況

- 4 D3区北部を拡張する。
- 5 D3区北部拡張を終了する。
- 9 第2面遺構検出を開始する。SK75 調査。
- 10 遺構個別の写真撮影、実測を行う。  
SK132・146、SX4・5 調査。
- 25 第2面平面、断面の実測を開始する。  
SD12 調査。
12. 6 遺構個別の写真撮影を行う。  
17 第2面平面、断面実測を終了。  
18 遺跡全景の写真撮影を行う。  
19 第3面への掘り下げを開始する。  
25 第3面遺構検出を開始する。  
27 遺構個別の写真撮影を行う。

昭和53年(1978)9月～昭和54年(1979)2月

- SE13・16・SD24 調査。
- 28 '78年の調査を終了。
1. 5 '79年の調査を開始する。  
6 遺構個別の写真撮影、平面実測を開始する。SE12・SD25・28 調査。



挿図3 作業状況

1. 16 遺跡全景の写真撮影、一部第4面への掘り下げを開始する。  
17 第3面平面実測、調査を終了。  
20 第4面遺構検出を開始する。  
31 遺跡全景の写真撮影、平面、断面実測を行う。断ち割りを行う。
2. 1 平面、断面実測終了。  
2 道具、遺物を搬出する。調査の全作業を終了。



挿図4 作業状況

## 第2章 遺跡の調査

### 1 調査の概要

**調査区の設定** 調査地付近は、東本願寺のあたりから京都駅にかけて緩やかな南下りの平坦地である。調査対象地は南北約 54.4m、東西約 53.7m、敷地面積約 2,195 m<sup>2</sup>であり、「L」字形をなしている。そのため、調査区を外郭に合わせ、南北約 39m、東西約 43m の「L」字形に設定した。

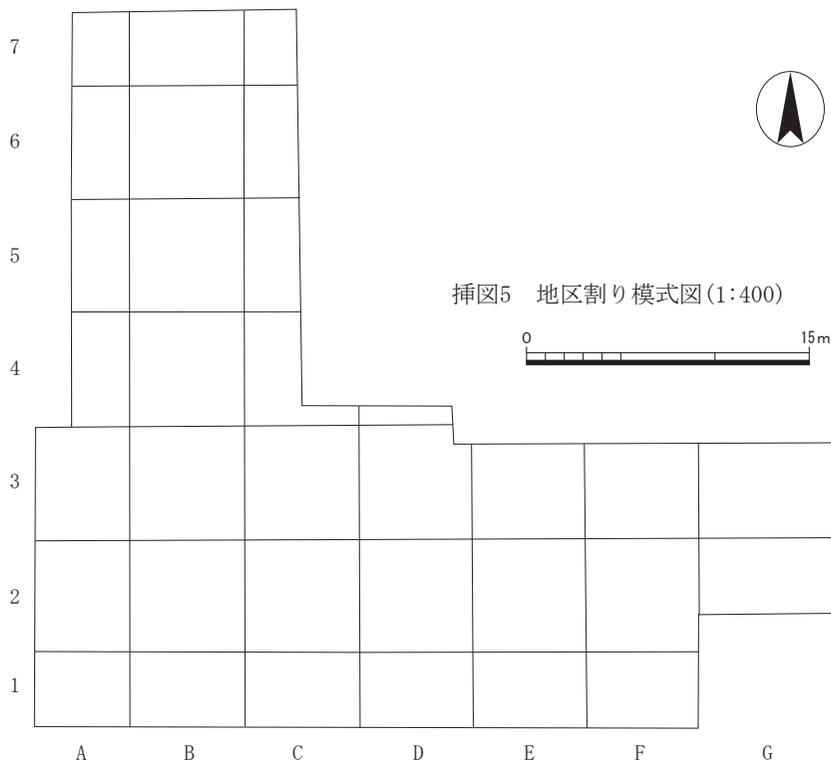
**地区割り** 調査区の地区割りは、まず東西、南北の基準線を定め、この基準線により調査対象地を最小単位 6m の方眼に区切り、幅 60cm のアゼをおいた各グリッドを南から北へ 1～7、西から東へ A～G として、南西端のグリッドなら A1 区と呼称することにした。

また調査の必要に応じ、各グリッドを四分して土層観察、遺構の切り合い確認のための補助断面とした。遺方の方位は真北方向を基準とした。水準高は 28.50m(T.P.) である。

**層序の概観** 当該地は、塩小路通の路面に比べ約 30cm ほど高く、駐車場として使用されていたため東側に厚いコンクリートの床が敷設されており、西側は整地転圧され、部分的にコンクリートが敷設されている状況であった。この整地・コンクリートの層は、地固めの砂利の厚さを含めて平均 20cm の厚さである。この下に平均 60cm ほどの盛土があり、さらに下は厚さ 20～30cm の耕作土で、京都駅が明治時代に設置されるまで耕作されていたものである。

これらをすべて排土したのち、暗黄灰色混礫泥砂・暗茶褐色泥砂・暗茶褐色混礫泥砂からなる面を最初の遺構面と認め、第 1 遺構面（以後第 1 面と略称する）と呼称することにした（図面 4）。第 1 面は南下りの緩傾斜がみられる。同一面としたが、暗茶褐色混礫泥砂が暗茶褐色泥砂に被っており、暗茶褐色泥砂に包含される遺物と、暗茶褐色混礫泥砂に包含される遺物に若干の時期差があり、それぞれの層を切り込む遺構にも時期差がみられる。堆積の厚さは、暗茶褐色泥砂 15～20cm、暗茶褐色混礫泥砂が 5～20cm で、下層の凹凸のため土層の厚さは一定しない。

第 2 遺構面（第 2 面）は、この面を形成する層の堆積関係が複雑である（図面 3）。大別すると 6 群に分けることができる。これらの堆積土は、南下りの地形に北から南へ順に<sup>注1</sup>整地されており、厚さも南に厚く 10～30cm を測る。第 2 面の各土層から出土する遺物は、調査区北部の暗黄灰色混礫泥砂と他の土層間にわずかな時期差が認められるものの、ほぼ



同一時期とすることができる。

第3遺構面（第3面）は、土層を9層に分けることができる（図面2）。調査区の中央部に泥砂、砂泥層が分布するが、これは下層の大溝が、第3面の整地に影響したものとみられる。第3面も北から南へ順に整地されており、厚さは下層の凹凸に左右され、5～30cmと一定ではない。各土層から出土する遺物は、調査区中央部の泥砂、砂泥層内に包含される遺物共に、ほぼ同一時期である。

第4遺構面（第4面）は、調査の最終面である。粗砂・砂礫からなり、三つのブロック<sup>注2</sup>に分けられる。調査区の中央部に灰褐色砂礫、赤褐色砂礫を切り込んで大溝（SD29）が南北に検出される。第4面の調査終了後、確認のため南北と東西にトレンチ<sup>注3</sup>を入れて土層観察を行った結果、砂礫の堆積がさらに下方へ続くことが判った。砂礫層中からは遺物が出土していない。

これら4面は、それぞれの遺物包含層から出土する遺物や、それぞれの面を切り込む遺

構から出土する遺物に時期差が認められ、3期に時期区分を行った。Ⅰ期に対応する面は第4面、Ⅱ期に対応する面は第3面、Ⅲ期に対応する面は第1面、第2面である。

Ⅲ期は第1面、第2面の間に若干に時期差がみられ、時期区分することが可能である。

## 2 遺跡の調査

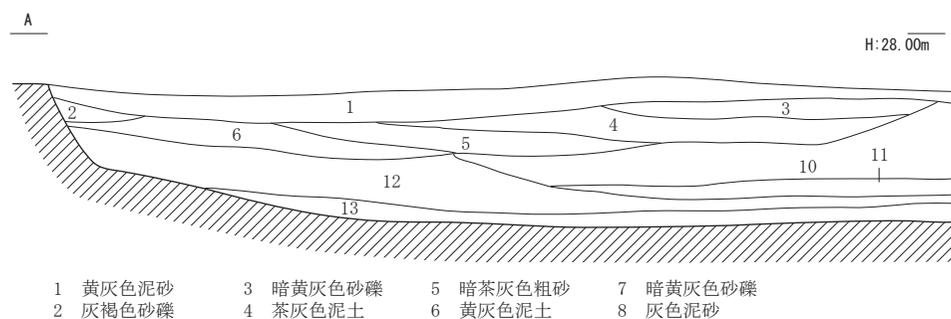
### Ⅰ期の遺構

Ⅰ期の遺構は、すべて第4面を切り込み成立するもので、今回の調査では最も古い時期に属する。検出した遺構は、大溝1、井戸3、土壌2である。ここでは大溝SD29、井戸SE20・21、土壌SK508を取り上げたい。

#### 溝

**SD29** 第4面（灰褐色砂礫）を切り込む大きな南北溝である。北側と南側は調査区外にのびている。検出できた規模は、長さ約16.5m、幅約10.5m、深さは検出面から最深部で約80cmである。東肩は、西肩に比べて緩やかに立ち上がっており、溝の中央部約5m間の底部は平坦である。わずかであるが、南に向かって低くなる。溝の堆積は3層に大別でき、上層は黄灰色泥砂である。この上層を遺物観察の便宜でDとする。

中層は泥砂・泥土・砂礫などの互層からなり、複雑な堆積状況を呈する。溝の中央で南北に細長い中州状の黄灰色粗砂がみられ、これに二分される形で同期の流路を検出した。西側の流路は幅4～4.5mで、数度の流路変更がみられる。堆積土は5層あり、上層は西側に灰褐色砂礫、東側に暗黄灰色砂礫、中間に中州状を呈する茶灰色泥土（腐植土、微砂混入）よりなる。ついで暗茶灰色粗砂、最下部に黄灰色泥土（腐植土、砂混入）の順で堆積する。この流路をBとする。東側の流路は幅5.5～6mで少なくとも二度の流路変更がみられる。堆積土は3層に分かれ、上層は東側に灰色泥砂、西側に暗黄灰色砂礫と青灰色



挿図6 SD29東西断面図(1:40)

粘土が混合する層よりなる。下層は茶灰色砂泥（腐植土を含む）である。この流路をCとする。

下層は4層からなる粗砂・砂礫の堆積である。上部から黄灰色粗砂、茶灰色砂（腐植土をブロック状に含む）、黄褐色粗砂混礫、黄灰色砂礫である。この下層をAとする。

出土した遺物は多量で、器種、器形とも豊富である。土師器皿・杯・椀・高杯・盤・鍋・釜・甕・竈、黒色土器杯・椀・鉢・盤・壺・甕、須恵器皿・杯・蓋・鉢・盤・平瓶・壺・甕・硯、灰釉陶器皿・椀・平瓶・瓶・壺、緑釉陶器皿・椀・蓋・香炉・唾壺、輸入陶磁器皿・椀・壺、瓦、土製品土馬・人形・土錘、木製品漆器椀、石製品石鈎帯、金属製品、紙製品、有機物牛、馬の歯骨、植物遺体などである。

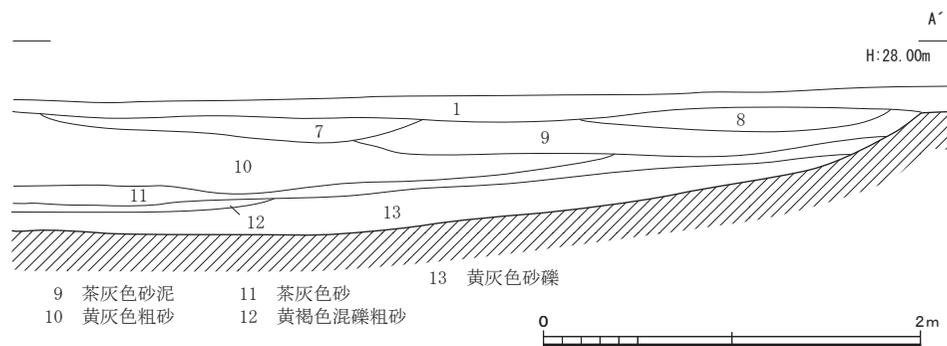
土器・陶器類は、中層のBとCが類似した形式を持つが、下層のAは形式差がみられ、特に土師器・灰釉陶器・緑釉陶器で確認できる。有機物などは、中層のBとCの腐植土を含む層から主に検出した。下層からは少量であった。

SD29の存続した時期は、2時期に分けられる。下層が砂礫で埋まりきるまでの時期と、中層のB、Cの流路の時期である。下層の時期には溝に人手が加えられた痕跡は認められないが、Bの東肩は流路に沿って川原石が置かれたり、不規則に木杭が打たれて杭と杭間に横板が残り、護岸の施設があったとみられる。

また東側に、大溝と類似した土器類を含む茶褐色混礫泥土の薄い層がみられ、氾濫があったと推定できる。

## 井戸

SE20・21 A1・2区からB1・2区に広がる石敷遺構SX5を完掘したのち、第4面の灰



挿図6-2 SD29東西断面図(1:40)

褐色砂礫を切り込む井戸 2 基を重複して検出した。SE20 が SE21 を切る。SE20 の堀形は南北約 1.2m、東西約 1.55m の不整形で、深さ約 30cm を測る。井戸枠は木組みで、残存状況は悪い。基底部の側板と思われる痕跡から推定できる規模は、南北約 65cm、東西約 70cm の方形である。掘形埋土は 2 層に分けられ、上層が暗灰色砂礫に泥土を若干含んでいる。下層は暗灰褐色砂泥である。井戸枠内は 3 層に分けられ、上層が黄灰色泥砂、中層は灰色泥砂に少量の礫を含み、下層が暗灰色粘土である。井戸枠内から土師器皿・杯・高杯・盤・鉢・釜・甕、黒色土器椀・甕、須恵器杯・鉢・壺・甕、灰釉陶器皿・椀・壺、緑釉陶器椀、瓦などが出土した。

SE21 は SE20 を完掘したのち、底部に直径 50cm の円形の曲物を検出した。曲物が SE20 の井戸枠の下部にあること、枠の東側に出ていることから SE21 とした。曲物の残りの部分は SE20 の底面より約 20cm 下まで認められた。曲物は 4～5 枚の薄板を合わせてあり、西側の部分が破損して広がった状態になっていた。堆積土は褐色砂礫である。出土した遺物は、土師器皿・鉢・盤・甕、黒色土器椀、須恵器杯・壺・平瓶・甕・硯、灰釉陶器椀、緑釉陶器椀、瓦である。

#### 土壌

**SK508** A・B2 区、第 4 面の灰褐色砂礫を切り込む土壌である。規模は南北約 1.2m、東西約 1.2m の円形で、深さは検出面より約 35cm、断面形は播鉢状を呈する。埋土は上下 2 層に分かれ、上層が暗褐灰色泥砂、下層が淡緑灰色砂である。出土した遺物（図 14 140～148）は、土師器皿・椀・鉢・盤・甕、黒色土器椀・甕、須恵器杯・鉢・壺・甕、緑釉陶器耳皿・椀などである。I 期の遺構で、出土した遺物の量は少ないが、東側の溝 SD29 上層出土遺物と時期が近接する。また I 期の遺構 SE19・20・21 は SK508 付近に集中して検出された。

#### II 期の遺構

II 期遺構はすべて第 3 面を切り込み成立する。検出した遺構は溝 5、井戸 8、土壌 24、ピット 18 である。ここでは検出した遺構のうち II 期の指標となる遺物が出土した溝 SD24・25・28、井戸 SE11・12・13・16、土壌 SK478 などを取り上げたい。

#### 溝

**SD24** B2 区の石敷遺構 SX5 を完掘したのちに検出した。B・C2 区第 3 面の褐灰色混礫泥砂を切り込む<sup>注4</sup>東西溝である。規模は長さ約 6.2m、幅約 95cm、深さは検出面より約 30cm である。溝の底は平坦で、東西両端から急角度に立ち上がる。溝内の堆積状況は 3 層に分

けられ、上層が茶灰色泥砂、中層は暗茶灰色泥土である。下層は暗灰色泥砂で炭化物を多量に含んでいた。出土した遺物は、土師器皿・高杯、瓦器皿・鉢・釜、陶器Ⅰ類鉢・甕、陶器Ⅱ類壺・甕、輸入陶磁器皿・椀・盤・壺・水柱・瓦、滑石製釜、鉄製品などである。特に下層上面の薄い炭層から、陶器Ⅱ類、輸入陶磁器の青磁・白磁などを破片の状態で多量に検出した。出土量の多い西部に限り図面に記載しながら取り上げた。遺物整理の過程でこれらの出土遺物の復元作業を行った結果、すべてを完全な形に復元できないが、大半の土器が接合でき、器形を判別できるものが51点認められた。接合した破片の出土地点を調べると、西部の一ヶ所から検出した青磁の皿・椀などは散乱することなく、最も離れたもので60cm、大部分は底部の位置より半径20cm以内、上下の差では5cm以内で、口縁部、体部の破片を認めることができた。須恵器の鉢(300・302)や陶器Ⅱ類の壺(305)、甕(303・304)は前後1mに近い範囲に散乱していた。SD24は、溝の東側を近世の井戸により削平されている。

**SD25** D・E2区、第3面の暗褐色泥砂を切り込む東西溝で、規模は長さ約6.8m、幅約1.2～1.3m、深さは検出面より約35cmを測る。底部は平坦である。埋土は暗灰色泥土の単一層で、砂のブロックや炭化物を多く含む。出土した遺物は土師器皿・高杯、瓦器椀・鉢・釜、陶器Ⅰ類鉢・甕、陶器Ⅱ類甕、輸入陶磁器椀・盤・壺、瓦、石製品、拵埵などである。溝底部から多量の土師器皿が出土した。またⅡ期の溝の内、このSD25とSD24は東西に直線上に並んでいる。

**SD28** D・E1区、第3面の暗褐色泥砂を切り込む東西溝である。SD28はSK498などに切られ、第3面のE・F1区ではSD25に後続する時期の遺構である。規模は長さ約6m、幅は最大部約1mである。深さは検出面から最深部で約20cmを測る。堆積土層は2層に分かれ、上層は暗茶灰色泥砂、下層は灰色泥土である。出土した遺物は、土師器皿、瓦器椀・鉢・釜、陶器Ⅰ類鉢、陶器Ⅱ類甕、輸入陶磁器椀・盤・壺、瓦などである。特に土師器皿はSD28の底部に二、三枚が重なった状態で16個体を検出した。このような状態は西側にみられ、東側では小破片で散乱していた。

#### 井戸

**SE11** A6・7、B6・7の4区にまたがり第3面の褐色砂礫を切り込む井戸である。

SE11はSE10の北にあり、一線上に並んでいる。堀形の南側をSE10により切られる。堀形の規模は南北が1.2m以上、東西は約1.3mである。深さは検出面より約65cmが測れる。井戸枠は木組みで、南北約1m、東西約1mの方形であるが南西端に歪みがみられる。上部

の腐食が激しく、側板の残存高約 20cm で、西側と南側を欠く。構造の細部まで観察できなかったが、縦板を数枚用いており、棧と支柱が使われていた痕跡が認められた。堆積状況は堀形が暗灰色砂礫である。枠内は 3 層に分けられ、上層が灰色泥砂、中層は淡黄灰色混礫粗砂、下層が黄灰色砂である。出土遺物は堀形から土師器皿・椀、瓦器椀・鉢・鍋・釜、陶器Ⅰ類鉢・甕、陶器Ⅱ類甕、輸入陶磁器皿・椀・盤、瓦、金属製品などである。また北壁面に SE11 に切られる土壌 SK499 を検出した。

**SE12・13** A7 区で SX4 を完掘後に第 3 面の褐色砂礫を切り込む井戸として検出した。SE12 が SE13 を切っている。SE12 は堀形の規模が南北約 1.5m、東西約 1.7m の楕円形で、検出面より深さ約 90cm を測る。井戸枠は残存状態が非常に悪いが、南北約 75cm、東西約 75 cm の方形の木組みで、高さ約 30cm を測る。一方向に縦板を数枚使っており、基底部に棧がみられた。また枠の下には堀形の底まで拳大の礫が 25cm 程の厚さに敷き詰められていた。堀形の埋土は茶褐色砂礫で、泥土をブロック状に混入する。井戸枠内の堆積状況は 2 層に分けられ、上層が暗灰色泥砂、下層は灰色砂で小礫を若干含む。出土した遺物は堀形からは少量であるが、土師器皿、陶器Ⅱ類甕がみられた。井戸枠内では、土師器皿、瓦器椀・鍋・釜・鉢、陶器Ⅰ類鉢、陶器Ⅱ類甕、輸入陶磁器椀・盤・壺、瓦がある。

SE13 は堀形の南東部を SE12 に切れ、また、南北約 3.2m、東西約 2.8m の楕円形の土壌 SK501 を切り込む井戸である。SE13 の堀形の規模は南北約 1.3m、東西約 1.35m の隅丸方形で、深さ 1.05m が測れる。井戸枠は南北約 65cm、東西約 80cm の長方形の木組みで、残存高約 50cm が認められた。側板には幅 35～40cm、厚さ約 3cm の縦板を使用しており、また井戸枠内側の基底部に約 4～5cm 角の棧が組み合わされていた。堀形内の堆積状況は 2 層に分かれ、上層が黄灰色砂礫、下層は灰色砂である。井戸枠内の堆積状況は、上層が褐灰色砂泥、下層が暗灰色泥土で礫を混入する。出土した遺物は少量であるが、堀形より土師器皿、瓦器椀・釜、陶器Ⅰ類鉢、陶器Ⅱ類甕、輸入陶磁器盤などがある。井戸枠内からは土師器皿、陶器Ⅰ類鉢、陶器Ⅱ類甕などを検出した。

**SE16** F1 区、第 3 面の褐灰色砂礫を切り込む井戸である。SE16 の規模は堀形が南北約 1.7m、東西約 1.85m の不整形円形で、検出面より深さ約 1m を測る。井戸枠は南北約 70cm、東西約 70cm の方形の木組みで、残存高約 60cm である。南西部にやや歪みがみられる。構造は一辺につき 3～4 枚の縦板を内側から棧で支えるものであるが、腐食が激しく細部まで観察できなかった。堆積状況は堀形が 2 層に分かれ、上層が暗灰色砂泥、下層は暗灰褐色砂礫である。井戸枠は 2 層に分かれ、上層が暗茶褐色泥砂、下層は灰色砂泥である。

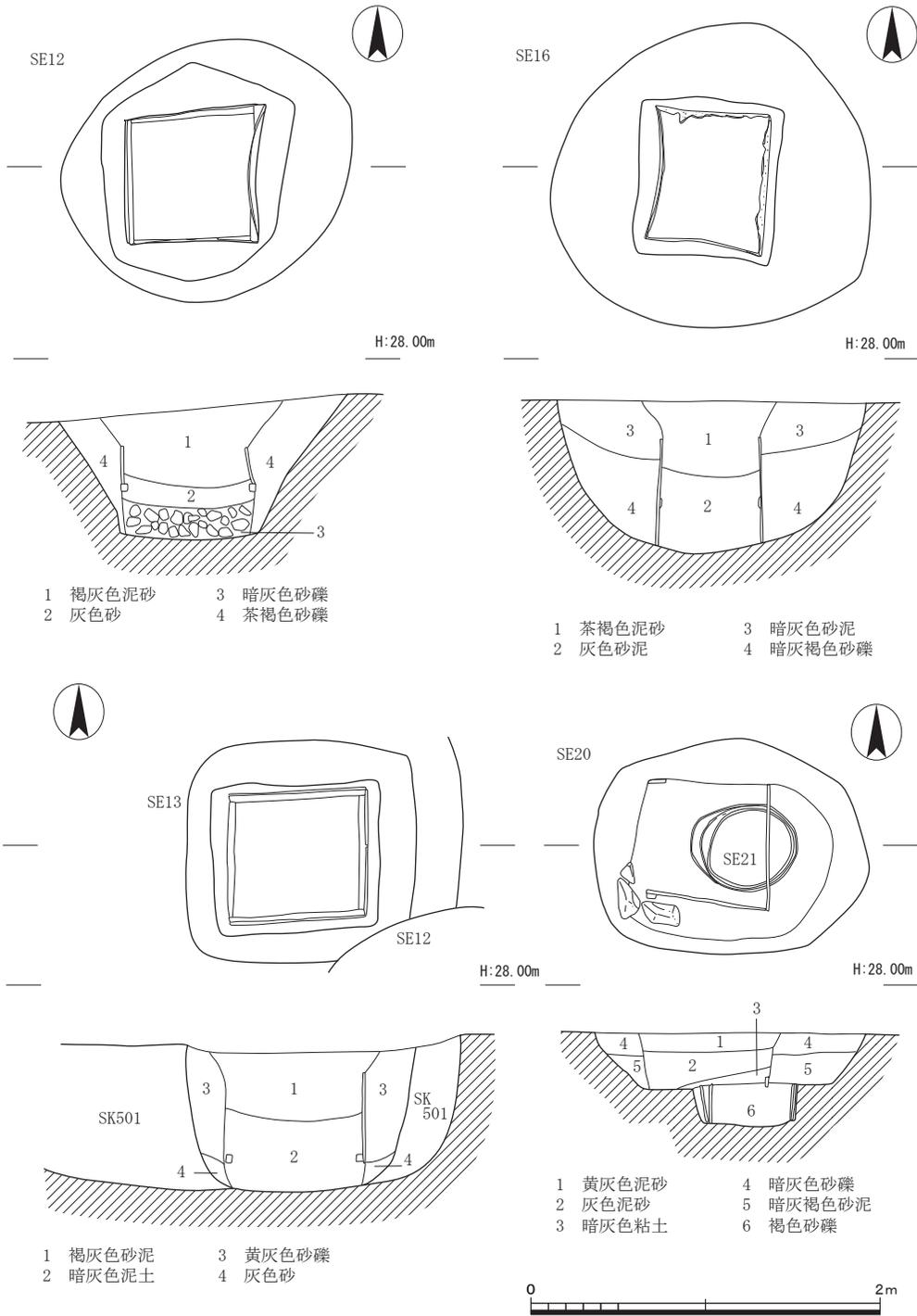


插图7 I·II期井戸(1:40)

堀形から土師器皿、陶器Ⅱ類甕、瓦を検出した。井戸枠内では土師器皿、瓦器碗・鉢・鍋、陶器Ⅰ類鉢・甕、陶器Ⅱ類甕、輸入陶磁器碗・盤、瓦片などが出土した。また少量であるが堀形内、枠内から平安時代の土師器、緑釉陶器が出土している。

#### 土壌

**SK478** G2区、第3面の褐灰色砂礫を切り込む土壌である。規模は、南北約1.2m、東西約1.1mの円形で、深さは検出面より約25cmを測り播鉢状をなす。埋土は暗灰色泥土で、焼土、炭、炭化物を多量に含んでいる。出土した遺物は、土師器皿、瓦器皿・碗・鉢、陶器Ⅰ類鉢、陶器Ⅱ類甕、輸入陶磁器碗、瓦、金属製品などである。土壌内から20点ほどの土師器皿が出土したが、これと共に、植物の種子、小動物の骨、魚の骨などを多量に検出した。SK478は廃棄孔と推測できる。

#### Ⅲ期の遺構

Ⅲ期は、第1面、第2面を切り込む遺構を包括する。検出した遺構は、溝23、井戸10、土壌472、ピット121、その他の遺構5である。Ⅲ期は1面、2面との間に時期差が認められる。また各面の遺構間にも、わずかであるが時期差が認められるものがある。ここでは、検出した遺構の中からⅢ期の二つの面を代表できる遺物が出土した遺構や、特殊な遺構である溝SD12、井戸SE1・5・8・10、土壌SK7・10・11・14・16・17・23・75・132・144・146・147・304、その他の遺構SX1・2・3・4・5などを取り上げたい。

#### 溝

**SD12** F1～3、E1～3区の6地区のまたがる第1面の暗茶褐色混礫泥砂を切り込む南北溝で、上面に礫が敷き詰められる。北部が調査区外へのびて全体の規模は不明であるが、長さ12.4m以上、幅1.1～1.8mを測る。深さは検出面より50～60cmを測るが、南に向かってしだいに浅くなり、E1、F1区の中ほどで途切れる。また、F2区の中ほどで東に張り出し、長さ約5m、幅30～50cmほどの突出部となる。

SD12を完掘後にSE17を検出した。堆積状況は3層に分かれ、上層が暗灰色泥砂で長径5～20cmくらいの自然石（円礫）がぎっしりと詰まり、土器・陶器・瓦・甕などを多量に含んでいた。中層は黄灰色泥砂で、礫の包含量は少なくなる。下層は淡灰褐色泥砂で礫をほとんど含まない。出土した遺物は、土師器皿・鉢・塩壺、瓦器皿・碗・鉢・鍋・釜、陶器Ⅰ類鉢・甕、陶器Ⅱ類播鉢・壺・甕、施釉陶器Ⅰ類皿・碗・壺、施釉陶器Ⅱ類皿・碗・鉢・壺、輸入陶磁器皿・碗・盤・壺、瓦、甕、石製品、鉄製品、埴埴、鋳型などである。底部から、口縁部に漆で補修した青磁碗（挿図22-485）、片口を持つ壺（挿図22-486）を

検出した。

SD12は溝状を呈するが、水の流れていた痕跡は認められない。また溝内に多量の礫がみられるが、敷き方に意図的なところも認められない。しかし、当遺跡内に検出した地業と考えられるSX5やSX3などの石敷きの遺構と時期的に差がみられず、構造的に類似し、方向的にそろっている点などから、何らかの建築物の地業である可能性が考えられる。これらの礫中には、直径70cm、高さ50cmほどの造り出しを持つ礫石や延石、地伏石と思われる長さ70cm、幅60cm、高さ50cmの長方形の石材、長さ40cm、幅20cm、高さ20cmで半分以上欠損した長方形の石材2個が検出されている。

### 井戸

SE1 C7区、第2面の暗黄灰色混礫泥砂を切り込み成立する井戸で、規模は堀形が南北約1.9m、東西2.2mの長方形で、最深部1.6mを削る。堀形の東側に片寄った木製桶からなる井戸枠を持ち、検出面から約50cm以下から底部まで桶が残存する。最大径90cm、底部で80cmを測る。9枚の板を使用しており九角形を呈する。板は長さ1.2m～1m、幅は平均30cm、厚さは平均2cmである。各板と板の継ぎ目の裏面に幅10cmの薄板があてられ、隙間を埋めている。堀形内の埋土は、大きく2層に分けられ、砂礫と泥土が交互に堆積する上層と、灰色砂礫からなる下層である<sup>注5</sup>。井戸枠内の堆積は3層に分けられ、上層は砂、泥土、砂礫混合の暗灰褐色泥砂である。中層は暗褐色砂泥で、下層は砂礫と泥砂が混入する灰褐色砂礫である。

出土した遺物は、堀形内から土師器皿、瓦器椀・鍋・釜・鉢、陶器Ⅰ類鉢・壺・甕、瓦、平安時代の土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器などが若干量ではあるが認められた。井戸枠内からは、土師器皿が多量に出土し、瓦器椀・鍋・釜、陶器Ⅰ類鉢・甕、陶器Ⅱ類椀・搦鉢・甕、施釉陶器Ⅰ類椀、施釉陶器Ⅱ類椀・鉢・壺、輸入陶磁器皿・椀・香炉・鉢・盤・壺、瓦、甕、錢貨、石製品、金属製品などを検出している。これらの遺物は、上部から底部にかけ全体的に分布していた。

SE5 B2区、第1面の暗茶褐色泥砂を切り込む井戸である。B1・2区の大半を占める地下式の大きなガソリタンクの攪乱を掘り下げ中に、北壁面に検出した。上部構造の半分がこの攪乱により破壊されており、全体の規模は不明であるが、堀形は直径1.5mほどで、円形と推定できる。深さは検出面より90cmを測る。井戸枠は方形で、深さ90cmである。構造は、上部が石組みで北側の2辺が残る。辺長は北西辺80cm、北東辺1mで、2～4段に20～40cmの自然石を積み重ねており、高さ30～40cmが測れる。下部は木枠とな

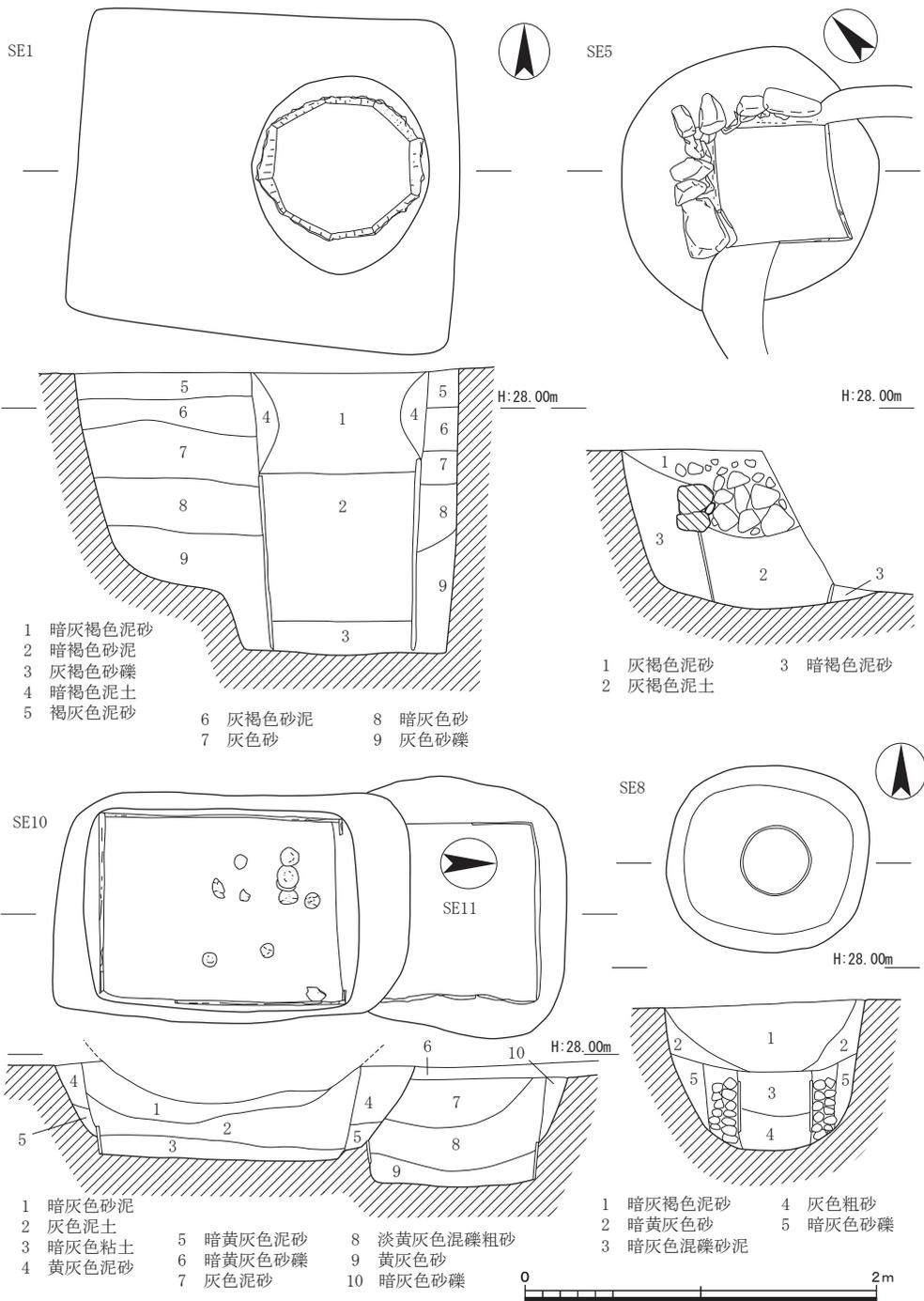


插图8 II·III期井戸(1:40)

り、長さ 50～60cm、幅 20～40cm、厚さ 2cm の板を横に置き、西側は幅の広い板 1 枚で、他は二枚を積み重ねて組み合わせるが、梁、椽状のものは使用していない。

堀形が暗褐色泥砂の単一層で、小礫を若干混入する。井戸枠内は大きく 2 層に分かれ、上層は灰褐色砂泥で焼土を含み、石組みの崩れ落ちたと思われる大きい石が 20 個ほどみられた。下層は灰褐色泥土である。出土した遺物は、堀形から土師器皿、瓦器釜・鉢、陶器Ⅱ類甕、瓦などと一片ではあるが古墳時代の須恵器杯身がみられた。井戸枠内からは、土師器皿、瓦器椀・鉢・釜、陶器Ⅰ類鉢、陶器Ⅱ類播鉢・壺・甕、輸入陶磁器皿・椀、甑などがある。

**SE8** G2 区、第 2 面の褐灰色砂礫を切り込む井戸である。SE8 の規模は、堀形の直径が南北約 1.1m、東西約 1.3m のほぼ長円形で、深さ 80cm である。井戸枠と考えられるものは残っていないが、検出面より約 40cm 下中央で、直径約 40cm の木製の曲物が認められた。曲物は高さ約 30cm で、厚さ 5mm の薄板を二枚合わせ、板と板を桜の皮でつないでいる。曲物を据えるために、堀形に拳大の自然石を多量に入れて裏込めになっている。堆積は、堀形の上半部が 2 層に分けられ、上層は暗褐灰色泥砂で炭化物をかなり含んでいる。下層は暗黄灰色砂である。堀形の下半部は暗灰色砂礫である。曲物内は 2 層に分けられ、上層が暗灰色混礫砂泥、下層は灰色粗砂である。出土した遺物は、堀形上半部から土師器皿、瓦器鉢・釜、陶器Ⅰ類鉢・甕、陶器Ⅱ類甕、瓦、埴埴がある。曲物内には土師器皿、陶器Ⅱ類甕、瓦が認められた。堀形下半部には遺物が認められなかった。堀形、曲物内を通じて、若干量であるが平安時代の土師器、須恵器が出土している。

**SE10** A6・B7 区、第 2 面の暗黄灰色混礫泥砂を切り込む遺構である。規模は、堀形が南北約 2m、東西約 1.3m の長方形で、深さは検出面より約 55cm を測る。井戸枠は木組みで、南北約 1.4m、東西約 1.1m の長方形とみられる。腐食が激しく基底部の北側は 10cm ほどの高さで横板が残っていただけであり、構造の細部は観察できなかった。堆積状況は、堀形内が 2 層に分かれ、上層は黄灰色泥砂であり、下層は暗黄灰色泥砂である。井戸枠内は 3 層に分かれ、上層が暗灰色砂泥で小礫を含んでいる。中層は灰色泥土で炭化物を若干含んでいる。下層は暗灰色粘土である。出土した遺物は、井戸枠内から土師器皿・盤、瓦器皿・椀・鉢、陶器Ⅰ類鉢・甕、陶器Ⅱ類甕、輸入陶磁器皿・椀・盤、瓦、石製品、埴埴などがある。若干量であるが平安時代の須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器がみられた。特に下層から、土師器皿の完形品が多く出土した。堀形内から遺物は出土しなかった。SE10 の上部は、第 2 面から切り込む土壇・ピットなどに切られていた。

## 土壙

**SK7** B3区、第1面の暗茶褐色泥砂を切り込む土壙であり、土壙の北側に桶を検出した。規模は、土壙が南北約1.1m、東西約1mの円形で、深さは検出面より約45cmが測れる。桶は、土壙を30cmほど下げたところで検出した。上半部は欠損しているが正立の状態で底板と側板が残り、直径50cm、高さ15～18cmを認めた。底板は、厚さ2cmほどの板を木釘を使用して繋ぎ合わせている。側板は幅約8cm、厚さ1cmほどの縦板を20枚組み合わせ、底板の部分を外側からたがで締めている。底板近くまで落ち込んだ状態で、円形の天板を検出した。堆積状況は土壙の上層に灰褐色泥砂があり、桶の堀形に茶褐色泥砂がみられる。桶内は2層に分かれ、上層が暗青灰色泥土で炭化物をかなり含み、下層が暗灰色泥土である。出土した遺物は、堀形から土師器皿・鉢、瓦器皿・鉢・鍋・釜、陶器Ⅱ類皿・椀・甕、輸入陶磁器盤、瓦を検出した。桶内からは土師器皿。陶器Ⅱ類椀・甕、輸入陶磁器椀、瓦、銭貨がみられた。SK7は井戸とは考えられず、用途のはっきりしない遺構である。

**SK11** B4区、第1面の暗茶褐色泥砂を切り込む浅い土壙である。規模は、南北の最長部約1.5m、東西の最長部1.2mで、不整な長方形をなす。深さは検出面より約20cmが測れる。堆積状況は壙内の最下部まで、小礫や長径30cmの礫を詰めて突き固めており、礫間に暗茶褐色泥土がみられた。また、壙内にかんりの量の土器・瓦・甎が混じっていた。出土した遺物は土師器皿・鉢・塩壺、瓦器椀・鉢・鍋・釜、陶器Ⅰ類鉢、陶器Ⅱ類甕、輸入陶磁器皿・椀・壺、瓦、甎、埴塙などである。SK11は単独では性格が不明であるが、当遺跡内のSX5やSX3などと考え合わせると、一種の地業と思われる。同様の状況を呈する土壙SK12・13と切り合う<sup>注6</sup>。

**SK14** C3区、第1層の暗茶褐色泥砂を切り込む土壙である。規模は、南北約75cm、東西約135cmの長方形で、深さは検出面より約35cmが測れる。壁面がほぼ垂直に切り落とされ、底部も平坦なため、全体の形状は箱形をなす。土壙の底部には四隅と各辺の中間部の、7ヶ所に直径5cm未満の木杭を打ち込んでおり、東壁と西北壁の三ヶ所で木杭と壁面の間に縦板が残っていた。堆積状況は3層に分けられ、上層が暗褐色砂泥、中層が暗灰褐色砂泥、下層が黒褐色泥土の腐植土である。出土した遺物は、土師器皿を多量に検出した他に、瓦器皿・椀・鍋・釜、陶器Ⅰ類鉢、陶器Ⅱ類甕、輸入陶磁器皿・椀・盤、瓦、釘、埴塙などがみられた。SK14は、杭と壁面の間に横板が入れられ、土留めであると推定できる痕跡があることから、貯蔵用の施設<sup>注7</sup>の一種と考えている。

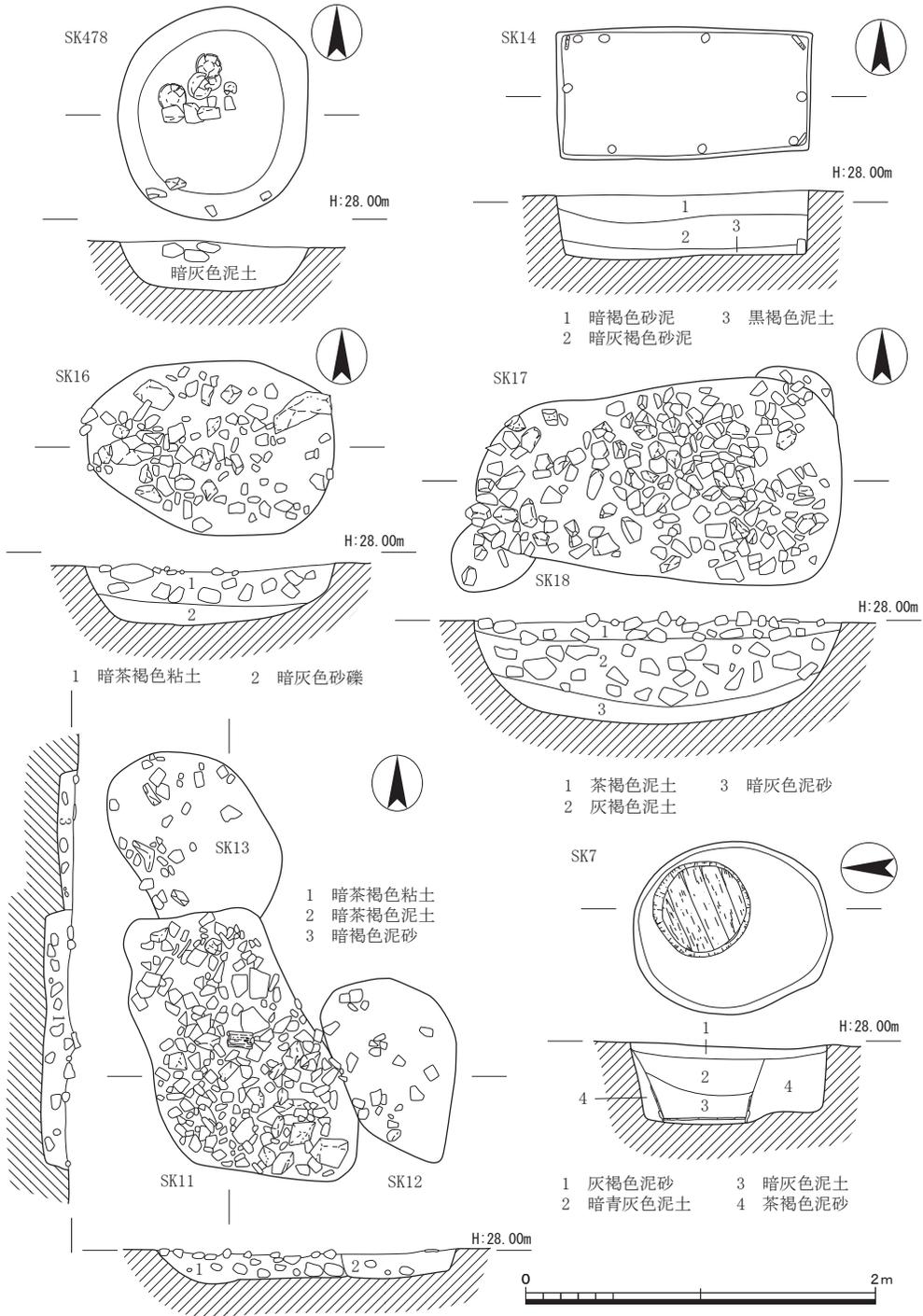


插图9 II·III期土壤(1:40)

**SK16** C2区、第1面の暗茶褐色泥砂を切り込む土壌である。規模は、南北約1m、東西約1.4mの長円形である。深さは、検出面より約35cmを測る。堆積状況は2層に分かれ、上層は暗茶褐色粘土で、層中に長径5～30cmの自然石や瓦片が多量に認められた。下層は暗灰色砂礫で焼土・炭化物を多量に含んでいた。出土した遺物は土師器皿、瓦器皿・椀・鉢・鍋・釜、陶器Ⅰ類鉢・甕、陶器Ⅱ類播鉢・甕、施釉陶器Ⅱ類皿・椀・鉢・壺、輸入陶磁器皿・椀・合子・壺、瓦、甗、釘、埴埴、鋳型、焼土塊などである。

**SK10** B3区、第1面の暗茶褐色泥砂を切り込む土壌である。規模は、南北径が約90cm、東西径が約85cmの不整な円形で、検出面より深さ約40cmを測る。土壌内には、備前焼（陶器Ⅱ類）と思われる甕が体部の上半を欠失して正立していた。<sup>注8</sup>この甕は上半部のみでなく、下半部の約1/2の部分も欠けている。また、土壌内や土壌の周囲からも同一破片は検出できなかった。堆積は、土壌内上部の埋土が褐色砂泥で、瓦を多量に含む。堀形は暗褐色灰色混礫泥砂である。甕内は2層に分けられ、上層が灰褐色泥砂で、上面に多量の瓦が散乱していた。下層は暗灰色泥砂で、炭、木片などがかなり混入していた。出土遺物は、甕の埋土から、土師器皿、瓦器皿・椀・鉢・鍋・釜・盤、陶器Ⅰ類鉢・甕、陶器Ⅱ類椀・甕、輸入陶磁器椀、瓦、銭貨、鋳型などがある。暗褐色灰色混礫泥砂からは、少量であるが土師器皿、瓦などが出土した。SD10の褐色砂泥から出土した瓦の多くは二次焼成を受けていた。

**SK75** B5区、第2面の褐色泥砂を切り込む土壌である。規模は、南北の径が約75cm、東西の径は約85cmで、東側のふくらむ不整な円形をなす。深さは検出面から約35cmである。壙内には、常滑の甕が正立している。甕の上半部は東側から押し潰された状態で、甕の内部に頸部、肩部の破片が落ち込んでいた。<sup>注9</sup>遺物整理の際に甕の復元作業を行ったが、口縁部の破片是一片もなく、頸部の接合部より故意に打ち欠いたと考えられる。堆積は、土壌内が暗灰色泥砂であり、甕内は茶褐色泥土で炭化物や焼土のブロック、細かい骨片<sup>注10</sup>を含んでいた。出土した遺物は、甕内から土師器皿、瓦器皿・鉢、陶器Ⅰ類鉢・甕、陶器Ⅱ類鉢・壺・甕、輸入陶磁器椀、瓦、鉄片などを検出した。また、平安時代の黒色土器、緑釉陶器が数片認められた。土壌内の暗灰色泥砂から、遺物は出土しなかった。

**SK132** B3区、第2面の暗黄褐色泥砂を切り込む土壌である。規模は、南北が約1.15m、東西が約75cmの不整な長円形をなし、深さは検出面より約25cmを測る。土壌内から陶器Ⅱ類甕の破片、礫を多量に検出した。<sup>注11</sup>堆積は2層に分けられる。上層が灰褐色泥砂で、焼土・炭化物が混入していた。下層は暗茶褐色泥砂で、甕の破片はほとんどがこの層から出土している。出土した遺物は、土師器皿、瓦器椀・鉢、陶器Ⅰ類鉢・甕、陶器Ⅱ類甕、輸

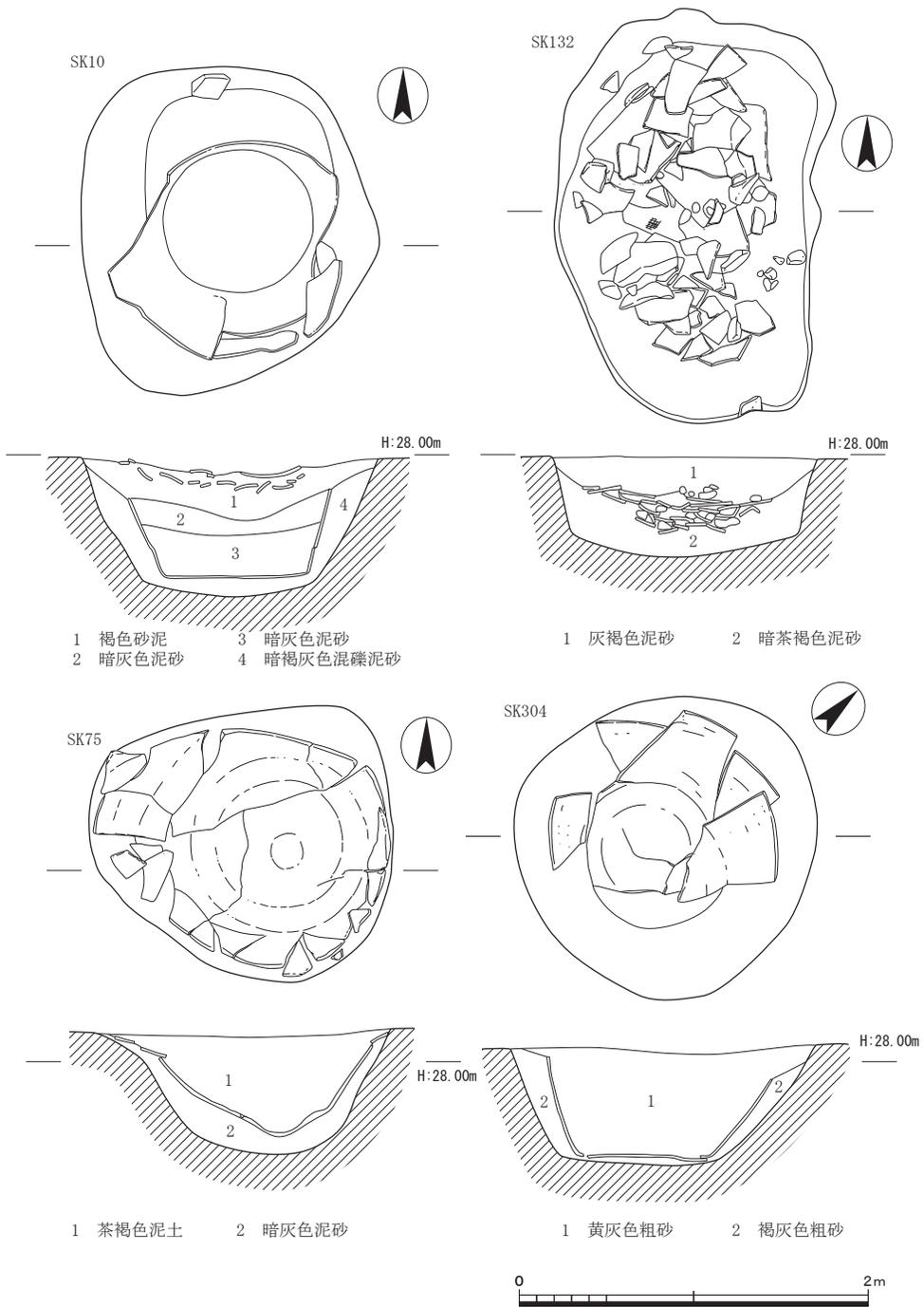


插图10 III期土坑(1:40)

入陶磁器椀・盤、瓦、釘などである。遺物整理事業に際して、出土した甕（図 26-461）の接合作業を行った結果、口縁部を欠くが頸部から底部まで約 1/4 を復元できた。SK132 の甕は SK75 や SK10 の甕のように正立させ据えたのではなく、破損したものを、穴を掘り廃棄したものである。

**SK304** A2 区、第 1 面の SX5 を完掘したのちに検出した暗黄褐色泥砂を切り込む土壌である。規模は南北約 90cm、東西約 85cm の円形で、深さは検出面より約 30cm が測れる。土壌内から備前焼の甕（図 26-461）の底部及び下半部の約 1/2 を正立と思われる状況で検出した。<sup>注12</sup>この甕は遺物整理の際復原作業を行ったが、接合できる破片数は少なく、総破片数の半分程である。堆積状況は、甕内が黄灰色粗砂である。掘形は甕の残存状況が悪く観察できた部分は少ないが、第 3 層の褐灰色砂礫混泥砂と区別しがたい褐灰色粗砂である。出土した遺物はきわめて少数で、土師器皿。陶器 I 類鉢のほかには平安時代の須恵器、緑釉陶器がみられる。SK304 は SX5 の整地の際に大きな破損をうけたものである。

**SK146** D2 区、第 2 面の暗黄褐色泥砂を切り込み、直径約 30cm で、深さ約 12cm の堀形に、口径 28cm、器高 10cm の陶器 I 類の鉢（図 24-407）を正立して据える。堆積は、堀形が暗茶褐色泥砂である。鉢内は暗灰色泥砂で、層中に焼土・炭化物・灰が多量に含まれていた。また骨片がわずかに認められた。<sup>注13</sup>出土遺物は、鉢を除くと土師器皿、銭貨がみられたのみである。銭貨は元豊通寶、政和通寶、紹聖元寶など 7 枚である。これらは六道銭貨と解釈でき、骨片、焼土と合わせて、火葬骨の蔵骨器として使われたと推定できる。

**SK144** C5 区、第 2 面の暗茶褐色泥砂を切り込み、直径約 30cm、深さ約 18cm の堀形内に瓦器の鍋（図 22-357）を正立させて据える。鍋は東側の口縁部が押しつぶされ、内側に倒れこんでいた。堆積状況は、堀形内は暗褐色泥砂である。鍋内は暗灰褐色泥砂で焼土と少量の細かい骨片などの炭化物を含んでいた。出土遺物は、鍋の本体以外に土師器皿、瓦器椀・鉢、輸入陶磁器皿がある。

**SK147** A3 区、第 2 面の暗黄褐色泥砂を切り込む土壌である。規模は南北約 2.1m、東西約 40cm で、非常に細長い楕円形である。深さは、検出面より約 35cm が測れる。堆積状態は 2 層に分かれ、上層が暗灰褐色泥土で焼土・炭化物を含み、径 5 ～ 20cm の礫が詰まっていた。礫の下部から土器、瓦、甗などが多量に出土している。下層は暗灰色泥砂で、礫はほとんど含まない。出土遺物は、土師器皿、瓦器椀・鉢・釜、陶器 I 類鉢、陶器 II 類片口鉢・播鉢・甕、輸入陶磁器皿・椀・壺、瓦、甗、砥石などである。出土した土器の接合作業を行った結果、備前甕（図 26-458）の上半部約 1/2、陶器 I 類鉢（図 26-450）の 2 個

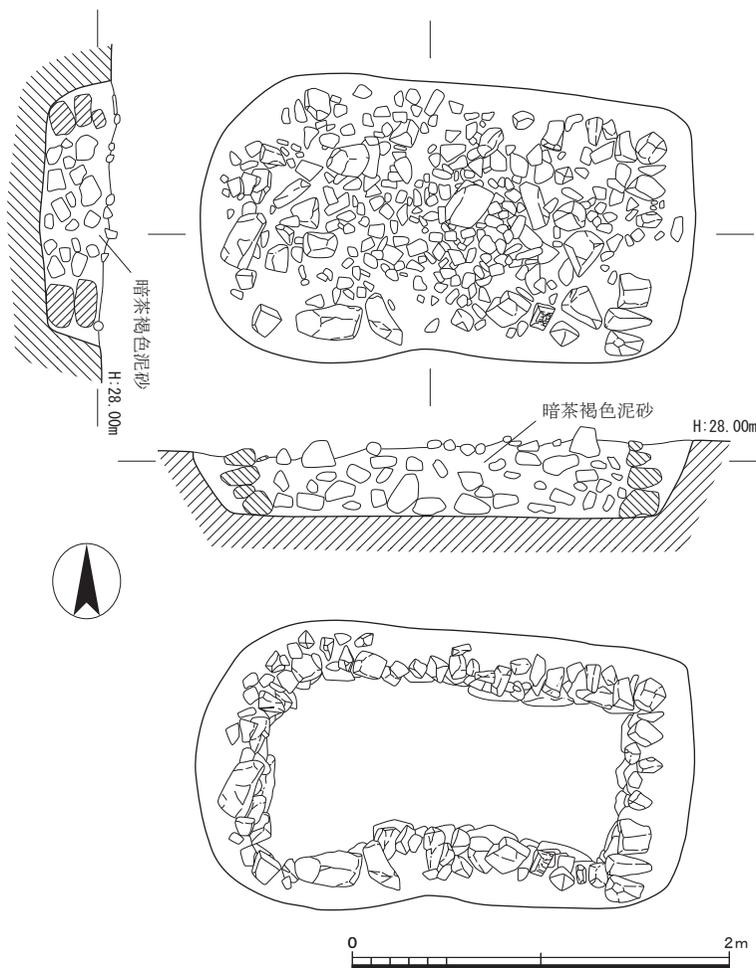
体が復元できた。

**SK23** D2・3区の第1面、暗茶褐色泥砂を切り込む遺構で、石室を構成する。規模は、堀形が南北約1.4m、東西約2.65mで西側に丸みを帯びる隅丸の長方形である。深さは、検出面より約35cmを測る。石室は、南北約70cm、東西約1.8mの長方形で、西北の隅に角を造らず丸く仕上げている。また南側の辺が、押し出されたように内側にふくらんでいる。構造は、径10～30cmの角張った石材を用い、内側に面を整えて二～三段に組み上げるが、丁寧さを欠く。床面は黄褐色泥砂を叩き締めている。堆積状況は、堀形内が灰褐色泥砂で小礫をかなり含むが、小礫を裏込めに使用した様子はない。石室内は暗茶褐色泥砂で大小の礫が詰められていた。出土遺物は、堀形内より土師器皿、瓦器鉢・鍋・釜、陶器Ⅰ類鉢、陶器Ⅱ類椀・甕、輸入陶磁器椀・盤、瓦を検出した石室内は土師器皿、瓦器鉢・鍋・釜、陶器Ⅰ類鉢、陶器Ⅱ類播鉢・甕、輸入陶磁器皿、瓦、甕、埴埴などが認められた。また石組みにも、甕、瓦などを石材間の充填に使用しているのが認められた。

**SK17** C2区、第1面の暗茶褐色泥砂を切り込む土壇である。規模は、南北辺約1.2m、西辺約80cm、東西辺約2.1mで不整な隅丸の台形をなし、深さ約60cmを測る。土壇内には長径5～20cmの自然石が多量に認められたが意図的に敷き詰めてはいない。堆積状況は3層に分けられ、上層が茶褐色泥土で礫が多い。中層は灰褐色泥土で上層に比べ大きい礫が増える。下層は暗灰色泥砂で礫はほとんど含まない。出土した遺物は、土師器皿・塩壺、瓦器皿・鉢・鍋・釜、陶器Ⅰ類鉢、陶器Ⅱ類椀・甕、輸入陶磁器椀、瓦、砥石、埴埴などである。

### その他

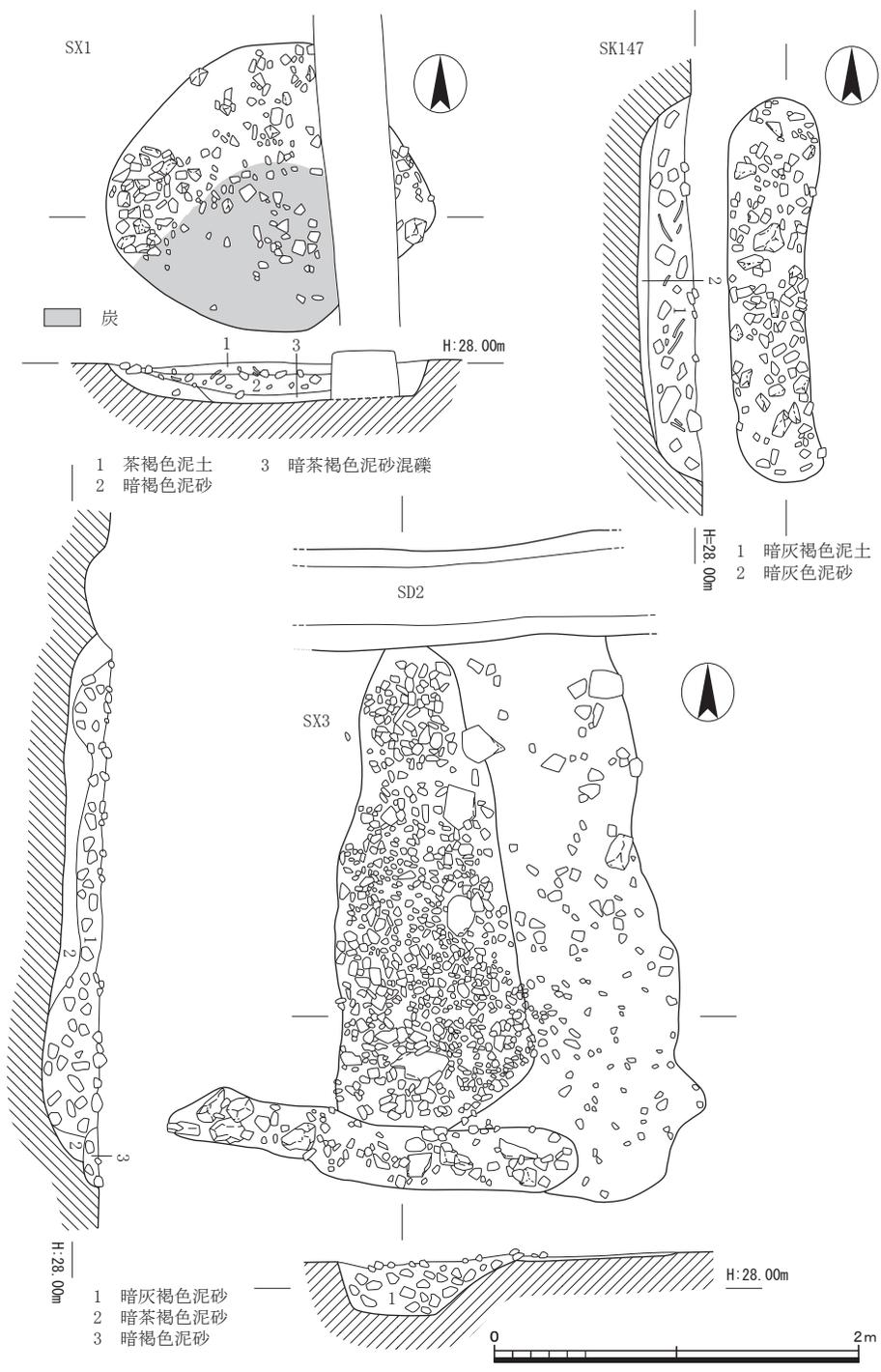
**SX1** C2区、第1面の暗茶褐色泥砂を切り込む遺構である。規模は、南北約1.6m、東西約1.8mの不整な円形で、深さは検出面より平均20cmを測り、遺構の底部は平坦である。上面には拳大の礫や瓦が多量に認められるが、礫が周縁部に分布し、中央部に瓦、土師器などが集中する傾向がみられた。埋土は3層に分けられ、上層は茶褐色泥土で炭を多量に含んでいる。中層は暗褐色泥砂で炭や焼土をほとんど含んでいない。下層は暗茶褐色泥砂混礫である。炉壁あるいは壁土の焼けかたまつたような小礫、スサを含む焼土の塊が多量に出土した。これらは大部分を上層の炭層から検出したが、下層の混礫層からも数片を検出した。また火を受けた瓦や燃えかすと思われる炭などがみられるが、遺構の壁面や底部は焼けかたまつてはいなかった。出土した遺物は、土師器皿・鉢、瓦器椀・鉢・鍋・釜、陶器Ⅰ類鉢・甕、陶器Ⅱ類椀・播鉢・壺・甕、輸入陶磁器椀・盤・壺、瓦、釘、埴埴、炉



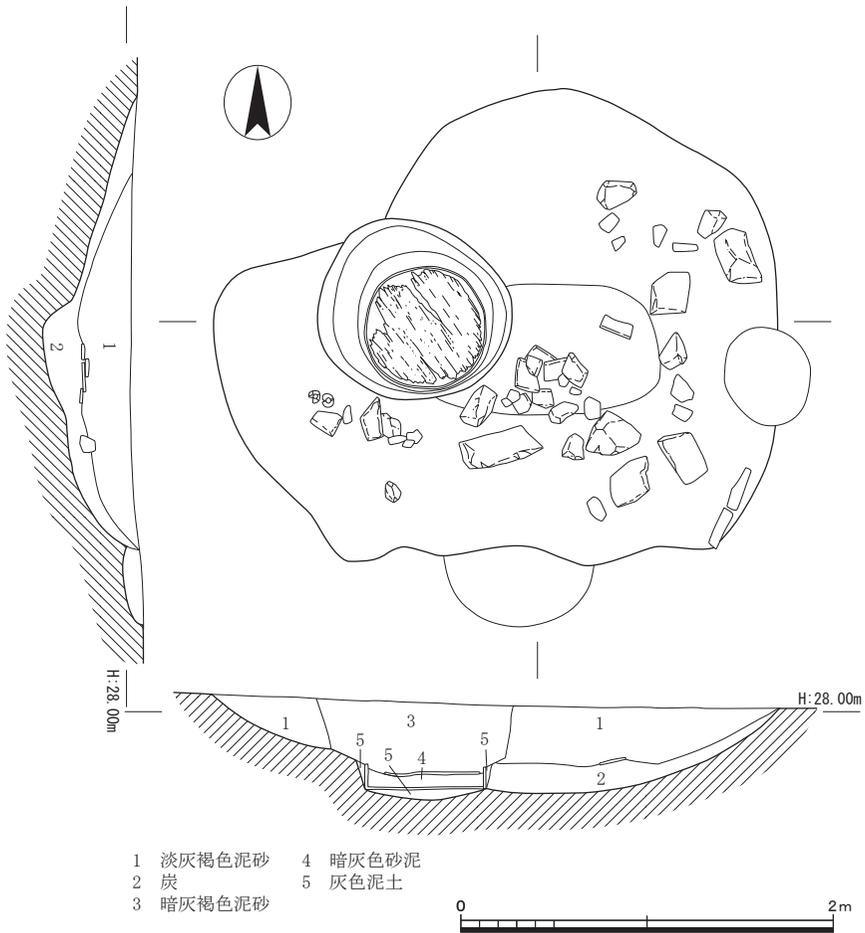
挿図11 SK23(1:40)

に使われる道具類、鋤滓などである。上層は炭に混じって土師器の皿が多く出土した。

**SX2** A3区、第1面の暗茶褐色泥砂を切り込む遺構である。規模は、南北約1.8m、東西約2.8mの不整形形で、深さは最深部で検出面より約45cmを測る。北西部を土壌SK22に切られる。堆積状況は2層に分かれ、上層が淡灰褐色泥砂であり、下層は炭の堆積層で焼土をかなり含んでいる。緩やかに下る肩口と中央部に東西に長い凹部を持つ。周縁部や凹部の周囲に、炭の層に覆われた径10～40cmほどの石や瓦、甗を検出した。これらの石、甗は東側、北側の一部が原位置を保っている。しかし他は落ち込んだ状態で移動している。また、多量の炭・焼土がみられるが、遺構内の壁面や底部は焼けかたまった様子はみられ



挿図12 Ⅲ期土壌・その他の遺構(1:40)



挿図13 SX2断面図の3~5は土壌SK22(1:40)



挿図14 SX3断面(南西から)

なかった。出土した遺物は、土師器皿・鉢、瓦器皿・椀・鉢・鍋・釜、陶器Ⅰ類鉢、陶器Ⅱ類皿・椀・播鉢・壺・甕、輸入陶磁器皿・椀・合子・壺、瓦、甗、石製品、鉄製品、埴塼、鋳型、鋳滓などである。

SX2 を切る土壌 SK22 は、南北約 1m、東西約 1m の円形で、深さ約 60cm を測る。底部に直径約 70cm の桶を持つ。桶は残存状態が悪く、かろうじて天板・底板を認めた。

SX3 D3 区、第 2 面暗黄褐色泥砂を切り込む石敷き遺構である。石敷きの分布の範囲は、南北約 3m、東西の北側は約 1.2m、南側は西へ突き出し、約 2.75m である。この石敷きの上面に礫石状の平坦な 20～30cm の石が、ほぼ直線上に 4 個並ぶのが認められた。SX3 は西部が溝状に深くなっており、南北 2.9m、東西は南に向かって広くなり幅 0.7～1m で、深さは検出面から 20～35cm を測る。この溝状の部分以外はすべて浅く 5～10cm の暗灰褐色泥砂中に小礫が詰められている。溝状部分の堆積状況は 2 層に分かれ、上層が暗灰褐色泥砂で小豆大から長径 10cm ほどの礫が詰まり、叩き締めたような状態である。下層は暗茶褐色泥砂で礫は少なく、焼土・炭化物を含んでいる<sup>注15</sup>。

出土した遺物は、土師器皿、瓦器椀・鍋、陶器Ⅰ類鉢、陶器Ⅱ類壺・甕、輸入陶磁器皿・椀・盤・壺、瓦、釘などである。礫層から出土した遺物量は少なく、大部分は下層からである。下部や遺構の周辺に特別な施設は認められない。しかし、礫層の上部には礫石と思われる石がいくつかみられ、そのうちの 2 個は、平坦な面を上にして下部を礫でかためている状態がみられることから、一種の地業ではないかと考えられる。

SX4 A7 区、第 2 面暗黄灰色泥砂混礫を切り込む遺構である。北側、西側が調査区外にかかるため全体の規模は不明であるが、南北約 4.5m 以上、東西約 3.5m 以上の、ほぼ長方形をなす範囲に礫敷きがみられた。深さは検出面より約 65cm を測る。この遺構は残存状況が良くないが、東側に長径 30～70cm の石材を用い、西に面をそろえ石垣を組み上げている。また、南側にも石垣があったと考えられ、礫敷きの南端に石材の抜き取り跡と思われる窪みを二箇所検出した。また径 30～40cm ほどの石材が礫敷きの上面に散乱していた。堆積は 3 層に分かれ、上層が黄褐色泥砂で、この層を取り除くと礫敷きの面になる。中層は灰色砂泥を含む礫層で、径 3～20cm の礫が厚さ 10～20cm の層の間に詰まっており、礫と共に多量の瓦、甗がみられた。下層は暗茶灰色泥土の腐植土で礫や遺物をほとんど含まない。しかし石垣の裾の部分は暗茶灰色泥土に小礫が混入して堆積する<sup>注16</sup>。出土した遺物は、土師器皿・杯、瓦器椀・鉢・鍋・釜、陶器Ⅰ類鉢・甕、陶器Ⅱ類皿・椀・甕、輸入陶磁器椀・盤・壺、瓦、甗、鉄製品、埴塼などである。

砂礫を一段低く掘り下げ石垣を組み、石垣の内側に小礫を無造作に敷き詰め困んでいる。この石垣が原位置を保って、礫敷きの下や礫の間に腐植土、木片などが澱み状態となり、池状堆積を呈している。暗茶灰色泥土の上に礫敷きの面がみられることは、石敷きを増設した可能性が考えられる。

石組みには礎石や礎石を半割りしたものを転用しており、同時期の溝状遺構 SD12 で検出した礎石などを含め、これらの遺構が成立する以前に建物のあったことが推測できる。SX4 を完掘ののち SE12・13 を検出した。

**SX5** A1・2、B1・2 区の 4 区にまたがる第 1 面、暗茶褐色泥砂を切り込む石敷きの遺構である。西側と南側が調査区外にのびるため全体の規模は不明である。検出した礫敷きの範囲は、南北約 8.6m、東西約 6.2m の方形である。北端に、礫の詰まった東西の溝部分が長さ約 4m、幅約 70cm、深さ約 15cm でみられた。東北部には、張り出した礫敷きの広がり南北約 3m、東西約 3m の範囲でみられた。SX5 は礫の密な部分と、疎な部分があり、数ヶ所で攪乱されるが、縁の部分は礫の密度が高く、また内側でも 4ヶ所で礫の集中する部分が見られた。礫敷きの堆積の厚さは 20～30cm で、灰褐色泥砂や黄褐色泥砂などの入り混じった埋土に径 3～20cm までの自然石を包含する。層中には土器・陶器、瓦、甗などが多量に認められた。出土した遺物は土師器皿・杯・鍋・釜・塩壺、瓦器鍋・釜、陶器 I 類鉢、陶器 II 類播鉢・甕、施釉陶器 I 類椀、施釉陶器 II 類皿・椀・鉢・鍋、輸入陶磁器皿・椀・合子・鉢・壺、瓦、甗、土製品、石製品、鉄製品、埴塼、鋳型などがある。各種の土が入り混じっており、礫の集中する部分があるため、土壌状のものが切り合うとして調査を行った。しかし、掘り下げると礫層の厚さがほぼ一定であることが判明した。このことから小さい遺構の集まりではなく、全体で一つの石敷きの遺構であると考えに至った。他の遺跡と同様の遺構を求めるなら、時期は古くなるが鳥羽離宮跡の調査で検出されている南殿・東殿などの遺構の礫敷地業と類似しており、SX5 は地業の可能性が高い。

### 3 小 結

**生産跡について** III期・第 1 面で検出した遺構 SX1・2 を、遺構や周辺から出土した埴塼、鋳型、その他の道具などの遺物から、金属製品の加工・生産跡と推定した。SX1 は、土壌内を礫・瓦が混入した泥砂で突き固めていることや、その上面に薄い炭の層がみられることから炉床と考えられよう。また、炉壁を思わせるスサ混じりの焼土の塊が炉床の上面や炉床内から 117 片あまり出土したことは、上部が炉状の構造を持っていたと推定できる。SX2 は、不定形の土壌の中央部をやや深く掘り込み、その周辺に石組みの痕跡がみら

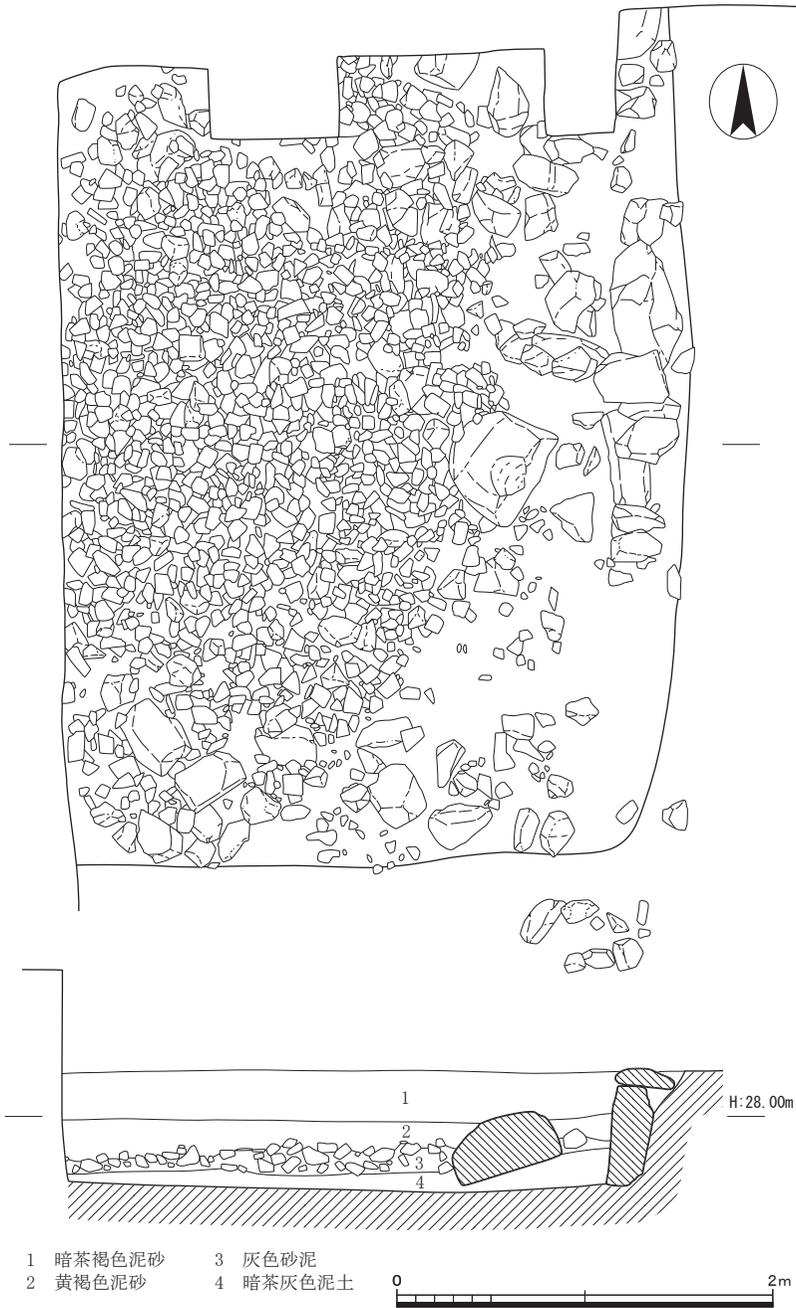


插图15 SX4 (1:40)

れるもので、炭の堆積が非常に多い。SX1 同様に焼土塊が多く出土した。

SX1・2の生産跡としての性格は、製鉄場（タタラ）跡と比較した場合、構造的に類似する点が見られるが、製鉄場跡にはつきものの鉄滓（スラッグ）がSX1・2内ではまったく出土せず、また調査面でも両遺構からかなり離れた地点で第1面遺物包含層内から数点が出土したのみであった。

SX1・2と周辺から出土した坩堝は大部分が緑青を吹いている。また坩堝に付着した鋳物残滓の蛍光X線分析では、<sup>注18</sup>銅・錫・鉛が認められ、ほぼ青銅に近い合金であるという結果を得た。小型の坩堝の一部に金・銀を溶解した痕跡を認めた。鋳型には、銭貨・釘かくし・飾り金具・瓶などがあるが、明確な鋳物残滓のみられるものはない。しかし、これらは組成が粗く耐火度も低い点から溶解温度の低い金属の鋳型と考えられる。

上記の理由により、SX1・2を非鉄金属（青銅など）の加工、鋳造遺構と考えた。

これらの金属を溶解する炉であるが、SX1・2の炉床上面が解け固まっていないことは、検出面においてすでに焼土層が削平されている可能性を除けば、これらの炉床がそのまま火床であったと考えるより、形態、構造は不明としても高い位置に実際の火床が造られたと考える方が良いと思われる。

SX1・2の操業時期、期間であるが、出土遺物からは両遺構とも14～15世紀の時期が与えられる。また両遺構間や埋土の上層・下層間にも出土遺物の時間差はないが、坩堝・鋳型・炉壁状焼土などが埋土中にも認められることは、幾度か造り変えられた可能性が推定できる。

SX1・2がまったくの露天で操業していたのか、覆屋、あるいは簡易な屋根を持っていたかは、SX2の周囲に2基のピットを検出したのみで、この問題の解明には至らなかった。

その他、SX1・2の周囲に時期差のほとんど認められない遺構として、礫を多量に詰め込んだSK16や、貯蔵施設と考えられる石室SK23、長方形の木枠を持つ土器溜めでもあるSK14などがある。

**墓跡について** III期・第2面で墓跡と考えられる遺構を検出した。これらを大別すると、日常雑器類を蔵骨器に転用したもの、土壌の上面に自然石を寄せ集めた集石遺構がある。蔵骨器を用いた遺構には、鉢や鍋を転用したもの（SK144・146）と、大甕を用いるもの（SK75など）がある。それぞれの容器内に焼土、炭、骨片などを含んでいる。特にSK146からは銭貨が検出されている。大甕を埋めたものについては、墓跡と断定するには問題があるが、鉢を蔵骨器として用いているものについては、出土した銭貨を六道銭に類

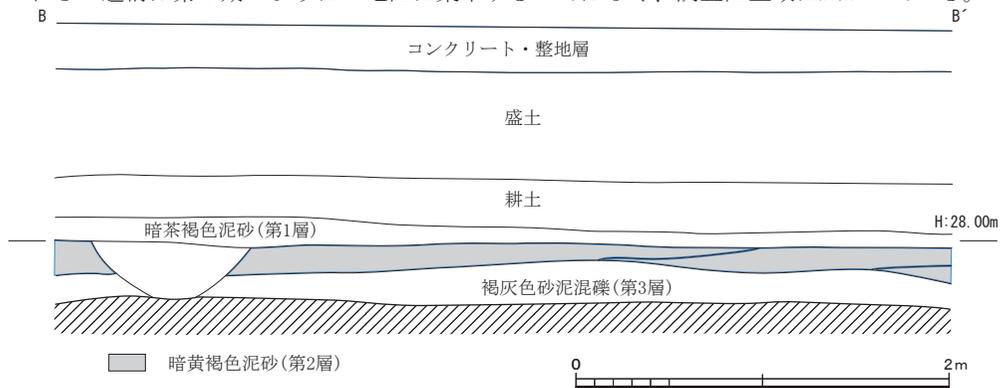
するものと考えれば、墓跡と推定することができる。

土壌上面に川原石を集石するものが15例検出されたが、これについて若干検討を加える。埋土に焼土、炭、骨片、土師器片を包含するものはSK116を始め7例検出されている。そこでこれらの埋土の一部を取り上げ観察・分析を行った。この結果、検出された骨片はすべて魚骨、小動物の骨、牛馬の骨であり、人骨は認められなかった。また一部の土壌には植物の種子も検出されている。このような事実から、集石があり、埋土中に焼土、炭を包含する土壌でも墓跡とは限らないものがあることが明らかとなった。

**遺構の相互関係** 今回の調査で検出した遺構、遺物包含層を<sup>注19</sup>4面3期に区分した。第Ⅰ期は第4面に対応し、第Ⅱ期は第3面、第Ⅲ期は第1面・2面に対応する。それぞれの年代は所屬する遺構出土の遺物、遺物包含層出土の遺物から判定し、第Ⅰ期を平安時代、第Ⅱ期を鎌倉時代前半、第Ⅲ期を鎌倉時代後半から室町時代とした。

第Ⅰ期の代表的遺構SD29は、上・中・下層からなり、上層はSD29が機能を停止したのち、窪地となっていた溝部分を埋めた整地層と考えられるもので、溝の年代の下限を知ることができる層である。また中層の時代には、杭を打ち込み護岸をしている。この時期には、東岸に遺構はなく、井戸、土壌などすべて西岸に存在している。これらの遺構(SE19・SE20・SE21・SK503・SK508)は出土した遺物からSD29とほぼ同じ年代を与えることができる。したがってSD29が機能していた時期の生活の中心は西岸にあると指摘することができる。第3層に含まれる遺物は、大半がSD29と同じものであるが、わずかに含まれる遺物(挿図18)から年代を平安時代後期に求めることができる。

第Ⅱ期の遺構はすべて第3面を切り込んでいる。溝、井戸、土壌などを検出したが、これらの遺構は第Ⅰ期のように一地区に集中するのではなく、調査区全域に広がっている。



挿図16 基本層序(1:40)

しかし井戸については、調査区の北部と東部に集中する。この井戸に関連する建物の存在が推定されるが、柱穴を検出したのみで明確な建物遺構は検出されなかった。

第Ⅲ期の遺構は第2面を切り込むものと第1面から切り込むものがある。この時期は第Ⅰ期、第Ⅱ期に比べ、遺構の数が飛躍的に増大し、この遺跡の最盛期といえることができる。

第Ⅲ期の前半には井戸、土壇、溝、柱穴などが検出された。井戸、柱穴の分布が、北端と東端に集中する傾向は第Ⅱ期と同様である。建物を明確に確認していないが、北と東の柱穴群間の空白地帯に墓とみられる遺構が検出されている。第1面から切り込む遺構は第Ⅲ期後半のもので、基本的には前半と同様であるが、生産跡(SX1・2)に関連するものがこれに加わる。建物は堀立柱以外に礫を敷き詰めた遺構(SX5)を建物の地業と考えれば、SA1はこれを囲む柵と考えられ、調査区の南西部に建物が建てられていたことになる。調査区北端には、池と考えられる遺構(SX4)、東部に溝(SD12)などが掘削され、第Ⅱ期や第Ⅲ期前半とは少し異なった様相を呈している。これらの遺構が機能を失ったのちは、SX5の上に安土、桃山時代の土壇が成立する。したがってこの地は、室町時代の後半以後、空地か畑などとして今日に至っているのである。

## 第3章 遺物の検討

### 1 遺物の概要

各種の遺物の収納箱に800箱余り出土した。この中で数量の多いのは土器、陶器類で総数318,950点の中で287,347点(約90.1%)を占める。これらの遺物をⅠ・Ⅱ・Ⅲ期に区分するが、これは遺構との対応関係を示すもので土器形状による区分ではない。

用語については基本的に通例に従ったが、一部変更<sup>注20</sup>している。特に中世の須恵器については、この系譜を引くものを陶器Ⅰ類とし、Ⅱ期以降この名称で分類し、中世に発展する六古窯系の焼け締まった陶器を陶器Ⅱ類とした。

施釉陶器についても陶器同様、中世に属するもので古代の灰釉陶器の系譜に含まれるものを施釉陶器Ⅰ類、中世以降に新たに出現する灰釉などを施した陶器を施釉陶器Ⅱ類と仮称<sup>注21</sup>している。

### 2 Ⅰ期以前の遺物(挿図17)

中世(Ⅱ・Ⅲ期)の遺物包含層から弥生土器3点、須恵器5点が出土した。

弥生土器は口縁部に2連の突起があり、頸部に横の櫛描き文を有する中期の壺と平底の底部破片がある。(挿図17-463・464・465)

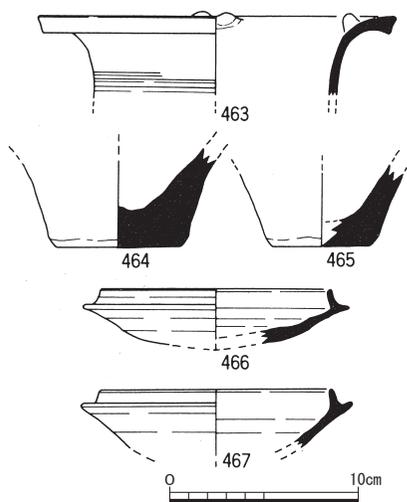
須恵器はすべて杯身で、図示したもの他に小破片が3点ある。色調は淡青灰色で良く焼け締まっている。立ち上り部の低い古墳時代後期に属するものである。(挿図17-446・467)

### 3 土器・陶器類

#### Ⅰ期の遺物(図面7~17)

I 期に所属する土器群にSD29A・B・C、SK508と第3層から出土したものがある。この他に井戸(SE20・21)から出土した土器もあるが、細片のため同形式のSK508で代表させる。

**土師器** 杯A、・B、ⅢA、高杯、盤B、甕A・B・C・D、羽釜A・B、鍋Aなどの器形がある。杯と皿類の製作手法は同じで、第一次成形で粘土紐を接合、オサエ手法<sup>注22</sup>によって器壁を薄



挿図17 Ⅰ期以前の土器(1:4)

くする。第二次成形では内面と外面の体部上半（口縁部）をナデ調整する。杯 A には底部をヘラケズリして、口縁がわずかに肥厚するもの (1) がある。これと同様のものはきわめて少ないが SD29B から出土している。杯 A には口縁が上方に直立するもの (3・79) とわずかに外反するもの (2・80・81・140・141・149)、強く外反するもの (82・114) がある。

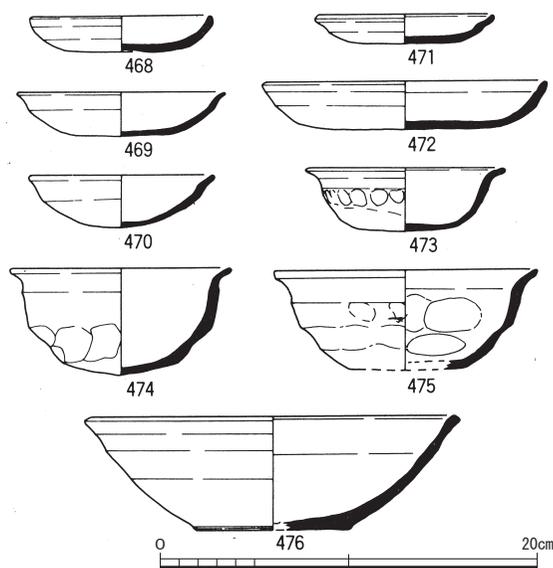
Ⅲ A は底部にヘラケズリのあるもの (4) と、底部はオサエ調整のまま内面、外面上半をナデ調整するもの (5・115・143・150) がある。この中には口縁が外上方へのびるもの (5) と、ゆるく外反し端部をつまみあげるもの (115・143・150) がある。

杯 B (6) は底部に低い高台を張り付け、内面はナデ調整、体部外面はヘラケズリする。しかし口縁周辺にはナデの痕が浅い窪みになり、この部分はそのまま削り残されている。SD29A には破片が少量あるが実測できる破片はこれだけである。

高杯は破片が 10 数点あるが図化可能なものは図化した 3 点 (10・169・170) だけである。棒を芯に粘土をまき、抜き取った後で裾部と脚部の境をヘラでケズる。外面は入念に九角形に面取りされている。通常、高杯のヘラミガキは裾の外面だけに施すが、これは内面にまでヘラミガキが施されている。これは杯 A (1) などと共に、SD29A の他の遺物より古い形式である。高杯は他に遺物包含層 (第 3 層) 出土のものがある。これは皿部 (169) にはまったくヘラケズリ、ヘラミガキがなく、袖部 (170) も同様で、ナデ調整のままである。SD29A に伴う典型的な高杯で図

化できるものはないが、他の遺跡との比較から、図面 15-169・170 は SD29 に伴うものと推定できる。盤 B (144・171) は SK508 と第 3 層から出土している。表面が摩滅しているが、高台を貼りつけた痕跡と一部にナデ調整の痕跡が観察できる。

甕は A: 粗いハケメのあるもの (12・16・17・94・128・129・183) と B: 表面をナデ調整するもの (8・11・172・173・179・184)、C: 粗いタタキメを有するか粗いハケメで一部消したりするもの (7・9・176・



挿図 18 第 3 層の土器類 (1:4)

177・178・180・181・182)、D: 粗いハケメがあり胎土の粗いものがある。口縁の形態は、甕Aが内側へ折り返すか肥厚させるものが多いのに対し、甕Bは内側にわずかに口縁端部を突出させるものがあり、折り返すものは稀である。甕Aは胎土(34ページ、土師器の胎土参照)が1群、2群が多く、甕Bは2群と3群、甕Cは2群が多い。砂粒の混ざる甕A・C<sup>注23</sup>に対し、甕Bは比較的混入物は少なく、小形の器形の胎土に類似し、一部は黒色土器に胎土が共通するもの(8・173)がある。甕Aには口縁部内面に、外面同様の粗いハケメを残すもの(12・17・94・183)もある。器形の大小をみると大型、中型は甕A、中型は甕B、甕Cは中型に含めて良いものがあるが口径が12～15cmのものが多い。

甕DはSD29A・B・C、第3層から出土している。砲弾型の体部に外上方へひらく口縁が付けられる。外面には縦方向の粗いハケメ調整が施される。胎土は4群に相当し、砂粒が土師器の他の器形に比較してきわめて多く、竈や羽釜Bの胎土に似ている。

羽釜A(187)は図示した他に小破片が4点あり、そのうちの1点はSD29Aから出土し、他は第3層の出土である。口縁部を欠失しているが、甕Aの頸部下に鏝を張り付けた器形で、胎土、手法も同様である。内面にはヘラでカキ取った痕が残る。

羽釜Bは砲弾型の体部の上方に鏝の付く器形である。体部外面は甕Dと同様の粗いハケメ調整を行う。口縁の形が直立するもの(95・131・185)と、鏝から口縁がなだらかに繋がっているもの(174・175・186)とに大きく二分できる。羽釜Bの胎土はいずれも砂を多く含む。SD29からも出土しているが、細片のため図示していない。

鍋は浅い体部に外方へ開いた口縁部を有する。内面と口縁部はナデ調整、体部外面は不定方向のハケ調整である。鏝は図示したもの(20)の他に2点ある。この例はSD29Aから出土したものであるが、これに接合する破片がSD29B・Cからも出土している。胎土は甕Aと同様である。

**第3層の土師器他** 第3層はSD29の上を覆う層である。この層にはSD29他と同様の遺物を多量に含むが、少量のSD29の土器群とは異なる形式の土師器を含んでいる。

皿A(挿図18-469・472)は内面と体部上半をナデ調整し、外面下半と底部はオサエのままである。小皿A(468)は口径が小さい以外は皿Aと同様である。皿C(471)は浅い器形で、体部を外方向へ折り曲げ、端部を上方へつまみあげる。

杯(挿図18-470・473・474・475)は皿類より深い器形で体部をオサエ成形したのち、内面と口縁をナデ調整する。第3層では特にSD29周辺からの出土が多い。この杯は9～10世紀代の深目の杯に形態は似ているが、器壁の厚さや口縁部の形などに差があり、現

時点では類例も少なく生産地や系譜のはっきりしない土器である。

須恵器鉢（挿図 18-476）は須恵器の項で扱うべきものであるが、皿 A との関連でここで扱う。ロクロ成形で底部は糸切りのまま調整しない。青灰色を呈し、砂粒を含んだ胎土である。器高は「寛治五年」銘の鉢より低い<sup>注24</sup>が、これに近似した形態で、土師器皿類（468・471・472）などと共に第 3 層の成立年代を推定する資料である。

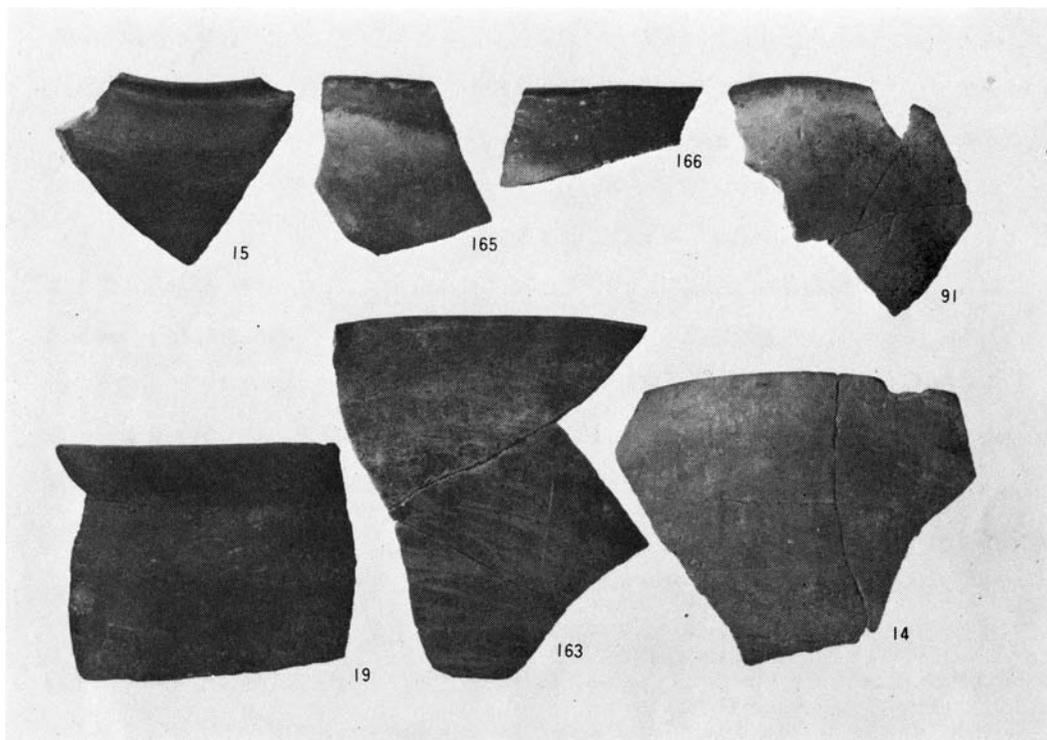
**土師器の胎土** 土師器の胎土は大まかに 5 群に分類できる。第 1 群は淡黄褐色～淡赤褐色を呈する。第 2 群は淡茶褐色～茶褐色を呈し砂粒を少し含む。第 3 群は淡褐色～暗褐色、暗黄褐色を呈し胎土に多量の砂を含む。第 4 群は灰白色～淡黄褐色を呈し、砂粒をあまり含まない。第 5 群は茶褐色～赤褐色を呈する。検出した土師器の小型の器形は第 1 群に属するものが多いが、第 2 群も少量存在する。甕類はいくつかの種類があるが、甕 D は羽釜と同様に 3 群で、表面の成形手法もきわめて似ている。第 4 群、第 5 群はこの遺跡では第 II 期・III 期の杯、皿類に認められるが、第 I 期に第 4 群に相当するものは少ない。しかし、特殊な土師器（挿図 41-484）には胎土が灰白色を呈するものがある。

**黒色土器** 主に SD29A・B・C から出土している。杯 A（13・90・91・160～162）、杯 B（92・159）、鉢（14・163）、甕（18・19・93・167・168）、小鉢（164・165・166）<sup>注25</sup>、短頸壺（15）などの器形がある。杯 A は 90 が内外にヘラミガキを施され、13・162 は外面のヘラミガキは退化し数条を施すだけとなっている。他の杯 A は外面にヘラミガキはなく、ヘラケズリのままである。杯 B は内面に入念なヘラミガキを施すが、外面はヘラケズリのままである。杯 A・B とも炭素が内面だけに吸着する。胎土は土師器の第 2 群と同じである。

鉢は杯の大型のものである。杯 A 同様の手法で製作され、外面のヘラミガキがなくヘラケズリのままのもの（14）と、外面にヘラミガキを施すもの（163）がある。163 は片口鉢である。小鉢の中で 164 は例外的で、炭素が焼けて失われた黒色土器なのか、土師器なのか判然としない。体部は手づくね（オサエ）で成形し、口縁はナデ調整し、ヘラミガキはまったくない。165・166 は良く似た器形<sup>注26</sup>で高台の付く可能性がある。ヘラミガキは粗く、166 は外面にも施される。この器形は杯類と異なり、今回の例は外面にヘラケズリを施さない。

甕は内面に粗いヘラミガキを施し、これが外面に及ぶ例（19・168）がある。内面は平滑に調整され、外面はヘラケズリとヘラミガキを兼ねたような調整を行う。

短頸壺は須恵器の短頸壺と同形で、内外に入念なヘラミガキを施す。この壺だけが今回検出された黒色土器の中で内外に炭素を吸着させた例である。黒色土器の胎土は、土



挿図 19 黒色土器

師器の胎土第 2 群を基調とし、暗黄褐色味を帯びた杯・鉢類や、赤色に近い色調の小鉢 (164・165) などがある。

**須恵器** 蓋 A、杯 A、灰 B、皿 A、椀 A、鉢 A、鉢 B、鉢 C、小鉢、壺 A、壺 C、壺 J、壺 G、短頸壺 A、短頸壺 B、短頸壺 C、小壺 A、小壺 B、甕 A、甕 B、平瓶などの器形がある。甕 B (203・204) については、鉢とするべきかもしれないが、ここでは暫定的に甕に分類している。硯などについては別の項で述べることとする。

蓋 A (21・22) は、口径に大小があり、手法は内外ともヨコナデ、天井部をヘラで削っている。宝珠つまみが当初から付けられていないもの (21) がある。

杯 A (23・85・191・193) はヨコナデ調整で、底部にはヘラで切り離した痕がそのまま残る。口縁は外上方に開くが、内側に肥厚し、直立気味のもの (85) もある。焼成の不良なものも多く、今回この遺跡で検出された杯 A の 23 例中、灰白色～灰褐色を呈する軟質のものは 19 例である。

杯 B (24・25・26・27・28・29・30・84・86・87・146・151) は、ヨコナデ調整で、ヘラ

で切り離したままの底部に高台を貼りつける。体部は外上方へ開くが、体部上半（口縁部）を直立させるもの（29・146）がある。断面の形態は杯 B の中では後出のもので、杯 A（85）にみられる形態と共に終末期<sup>注27</sup>の一つの現象である。

碗 A（197）は、杯に含めるべきものであるが、通常の杯 B とは体部の形態の差異から碗に分類した。ヨコナデ調整で、底は低い高台を貼り付け、糸切りの痕を残す。青灰色の色調で通常の須恵器の胎土、焼成である。須恵器としては後出の器形である。

皿 A（190）は、この一例だけで、ヨコナデ調整で底部外面をヘラケズリする土師器（1・10）などと共に SD29A の土器群より古いものであろう。

鉢 A（31）、B（32・100・195）、C（34・35・36）、D（33・132・157・158）がある。鉢 A はいわゆる鉄鉢形で、外面の体部下半を削り、口縁は入念なヨコナデ調整を行う。鉢 B は短く立ち上がる口縁を有する。底部まで残っているものはないが、輪高台の付くものと糸切りのままのものがある。今回検出されている鉢の底部は SD29A、B、C、第 3 層共に糸切りのままのものが多いが、これが鉢 B の底部なのか、鉢 D の底部なのかは、各個体を接合できるものがなく、判定できなかった。

鉢 C は体部に丸みを持たない鉢で、底部はヘラで切り離した痕がある。鉢 B と同時期に存在し、鉢 B が壺に近い深い鉢であるのに対し、鉢 C は中世の鉢に似た浅い形態である。

SD29A からは鉢 C の大半が出土している。鉢 D は鉢 B が経年変化したもので、今回は検出されていないが、平安京内の他の遺跡でこの中間を示す形態の鉢が存在する。鉢 D と分類した中で、33 は口径が大きく、鉢 C と手法も類似し、鉢 C の変形とも考えられる。この 33 を例外とすると、鉢 D は SD29A には伴わず上層の SD29B に認められる。

小鉢（99・147）は、鉢 B を小型にした形態である。ヨコナデ調整し低い高台を貼り付ける。底部は糸切痕をそのまま残している。SK508 出土の鉢（147）は SD29B 出土の鉢に比べ、器高が高く、体部上半のくびれも少ない。鉢類はこの他に、鉢 B の口縁部が大きく外反した形態のもの（198）がある。これは広口の壺と分類すべきものかも知れないが、ここでは鉢の類に含めた。平安宮主水<sup>注28</sup>司跡で、同形のもものが 9 世紀前半の遺物に伴って出土している。

壺類は器形が多いので、壺と短頸壺に仮区分した。壺には A（41）、B（139）、C（40・42）、D（38）、壺 E（43）、小型の壺 F（153・196）、G（96・97・98）、H（135）、があり、短頸壺 A（39・46）、B（45）、C（44）がある。壺 A は卵形の体部に、頸部、高台が付けられるもので、SD29 各層出土の壺 A は体部が球に近いものではなく、体部下半が間のびした形である。壺 F は壺 A の小型である。第 3 層出土の例（196）はやや古式の形態を示している。壺 B は

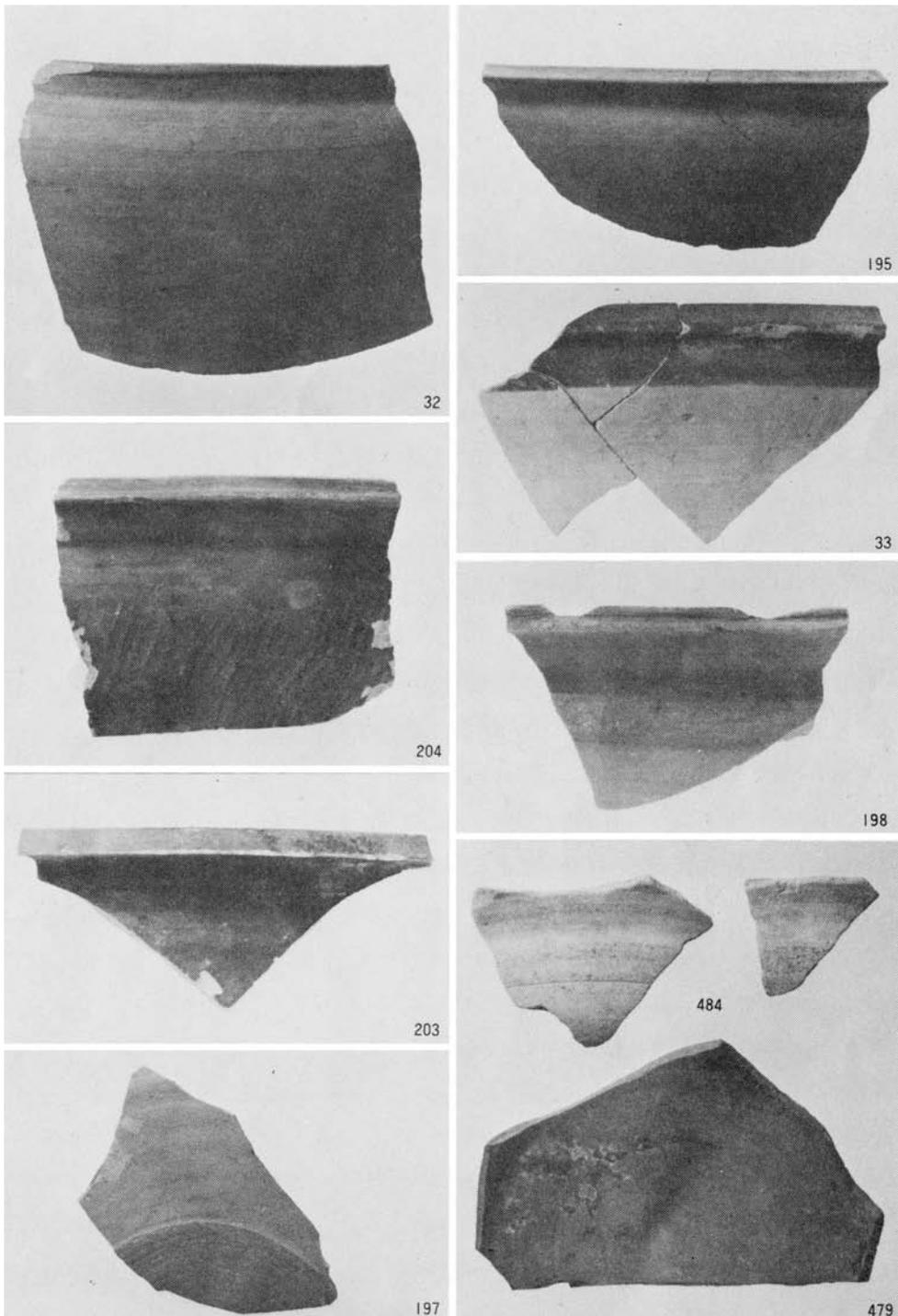


插图 20 須恵器

壺Aの体部を上下に延長したもので、図示した例(139)を暫定的にBに含めた。小破片であるため、今後の類例の増加によって壺Cになる可能性がある。

壺Cは筒形の体部に丸みを帯び肩部がつき、これに耳が貼りつけられるものである。耳は40のように肩部に張り付けられるものと42のように肩部と体部下半に方向を違えて取り付けるものがある。耳は原則として四方向と考えられるが、40の場合は小破片のため一方向しか確認できていない。また42は甕類と同様の青海波の当て板痕跡が、体部内面のナデ消した下に残っている。壺Dは壺Aに環状の取手が付けられるもので、今回の調査ではSD29Aから一例出土した。これと接合しない取手の破片を検出している。壺Eも図示した例以外は検出していない。肩の張る器形で、196・198などと共に古い様相を呈する一群である。壺Gは壺Fに後続する形態である。体部がのび、丸みが失われる傾向が明瞭になり、底部は糸切底である。したがって本来は壺Fに含めるべきであるが、SD29土器群の新旧の要素を考えたときの、新しい要素として仮に区分したものである。壺Hは筒状の体部に大きく広い頸部がつき、底は糸切りである。今回の調査で2例出土しているが、他の遺跡でもSD29の時期に伴出する例をみない。これも壺Eなどと同様、SD29の中心を占める土器群より古いものとみられる。

短頸壺は体部が球形のAと筒状のB、Bに耳を付加したCがある。全体の形が判明するのはBだけであるが、この形からCを類推することができる。また短頸壺AはB・Cに比べて外面の下半をヘラで削る手法が特徴である。甕は球形もしくは卵形の体部に口縁が付く甕Aと、短い口縁に浅い鉢状の体部が付くとみられる甕Bがある。外面にタタキメが認められ、内面はナデ調整する。甕Aが青灰色～暗青灰色を呈して良く焼成されるのに対し、灰褐色を呈し焼成がやや悪い。

甕Aはタタキメが認められるが、内面の当て板の文様が体部の上・中・下(底部)によって異なるもの(48)や上半と下半で異なるものがある。しかし外面のタタキ板の痕は内面ほどには明確な差異は認められなかった。甕類で、このような当て板の文様の差異が認められるものがある。例が少ないため、SD29出土の甕類にみられる特徴的な手法と結論付けできないが、留意すべきである。口縁の形態には、平安時代前期に通有の52と、48・49のように丸く収めるもの、51のように肥厚するものがある。底の形は尖底と丸底があり、丸底で全体に丸みを帯びた形の甕が認められる。

平瓶は大きいもの(156)と小さいもの(199)がある。手法はいずれも体部はヘラケズリ、底部はヘラ切りで高台を貼りつけている。天井部にはヘラで面取りした取手が張り付けら

れている。199はこの取手がはずれ、痕跡だけが残っている。

**灰釉陶器** 椀、皿、壺、瓶、平瓶などの器形がある。椀はすべて高台の付く椀Bである。しかし高台の形には、1 断面が方形で低いもの(71・72・205)、2 やや幅の広い蛇ノ目高台風のもの(70)、3 外方へ張り出すもの(69)、4 外方へ張り出す高台の先端が薄くなり、内湾、内傾するもの(208・211など)がある。体部の外面をヘラで削るが、高台の形が4に属するものは、底部をヘラで切り離す際に体部下半を削るか、まったく削らないものがある。これらは皿にも共通の事柄である。皿は皿B(213～219)と皿C(段皿)(212)がある。釉薬は緑褐色のムラのある厚い釉薬(70・210)、灰色に濁った釉薬(201)、通常の釉薬を施すものがある。これを施釉法でみると、白濁した釉薬は浸し掛けをしたものに限られ、厚い釉薬を施すものは外面をヘラで削って整形し、内面だけに施釉している。壺類は須恵器の壺Aと同形のA(112・113)、B(77)、短頸壺A(74・78・220)、瓶A(65・67)がある。瓶A(65)は復元すると通常のものより頸が細くしぼられ、ヘラで面取りした平たい取手が付けられる。67は二本の粘土紐を取手にしたものである。

平瓶(73)はSD29では数例あるが図示できるものは少ない。

**緑釉陶器** 椀A・B、皿B・C、瓶A、唾壺、香炉などの器形がある。今回の調査ではSD29とその周辺から集中して出土している。最も出土量の多い器形は椀、皿類で、これ

- |   |  |
|---|--|
| 1 入念なヘラミガキを施し、体部外面と高台の成形に回転ヘラケズリを行う。(56～62・221・230～237他)  | 部下半、底部、高台をヘラケズリする。(103・104・222～228・238・239)      |
| 2 入念なヘラミガキ、体部のヘラケズリは1と同様で、高台を貼り付けるもの。(63・243～246・261・262) | 4 ヘラミガキは3と同様で、底部に輪高台を貼り付ける。(102・119・229・241)     |
| 3 粗いヘラミガキが内面だけに施され、体                                      | 5 ヘラミガキ、ヘラケズリ手法とも施されず、糸徹底に高台を貼り付ける。(242・247・248) |

に少量の壺類、香炉などが加わる。数量の多い椀、皿類を分類すると次のような5群に大別できる。(写真28参照)

このように5群に大別できるが、これらは時期差、地域差である。緑釉陶器は『平安京発掘資料選<sup>注29</sup>』によると三時期に分けることができる。この区分に当てはめると、この遺跡出土の第1群、第2群に属するものはI期～II期に属する。第3群、第4群はII期、第5群はIII期に含めることができる。

次に地域差の問題を検討する。これまでの調査で、京都市北区にある幡枝、西京区の小

塩、亀岡市篠町などに存在する窯跡が明らかにされつつある。<sup>注30</sup>この中で幡枝の窯跡については、早くから宅地化などの開発が進み、不明な点が多い。調査が進展すれば新しい事実が判明するかもしれないが、現時点での京都市周辺部や亀岡市篠町の窯の製品は、体部外面と高台の部分をヘラケズリすることを特徴としている。幡枝とその周辺を含めて洛北窯跡群、小塩と西方へ山越えしたところにある篠古窯跡群をまとめて洛西窯跡群とする。洛北窯跡群に属するのは第1群、第3群で、洛西窯跡群に属するものは第3群だけである。この両窯跡群は、一部重複する時期があるが、洛西窯跡群の成立は洛北窯跡群に後続するものと考えることができる。第2群、第4群、第5群などに輪高台を貼りつけることを特徴とする群があるが、第5群については同様の特徴を有する資料が滋賀県の窯跡で発見されている。第2群と第4群については手法で総括したが、形態などで細分が可能である。しかし緑釉陶器の有力な産地と考えられている東海地方の資料に直接触れる機会が少ないため、第2群、第4群を東海地方産であると安易な結論を出さずに、第2群は主に東海地方、第4群は滋賀県周辺も含めた東海地方の産であると推定するに留める。

SD29Dや第3層などは、上層に新しい要素が認められるが、古いものが上層に多量に混入しているため、SD29周辺の資料を用い、確実に各群の特徴の判るものだけを選び数量を数えた。これによると数量の点では第3群が圧倒的に多く、第5群、第1群がそれに続き、第2群は最も少ない。

緑釉陶器に施される装飾には、陰刻花文と輪花文がある。陰刻花文(63・237・261)は内面の底部中央に小さい子房を描き、放射状に長い花卉を描くもの(63)と、4～5方向の花卉を描くもの(237・261)がある。237の場合は口縁にも施文されている。63に描かれた花文の類例は多くはないが、平城宮跡や京都市西京区榎原遺跡<sup>注24</sup>などで同様の文様を有する資料が検出されている。

輪花は261のように、外面からヘラで押圧し、内面に突出部を造るもの(261)と口縁を外方から押圧して輪花にするもの(229)がある。261にみられる輪花については、内面に粘土を貼りつけたという説があり、この資料(261)についてはその可能性がある。

輪花、陰刻花文などの装飾に中国陶磁器の影響を指摘する説があるが、過度にこれを強調することには問題がある。製作技術の面では奈良時代の多彩陶器、須恵器などに繋がるものばかりであり、装飾の面では金属器、螺鈿の箱類、平脱手法による箱類など、陰刻花文の文様の原形と思われるものが多数あり、当時最も流行していた文様を焼物に移したにすぎないと考えることもできる。このように中国陶磁器は緑釉陶器成立の一つの要因であ

るが、基本的には国内の各種技術の集大成と考えることができる。

**輸入陶磁器** SD29からは越州窯系青磁碗の破片(66)と、B・Cから碗(88)と皿(89)が検出されている。小破片であるが紋胎陶や銅官窯(瓦沙浮窯)の製品と考えられる貼花文壺の破片(巻頭写真)もSD29から出土している。

**Ⅱ期の遺物** Ⅱ期に所属する土器群にはSD24・SD25・SE11・SE12・SD28・SK478などがある。SD24からは土師器、瓦器、陶器Ⅰ・Ⅱ類、白磁、青磁が出土している。磁器は破片で検出したが、接合できるものが多く、その接合関係を図5に示した。

SD25からは土師器、瓦器、白磁、青磁、中国製陶器(333)、図示できない小破片の陶器Ⅰ・Ⅱ、施釉陶器Ⅱ(318)が検出されている。SD24は土師器が少なかったが、SD25では計測できる数量があり、皿A、小皿A、C、D、E、高杯などの器形がある。SE11はSD24と異なり、輸入陶磁器が少なく、土師器、瓦器など国産の土器類を主とする土器群である。

**土師器** 皿A(291・292・306～309・334～338・340)、小皿A(293・310・311・314・339)、小皿C(315・316)、小皿D(312)、小皿E(313)、高杯(317)、杯(341)などの器形がある。

皿Aは体部内面と外面上半をナデ調整、体部外面下半と底部はオサエのままである。口縁部などに前段階でわずかに認められた傾向が明確になる。口径はしだいに小さくなる傾向が認められる。小皿Aは皿Aを小型化したものである。小皿Cは周縁を内側へ折り返したもので、折り返した部分と内面はナデ調整する。皿Eは皿Dと似るが、系譜の異なるものである。小皿Dは全体をロクロ成形し、底は糸切りのままで、胎土は黄赤褐色に焼けている。小皿Eは小皿Cなどと共に京都では11世紀頃から出現する皿で、ロクロ成形、糸徹底であるが、明確に高台部がつくり出される。土師器は淡黄褐色～褐色～淡赤褐色(第1群、第2群)を呈するものが通常であるが、SD25の土師器には、高杯、皿D、皿Eなど黄灰色に近い白っぽい焼け上がりの土器(第4群)が認められる。

**瓦器** 碗B(328)、鉢(329・331)羽釜(330)がある。碗は表面が磨減して手法は不明である。鉢はいずれもオサエの後で、内面と体部上半(口縁)をナデ調整する。329のヘラミガキはまったく施されず、一部に炭素が吸着しているだけであるが、331の内面は入念に粗いヘラで磨かれ、全面に炭素が吸着している。胎土の色調も331は灰白色であるが、329は灰褐色で生焼けの須恵器に近く、畿内の瓦器とは別系統に属するものである。

羽釜は内傾する口縁と、三脚が付いているところに特徴がある。内面はハケで調整されている。類例は増加しているが、その多くはSD25の土師器皿と同形のものに伴っている。

羽釜には脚の付かない、口縁が直立に近いもの(353・354・356)がある。いずれも内面と鋳部から上をナデ調整、外面と底部は継ぎ目に沿ってオサエによる指頭痕の残るものが多い。これらは、SD25の土師器より新しい要素を持つ土師器皿に伴っている。

鍋(355・357)は釜と同様の手法で造られる。330の羽釜に伴うものより口縁部の屈曲が甘くなっている。

鉢B(332・361・362・363)は厳密には黒色土器に含められるものである。全内面と外面の口縁をナデ調整、体部下半はオサエ、底部には藁、粉殻の圧痕が付いている。362には底部に三脚が貼りつけられる。ヘラミガキは332・362には粗く施され、363の外面は粗く内面は入念に施されている。

**輸入陶磁器** 白磁碗(294～298・320～323)・皿(275)・壺(327)、青磁碗(278～290・324～326)・皿(263～274・276・277・319)・壺(299)がある。片切彫による文様が青磁の碗、皿に認められるが、白磁で文様を有するものは今回検出されていない。

青磁の文様は片切彫の他に櫛描のものも多数あり、SD24出土の中にはこれらの文様がなく、外面を堆線文で区切って輪花を表した(282・283)もある。また粗い胎土に白化粧され、鉄絵で文様を描き、黄褐色の釉が掛けられた盤(333)もかなり出土している。

**陶器Ⅰ類** 鉢、甕の器形がある。甕は図示したものは1点しかないが、小破片は各遺構や第1層、第2層中に散在している。

鉢A(300・302)は糸切りの平底で、片口が付く器形である。技術的に須恵器の系譜を引くもので、淡青灰色～青灰色を呈し、ロクロで成形され、ロクロ成形の痕跡は平安時代の杯類にみられるようなものではなく、壺、甕類の内面に似た粗い痕を残す。302は鉢類としては入念に調整されている。口縁部の形態に二種類(300・302)あるが、300にみられる口縁の形態は古い時代には確認されていないものである。

甕(303)は、鉢A同様に須恵器の伝統を受け継ぐ器種で、外面に平行タタキが施され、頸部に至る。内面はタタキメが残る。通常は灰褐色を呈するはずであるが、この例は、須恵器としては焼成不良で赤褐色を呈する。兵庫県東部の窯の製品と考えられる。

**陶器Ⅱ類** 甕と壺がある。いずれも常滑を中心とした東海地方の産と考えられるもので、SD24から出土した304・305は、共伴する輸入陶磁器に与えられる年代より製作年代は古いと考えられる。

**施釉陶器Ⅰ類** 碗、鉢があるが、今回は鉢しか確認されていない。灰釉陶器の系譜を引くもので、いわゆる山茶碗の仲間である。301は灰褐色の胎土で、内面には釉がわずかに

掛かる。

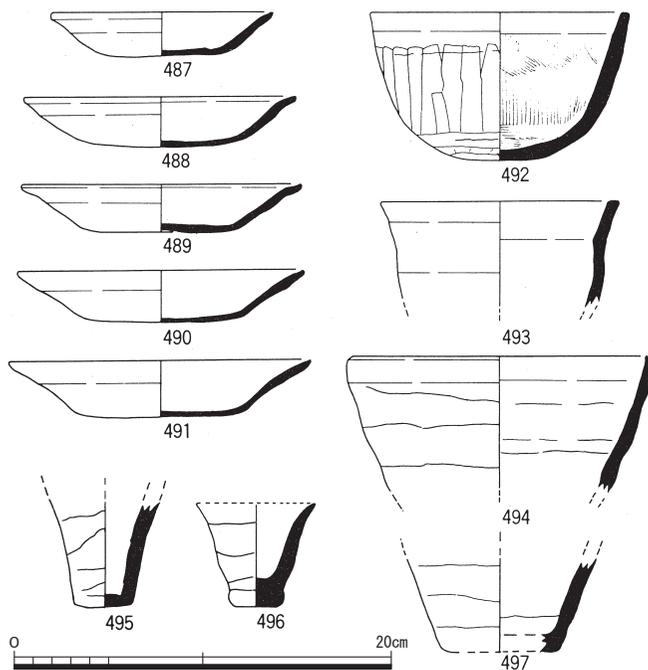
### Ⅲ期の遺物

Ⅲ期に所属する遺構で、出土遺物を図面に取り上げたのはSD12・SE10・SX2・SX3などである。これら遺構出土の遺物の他に、第1層、第2層から出土した遺物も一部取り上げている。これらの遺物には土師器、瓦器、陶器Ⅰ・Ⅱ類、施釉陶器Ⅰ・Ⅱ類、輸入陶磁器などの種類がある。

**土師器** 皿A、小皿A、小皿C、杯A、小杯と深い鉢状の器形（挿図21-492ほか）がある。皿杯類の成形手法は基本的にⅡ期と同様である。しかしⅢ期の末には器高の低い皿に近い形態<sup>注35</sup>の杯が出現する。

皿A(365)はⅡ期の皿Aに後続するものであるが、口径の小型化や調整手法が粗略化し、外面の体部下半には粗い指頭痕（オサエ）を残す。このような傾向は小皿A(364・385・396・397)にも認められる。これらは砂を含む胎土で、褐色～淡茶褐色（第5群）を呈するものが多く、白色の杯類（第4群）との色調差は著しい。小皿C(371)の手法はⅡ期と同様であるが、371の場合は淡く白っぽい色調を呈する。この色調の変化が一般的傾向なのかは、検出された資料が少なく結論が出ていない。

杯A(366・367・386～392)は、Ⅲ期に属するSD12の遺物に比較して、体部が外方へ開く傾向が認められる。外面下半は、オサエ成形の痕をそのまま残すが凹凸は少ない。しかし、杯の中に皿Aに共通する体部下半の指頭痕をとどめるもの(367)が存在し、これは色調も褐色に近く、杯Aの例外ではなく、一つの群として考えた方が良いものである。今回の調査では、数量の比率として捉えることの可能な量は検出されていない



挿図21 土師器 (1:4)

いが、他遺跡でこれが一群となることが確認されている。392 は杯としては大型で、現実  
に外面に煤が付着し、鍋と同様の使われ方をしている。しかし、形態上杯と同一の 392 を、  
煤が付くだけのことから鍋に分類することは難しく、形態の類似から杯に含めた。

小杯 (368 ~ 370・384・393 ~ 395) は杯 A と同様の成形手法、色調を呈するため、皿と  
区別して小杯と分類した。<sup>注37</sup> 底部を上方へ押し上げるのが通例であるが、SK478 からは突き  
出しの少ない小杯が出土している。

第 1 面から検出された土師器の (挿図 21-487 ~ 491) 杯は、器高が口径に比べ低くなり、  
皿に近い形態となる。成形の手法についてはⅡ期の杯と同様で、Ⅲ期の杯 A (366 他) に後  
続する形式である。

鉢には二種類ある。492 と 493 は形態に差異がある。粘土紐を積み上げ、492 は外面を  
へラケズリ、内面をハケ調整する。この調整痕は二次的な磨滅がほとんどなく未使用と思  
われる。胎土は混入物が少なく、淡赤褐色に焼け締まる。493 の外面は未調整でオサエに  
よる成形痕と粘土紐積み上げの継ぎ目が観察できる。内面は口縁部まで磨滅し、平滑になっ  
ている。胎土は 492 と変わらないが焼成はやや悪く、淡褐色 (第 2 群) を呈し、通常の土  
師器と変わらない硬さである。

鉢には、この他に製塩土器に似た粗製の一群 (挿図 21-494 ~ 497) がある。京都で製塩  
を行っていたと考えるよりは、現時点では大消費地である京都の中から出土していること  
から、塩の容器と類推する方が妥当と考えている。

粘土紐を積み上げ、外面は粘土紐を接合するためのオサエ痕が残り、内面には不定方向  
の乱雑なナデ調整を施す。淡褐色 (第 2 群) で胎土に砂粒を含むが、土師器として一般的  
な焼け上がりである。底部は幅の広いものと狭いものがある。496 は小型品にみえるが、  
上部が継ぎ目で離れたものと考えている。

**瓦器** 椀、小型の壺類、鍋、釜、手付鉢、鉢などの器形がある。Ⅲ期では土師器に  
近い胎土のものはなく、典型的な灰白色の瓦器の胎土となっている。椀と小型の壺類は、  
Ⅱ期に属する SD24 を覆う第 2 層中から出土し、Ⅲ期で扱うことにする。椀は A (348)、  
B (351・352) の二種類存在する。351 と 350 は地域差で、それぞれ和泉型、<sup>注38</sup> 楠葉型に比  
定される。348 は高台もへラミガキもないもので、土師器の杯類に似る。壺 (358・359・  
360) は金属器、陶磁器の花瓶を写したと考えられる 358 と頸の短い器形 (359・360) のも  
のがある。360 は肩部に暗文が施されている。

釜は口縁部がⅡ期より長めで、一条～三条の凹線が巡る。381 は典型的な瓦器であるが、

409 については、器形の共通性と、二次的な焼成で表面の炭素を失った可能性があることからここで説明する。小破片で口縁部に焼成後、孔があげられている。

鍋 (382・383・404・405) は口縁部が肥厚し、蓋を受ける部分は小さく立ちあがる。405 は立ち上がる部分が退化し、肥厚しているだけである。体部外面は粘土紐の継ぎ目に沿ってオサエの痕が残り、内面はナデ調整かハケ調整 (382) によって平滑に仕上げる。

手付鉢には、片口鉢に取手の付く器形 (414) がある。片口に対して直角の方向に取手が付けられる。成形手法は鍋類と同様である。413 は小破片のために片口鉢か取手付の鉢かは不明である。鉢は鉢 A(411)、鉢 B(402・403・415)、鉢 C(416・417)、鉢 D(412) がある。鉢 A は陶器の鉢と同形であるが、成形にロクロを用いない。内面には五本を単位とする筋を施し、外表は青味がかかった黒色を呈し、鍋、釜類より焼け締まっている。鉢 B はやや外方にひらく体部に脚が貼りつけられる。成形にロクロは用いない。内外に幅の広い原体でヘラミガキを施す。底部には砂粒が附着し、これは瓦などにみられる離れ砂<sup>注39</sup>と同様の性格のものであろう。415 は体部を外方から縦に押圧した輪花や、花文を押印した装飾がある。鉢 C は体部が内湾し外面をヘラで磨き、他は鉢 B の成形に似る。口縁の形は 416 のように内方へ突出するものと、しない 417 がある。417 には型押し (押印) による文様がある。鉢 D は筒形の体部を有するもので、上部に二条の突帯が巡り、外面だけをヘラミガキする。内面はナデ調整のままでヘラミガキを施さない。底部は失われているが、鉢 C などと組み合わせる可能性がある。

鉢 B・C・D は単に鉢と分類したが、鉢 A と同一の機能を考えている訳ではない。鉢 A は形から陶器Ⅱ類の鉢と同様の機能を有し、挿鉢と考えられるが、鉢 B・C・D は火舎、大型の香炉、茶道具の風呂などの、いずれかに相当するものと推定している。形が定型化していることや、製作手法から、型枠を使用している可能性は充分にあるが、底部を除く外面の調整が入念なため、それを証明する根拠は発見できていない。

**陶器Ⅰ類** 鉢・甕があるが甕は小破片であり、産地やⅡ期に属するものとの区別がつきにくい。またⅢ期に属する層からの出土量は多くない。

鉢はロクロ成形し、底部は糸切りのまま調整しない。内面には筋目は施さない。口縁部の形態は、基本的に端部を肥厚させるが、406・450 と 407 にはわずかながら差異がある。

**陶器Ⅱ類** 鉢と甕を検出している。鉢は内面に筋目があり、良く焼け締まった須恵器の胎土を有する 410 と、小破片のため筋目は図示していないが、筋目があり、赤褐色で混入物 (長石など) を含む胎土を有する 451・452・453 がある。これらは前者は備前焼、後者は信楽焼と推定できる。陶器Ⅱ類で信楽焼の鉢類はⅢ期の後半、第 1 面で検出された。

甕は須恵器の胎土で良く焼け締まった 457・458・459 がある。これらの器表は茶褐色を呈し、ヘラ状の原体で器表を調整する。口縁は玉縁状を呈するもので、備前焼と考えられる。

454～456・460・461 は常滑焼と考えられる甕で、口縁の小破片から復元したもの(454～456)と体部がほぼ残っているもの(460・461)がある。体部には粘土紐の継ぎ目に沿って、格子のタタキメ痕が残る。460と461は口縁が欠落した状態で検出されている。

SD12 出土の壺(挿図 22-486)は口縁に小さい片口を造り出す。ロクロ成形し、胎土は淡い褐色を呈し、焼成はややあまい。口縁を片口にする例は油壺にみられる。信楽焼に似ている。

**施釉陶器 I 類** 検出されたのは椀類(418・419)だけである。ロクロで成形し、底部を糸切りする。胎土は淡灰色を呈し、いわゆる山茶碗の胎土と同様である。418は口縁を押圧して八方向の輪花をつくり出す。

**施釉陶器 II 類** 椀、皿、香炉、盤などの器形がある。椀はロクロ成形で外面下半をヘラケズリする。灰釉を施し、黄褐色の胎土を有するもの(399・420・421)と、黒褐色～暗茶褐色の釉を施し、胎土は灰褐色を呈するもの(398・438・439・440)がある。399は灰色の胎土に黒褐色の釉が掛けられる。いわゆる天目茶碗に似た器形である。339と共伴し、高台が削り出しではなく貼りつけである点が注目される。瀬戸天目の古いものかも知れない。439はほぼ完形で、口縁は茶色、体部は黒色の釉が施される。外面下半の釉の施されない部分は暗赤褐色に発色し、いずれも成形やヘラケズリの際に用いるロクロは時計回りである。壺は小型のもの(422・426)と図示できない小破片の灰釉の梅瓶がある。426は古瀬戸の水滴あるいは醤油注しと呼ばれる器形に類似する。422は肩部に円盤を貼り、刻線で菊花状の文様を8個つくり出している。この貼花は、縦に粘土紐を貼り区画されている。肩部と頸部の境には「田」の字状の文様を印刻し、文様帯としている。底部は糸切りのままである。釉薬は422・426とも灰緑色～暗灰緑色の灰釉である。

香炉(423～425・429・430)がある。すべてロクロ成形で、底部に残っている430には糸切痕を観察できる。これ以外は小型品である。胎土は灰色～淡黄褐色で灰釉が施されているが425だけは灰色の硬く焼け締まった胎土で黒色の釉が施されている。429は底部に小さい脚が貼り付けられ、本来は三足があったと推定できる。

皿は片口のおろし皿(434～437)と内面に筋のない皿(427・428・432・433)がある。胎土は灰褐色で須恵器、山茶碗に類似し、すべて白濁した釉薬が施されている。431は手付の鉢か鍋で、白濁した釉薬が施され、おそらく片口になるものと思われる。

盤(446～449)は口縁が肥厚するもの(446～448)と口縁端部を下方へ突出させるもの

(449)の二種類がある。いずれも内外に灰緑色の釉薬を施す。

施釉陶器Ⅱは黄褐色の荒れた胎土と須恵器のような胎土のものがあり、すべて美濃、瀬戸地方の製品と推定している。

**輸入陶磁器** ここで扱う遺物は、遺構出土のもの第1層、第2層から出土したものである。写真ではⅡ期に含めるべきものも一枚に収めている。

青磁には、図示したものは少ないが椀類が多量に出土している。竜泉窯系の製品と考えられる椀、皿(602～610)と香炉(586)、馬上杯(443)などの器形がある。馬上杯は内面に花文を陰刻している。SD12出土の椀(挿図22-485)は、灰色の胎土で緑褐色の釉薬が底部外面を除く全面に施され、外面の花弁の文様は退化して縦の刻線となっている。この椀は埋没する前に破損した部分を漆状のもので接合、修復している。出土遺構の層位から判断するとⅢ期後半に属するものである。

白磁には青白磁の香炉、蓋、壺(611～625)と壺(573～584)がある。壺は所謂梅瓶の破片である。これらは第2層から出土したもので、Ⅱ期からⅢ期にかけての遺物である。この他にSK115出土の皿(図25-441)とSK42から出土した皿(図面25-442)がある。この皿は底部に朱で・の印が描かれている。

磁器の中で注目すべきものに吉州窯の製品と考えられる破片(巻頭写真638～641)がある。広島県草戸千軒町遺跡などに類例はあるが、国内では発見例の少ない遺物である。

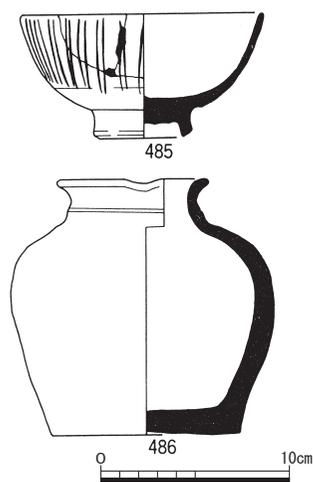
中国製磁器の他に少量ながら朝鮮製磁器(巻頭写真373・642)が検出されている。陶器には盤、壺の器形がある。盤には粗い胎土を有し、内面に文様を描くもの(563～572)と三彩の盤類(626～634)などがある。壺は暗赤褐色の焼け締まった胎土に、緑褐色～褐色の釉薬を施す。445は耳が四方に貼りつけられている。

これらの輸入陶磁器はⅢ期に所属する遺構、包含層から検出され、新しい要素を持つ485はⅢ期後半のSD12から出土している。

#### 4 瓦 類

##### I 期の瓦

SD29 その他から出土した瓦類は土器点数に比べ非常に少ない。瓦当面を持つ瓦はSD29下層より出土した1点のみであ



挿図22 SD12出土の青磁と陶器(1:4)

る。

重郭文軒平瓦（図面 29-22）は左半の破片で周縁部を欠損する。重郭内に一条の隆起線を持つ。平瓦部凹面は粗く縦方向にヘラケズリする。凸面には縄目のタタキが残る。凸面は下顎部から幅 8cm ほどを横方向にヘラケズリする。側面もヘラケズリで調整する。胎土は細砂を多く含み、やや粗い、焼成はややあまい。他に平瓦片、丸瓦片がある。すべて凹面に布目、凸面にタタキメのみられるものである。

## Ⅱ期の瓦

瓦当面を持つ瓦は、包含層から軒丸瓦が 2 点、井戸、溝から軒平瓦が 4 点出土した。軒丸瓦は花文 1 点、巴文 1 点、軒平瓦は剣頭文 3 点、唐草文 1 点である。

巴文軒丸瓦（図面 28-12）は左半部の周縁、珠文帯の一部を欠く。内区に、頭部が接合し尾部が圏線に接する左に巻き込む<sup>注40</sup>三巴文を配し、外区に大粒の珠文を 16 個不整に配する。周縁部の幅は<sup>注41</sup>広い。瓦当部と丸瓦部の接合には、丸瓦の前端部、凸面をヘラ状のものでオサエ、ケズリを加えている。また凹面側は粘土を盛り、押し付けて接合している。瓦当部側面、裏面はナデとオサエで調整する。丸瓦部凸面は縄目のタタキを部分的にすり消している。凹面は布目がみられる。長石などの細粒子を多く含み、やや密な胎土である。焼成は硬く須恵器の質感を持つ。第 3 層出土。

剣頭文軒平瓦（図面 29-23）は瓦当面の左半部を欠損する。平瓦の広端部を折り曲げ瓦当面を成形しており、文様面の高い部分に平瓦部凹面から続く布目痕がみられる。顎部下辺、瓦当裏面をナデで調整する。平瓦部凸面はオサエと縦方向のナデである。側面をヘラケズリする。砂粒を含むが精良な胎土である。焼成はあまい。SE11 出土。

唐草文軒平瓦（図面 29-24）は瓦当部右半部の破片である。平瓦の広端部を折り曲げ、瓦当部を成形する。瓦当面は文様の低い部分まで布目痕がみられる。瓦当面の上辺をヘラケズリで斜めに面取りし、周縁部もヘラケズリで調整する。瓦当裏面はナデで調整する。平瓦部凸面に縄目、格子目状のタタキ、瓦当顎部下辺に縄目のタタキがみられる。側面をヘラケズリする。粗い砂を含むが精良な胎土である。焼成はややあまい。SE11 出土。他の 3 点は小破片である。

## Ⅲ期の瓦・瓦類

瓦当面を持つ瓦は、SD12 から軒丸瓦 10 点、軒平瓦 11 点、SK147 から軒丸瓦 1 点、軒平瓦 2 点、SX2 から軒丸瓦 5 点、軒平瓦 7 点、SX4 から軒平瓦 2 点、その他の遺構から軒丸瓦 18 点、軒平瓦 18 点が出土した。また遺物包含層には、軒丸瓦 32 点、軒平瓦 20 点がみられるが、このうち半数はⅢ期より古い時期

に比定できる。出土総点数は、軒丸瓦 66 点、軒平瓦 60 点である。ここでは上記の遺構から出土したもので観察可能な特徴的なものを取り上げる。

## 軒瓦

**SD12 出土の軒瓦** 複弁八葉蓮花文軒丸瓦（図面 27-2）は瓦当部の下半部を欠損する。中房に「卍」、内区にやや浅い花卉を配し、外区に大粒の珠文と圏線を持つ。瓦当部裏面に指圧痕が認められる。丸瓦部凸面はナデと粗いヘラケズリ、凹面には布目がみられる。長石などを多く含む粗い胎土で淡赤褐色を呈する。焼成は硬く焼け締まっている。

三巴文軒丸瓦（図面 27-1）は瓦当部中央と下顎部の破片である。右に巻き込む三巴文の尾部が連なり、内区と外区を分ける界線となる。外区にやや小粒の珠文を配する。瓦当裏面に丸瓦部を接合するための割り込みがみられる。瓦当部裏面、下顎部をヘラケズリする。砂が多く粗い胎土である。焼成は硬く、焼け締まっている。

三巴文軒丸瓦（図面 27-6）は瓦当部上半を欠損する。文様面は左に巻き込む三巴文のみである。瓦当部裏面、顎部をナデで調整する。細砂を若干含むが精良な胎土である。焼成はやや硬い。

唐草文軒平瓦（図面 27-7）は瓦当部右半を欠損する。唐草文を郭線で囲んでいる。瓦当部周縁上辺をヘラケズリ、裏面や顎部をナデで調整する。平瓦部凹面に布目がみられる。側面はヘラケズリである。胎土は砂が多くやや粗い。焼成は硬い。

唐草文軒平瓦（図面 27-8）は中央部の破片である。上部に向かい合う蕨手と下部菱形内の「米」字形を配した中心飾りの下方から唐草文がのびる。瓦当上部のみに文様部と周縁を分ける郭線がみられる。瓦当部周縁上辺を斜めにヘラケズリ、裏面と顎部をナデで調整する。平瓦部凹面は、布目を縦方向の丁寧なヘラケズリで消す。凸面もヘラケズリする。胎土は砂が多く粗い。焼成は硬い。また同文の瓦当で左端の隅瓦に使用されたものがある。

**SD147 出土の軒瓦** 三巴文軒丸瓦（図面 27-3）は上半部と右半の周縁を欠損する。内区に高く盛り上がった右に巻き込む三巴文をおき、外区には、大きさ、間隔共に不整な珠文帯の内外に途切れるところもある圏線を持つ。瓦当部裏面、周縁部外周をナデで調整する。胎土は白色、黒色の小石、砂を多く含む。焼成はややあまい。

剣頭文軒平瓦（図面 27-9）は 7 個の剣頭文を配する。剣先の彫りは深い。瓦当部上辺をやや斜めにヘラケズリする。瓦当部裏面をヘラケズリ、顎部をナデで調整する。平瓦部の凹面は布目が横方向のヘラケズリで消されている。凸面は中央部をナデ、両端部をヘラケズリで調整する。側面はヘラケズリである。胎土は小石、砂を多く含む粗い。焼成は硬く

須恵器の質感を持つ。

**SX2 出土の軒瓦** 花文軒丸瓦（図面 27-4）は文様区に 12 葉の菊花文と 19 個からなる珠文帯をおき、その外周に圏線を配する小型の瓦当である。瓦当部と丸瓦部の接合は、丸瓦部凸面のみ粘土を用いて貼り付ける。瓦当部裏面には粘土を用いない。瓦当部裏面をヘラケズリ、周縁部下半、外周をナデで調整する。丸瓦部凹面には布目がみられる。凸面は縦方向のヘラケズリを施す。側面もヘラケズリである。胎土は砂を多く含みやや粗い。焼成は硬い。

剣頭文軒平瓦（図面 27-10）は形態不明の中心飾りの左右に 6 個の剣頭文を浮き彫りする。剣頭の上部が連なり、界線様をなす小型の瓦当である。平瓦広端面凸部に粘土を貼り付け瓦当部を成形する。瓦当部周縁部上辺をヘラケズリ、瓦当部裏面と頸部をナデで調整する。平瓦部凹面に多量の砂が付着する。凸部はナデ調整である。側面はヘラケズリである。若干砂を含むが精良な胎土である。焼成は良好でやや硬い。同文が SX2 に 5 点、その他に 1 点ある。

**その他出土の軒瓦** 以上、比較的瓦当面を持つ瓦が多く出土した遺構を取り上げた。これら以外の遺構、第 1 層、第 2 層から出土した軒瓦の中から解説可能なものを取り上げる。

三巴文軒丸瓦（図面 27-5）は瓦当部上半を欠損する。内区に右に巻き込む三巴文をおき、外区に小粒の珠文を数多く配する。珠文帯の内外に圏線がみられる。瓦当部裏面、周縁部外周をナデで調整する。丸瓦部凹面に布目がみられる。凸面は縦方向のヘラケズリを施す。胎土は若干砂を含むが精良である。焼成は硬い。SE1 出土。

三巴文軒丸瓦（図面 28-13）周縁部左半を欠損する。内区に範の木目が残り、右に巻き込む三巴文をおき、やや大粒の珠文帯の内側に圏線を持つ。瓦当裏面はオサエとナデを施す。胎土は細砂をかなり含みやや粗い。焼成は良好でやや硬い。SK11 出土。

三巴文軒丸瓦（図面 28-19）は瓦当部下半、周縁部上部を欠損する。内区に左に巻き込む三巴文をおき、外区に唐草文を配する。唐草文帯の内側に圏線を持つ。瓦当部と丸瓦部の接合は瓦当裏面を削り込み、丸瓦前端部を差し込み粘土を用いて圧着しており、瓦当部裏面にオサエとナデの痕がみられる。丸瓦部凹面に布目、凸面に縄目のタタキ痕がみられる。側面はヘラケズリで調整し、若干砂を含むが精良な胎土である。焼成はややあまい。SX5 出土。

三巴文軒丸瓦（図面 28-21）は瓦当部上半と周縁部の 1/4 を欠損する。内区に左に巻き込む三巴文、外区は珠文帯の内外に圏線を配する。瓦当部裏面、周縁部外周をナデで調整

する。胎土は砂を多く含むが比較的精良である。焼成はやや硬い。第1層出土。

三巴文軒丸瓦（図面 28-16）は、左に巻き込む三巴の頭部を中心に結ぶ。珠文帯に不均等な間隔で16個の珠文を配し、瓦当部は凹面に布目残り、凸面はヘラケズリとナデの痕がみられる。側面はヘラケズリである。胎土は若干砂がみられるが精良である。焼成は非常に硬く、須恵器の質感を持つ。第2層出土。

複弁八葉蓮花文軒丸瓦（図面 28-15）は文様面の約半分の破片で、周縁部を欠損する。中房に浅い「卍」がみられ、内区には小さい花卉を配する。弁間文が連なり圏線を形成する。弁間文に接するように珠文が置かれる。珠文帯の外に圏線がみられる。胎土は細砂を多く含むやや粗い。焼成は硬い。第2層出土。

複弁系蓮花文軒丸瓦（図面 28-17）は左半下部の破片で、中房の文様は不明である。内区に花卉を配する。瓦当裏面をオサエ、周縁部をナデ調整する。胎土は若干砂を含むが精良である。焼成はややあまい。第2層出土。

複弁六葉蓮花文軒丸瓦（図面 28-20）は左半と周縁部の大部分を欠損する。中房に左巻き込みの二巴文を置く。低い子房と高く盛り上がる花卉を持つ。磨減が激しく、瓦当部裏面にわずかにナデの痕跡がみられる以外は明確な調整痕は不明である。胎土は小石、細砂を含むが精良である。焼成はあまい。第1層。

花文軒丸瓦（図面 28-18）は右半上部の破片である。中房は不明、浅く細長い子房と擬宝子形の花卉を持つ。周縁間に圏線がみられる。胎土は細砂を若干含むが精良である。焼成はややあまい。第2層出土。

花文軒丸瓦（図面 28-14）は右半の一部を欠損する。内区に「米」字形を模した文様を持つ。木瓜形の圏線と、外区に24個の珠文を配する。瓦当部周縁外面と裏面をナデで調整する。胎土は若干砂を含むが精良である。焼成はやや硬い。第2層出土。

唐草文軒平瓦（図面 29-28）は右端部の破片である。文様区上下の珠文帯が、唐草文の内区より一段高くなっている。調整法、胎土、焼成などは図 27-8 に類似する。SK23 出土。

剣頭文軒平瓦（図面 29-25）は中央部の破片である。中心飾りに右巻き込みの三巴文をおき、両側に小振りの剣頭文を配する。剣頭文の上部が連なり、文様面上半の珠文帯と分けられる。折り曲げ手法を用い、瓦当部裏面の曲げ皺の部分まで布目がみられる。胎土は精良である。焼成はあまい。SK16 出土。

唐草文軒平瓦（図面 29-29）は右端部の破片で周縁部を欠損する。脇部の郭線は、側線が突き出し山形をなす。郭線の周囲を珠文帯が巡る。瓦当部成形のため平瓦凹面、凸面共

に粘土を足す。いわゆる包み込み手法<sup>注44</sup>である。凹面をヘラケズリ、凸面をナデで調整する。胎土は若干砂を含むが精良である。焼成は硬く須恵器の質感を持つ、SK226 出土。

唐草文軒平瓦（図面 29-27）は中央部の破片である。文様区全体に非対称形の変形唐草文を配する。調整法、胎土は図 27-8 に類似する。焼成は非常に硬く、須恵器の質感を持つ。SX4 出土。

唐草文軒平瓦（図面 29-26）は右半部中ほどの破片で、唐草文を郭線が取り囲む。調整法は図面 27-8 に類似する。胎土は若干砂を含むが精良である。焼成は硬い。SX5 出土。

唐草文軒平瓦（図面 29-33）は左半の破片である。内区に細い線で蕨手の唐草文を表し、郭線が囲む。外区には小粒の珠文が置かれているが、周縁部上辺が文様面に垂れ下がるため、珠文は拓影に表れていない。平瓦部凸面に粘土を足し瓦当部を成形している。瓦当部周縁部上辺を斜めにヘラケズリ、裏面をナデで調整する。平瓦部凹面は布目をヘラケズリですり消す。凸面にはオサエの痕がみられる。側面はヘラケズリする。胎土は小石、砂を若干含むがやや精良である。焼成はやや硬い。第 1 層出土。

唐草文軒平瓦（図面 29-32）左端部の破片である。文様面全体に唐草文が配される。周縁部は幅が狭く低い。上辺を斜めにヘラケズリする。瓦当部裏面、顎部をナデで調整する。平瓦部凹面に布目がみられ、凸面には縄目のタタキ痕がみられる。胎土は小石、砂を多く含み、やや粗い。焼成は硬い。第 1 層出土。

巴文軒平瓦（図面 29-30）は左端部の破片である。文様面に右巻き込みの小さい三巴文を並べる。周縁部上辺に周外縁がみられる。瓦当部の成形は折り曲げ手法を用いる。瓦当部裏面はオサエとナデを施している。顎部はヘラケズリである。平瓦部凹面は布目をヘラケズリですり消す。凸面はオサエとナデがみられる。側面はヘラケズリする。胎土は細砂を若干含むが精良である。焼成は甘い。第 2 層出土。

剣頭文軒平瓦（図面 29-31）は左端部の破片である。平瓦広端面に剣頭文の箆を押し、瓦当面を成形する。平瓦凸面広端部を削り、顎部を表す。平瓦部凹面は布目をすり消している。凸面は縦方向のヘラケズリがみられる。側面はヘラケズリである。胎土は若干砂を含むが精良である。焼成はややあまい。第 1 層出土。

### 丸瓦・平瓦

図示したもの以外はすべて破片であり、原形を留めるものはない。遺構・包含層を合わせると破片数は、丸瓦 4,089 片、平瓦 15,905 片が数えられる。ここでは SD12 出土の瓦と原形の判る SE16 から出土の丸瓦（図面 30-43）を取り上げる。

丸瓦 43 は全長 34cm、幅 14cm で、凹面に布目痕、凸面は縄目のタタキをナデ消している。また凹面に横方向の縄目痕のみられるもの（図面 30-44）もある。また玉縁部に釘穴のあけられるものもある。

平瓦は図示できるものがない。凹面は布目にみられるものと、全面にナデを施すもの、布目がみられず砂が付着しザラザラするもの<sup>注46</sup>の 3 種類がみられる。凸面は、縄目などのタタキ痕のみられるものが少量あるが、大部分は全体をナデで調整するものと、裏面に砂粒が多く付着する無文の平たい板で叩いたとみられるものがある。タタキ痕のあるものが縄目、格子目（挿図 23-48～51）のみでなく、特殊なタタキ痕もみられる（挿図 23-46・47）

これらの丸瓦、平瓦の胎土は、砂を多く含み、精良さは欠くものの、粗くはない範囲に収まる。焼成は硬い。

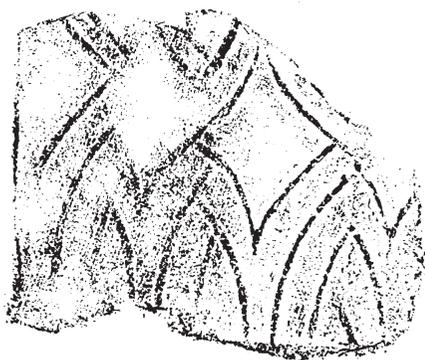
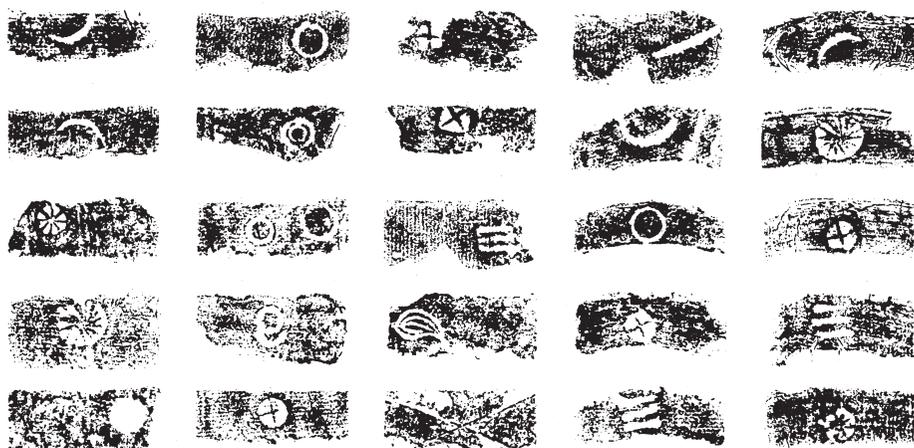
#### 道具瓦

伏間瓦（図面 30-45）は SD12 から出土した 4 点が認められる。完全な形のものはない。凹面に布目痕と粗いヘラミガキがみられる。凸面はナデ調整を施す。側面、端面をヘラケズリする。胎土は小石、砂を多く含みやや粗い。焼成は硬い。

鬼瓦（図面 30-41・42）は SX5・遺物包含層から 5 点出土したがすべて破片である。成形は範を用いるが、突起物は貼り付けている状況がみられる。ナデやヘラケズリにより調整する。裏面はオサエとナデを施すもの、縄目タタキのものがある。胎土は 5 点共に砂を含むがやや精良である。焼成は硬いものと甘いものがある。

これらの他、少量であるが、平瓦を半截した形の熨斗瓦、谷丸瓦などがみられる。

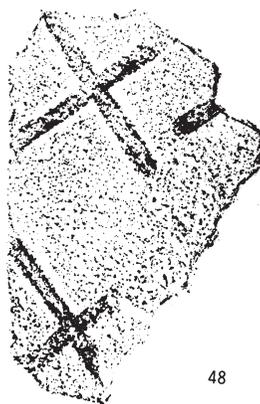
長方形有孔甃は総計 623 片が出土したが原形を留めるものはない。すべて縦の長さは不明であるが、横幅、厚さの異なる数種がみられる。図面 30-35・39 は、横断面形がほぼ長方形である。残余部に一ヶ所ずつ穴が穿たれている。35 は細長く、平面、長辺側面に粗い縄目痕がみられる。胎土は小石、砂を多く含み粗い。焼成はやや硬い。39 は大型の幅の広いもので、両平面に糸切痕がみられる。側面はヘラケズリである。胎土は砂が少なく精良である。指の跡がみられる。焼成はやや甘い。35・39 共に SX2 出土。図 30-36・38 は一平面が丸味を持って凹むもので、一ヶ所ずつ穴がみられる。36 は平面、凹面共に周縁部を残して粗い縄目がみられ、側面は縄目をナデ消している。胎土は砂を多く含みやや粗い。焼成は硬い。第 2 層出土。38 は平面凹面共砂粒が多くザラザラしており粗いナデがみられる。



46



47



48



49



50



51



挿図 23 刻印のある瓦・平行タタキメ (1:2)

側面はヘラケズリである。胎土は精良である。焼成は硬い。SE1 出土。図面 30-34・37 は両平面が凹み、横断面形が H 形をなす。穴が二箇所穿たれている。両凹面共、周縁部を除き粗い縄目がみられる。側面はすべて縄目をナデ消す。34 は若干砂を含むが精良な胎土である。焼成はやや粗い。指の跡がみられる。第 2 層出土。37 は 34 より幅広である。胎土は砂を多く含みやや粗い。焼成は硬い。SX2 出土。

敷甌は出土量が少なく原形を留めるものはない。図面 30-40 も破片で、本来の大きさは不明であるが厚さ 3cm が測れる。一面は丁寧なナデを施しているが、片面は雑なナデですませている。側面もナデを施している。胎土は砂が少なく精良である。焼成は良好でやや硬い。SX3 出土。

#### 刻印

丸瓦、平瓦に刻印するものが 15 種、158 点出土した。刻印する場所は、丸瓦が後端面、玉縁部端面、平瓦は広端面である。

丸瓦、平瓦に共通する刻印に、三日月文、竹管文、菊花文、丸に十字文がある。この内、最も多くみられた刻印は三日月文で、丸瓦が 21 点、平瓦に 39 点が数えられる。竹管文は丸瓦が 2 点、平瓦に 16 点。菊花文は 2 種あり 15 葉の菊花文が丸瓦に 10 点、平瓦に 13 点。八葉の菊花文が丸瓦に 1 点、平瓦 4 点。丸に十字文が丸瓦に 10 点、平瓦に 10 点。『三』の字文が丸瓦に 3 点、平瓦に 9 点。方形に×の字文が平瓦に 5 点ある。他はそれぞれ丸瓦、平瓦にかかわらず 1 点のみである。これら刻印の施される瓦はすべて図 27-8 の手法を用いる、胎土の類似した丸瓦や平瓦に限られる。

## 5 土製品・金属器・石製品他

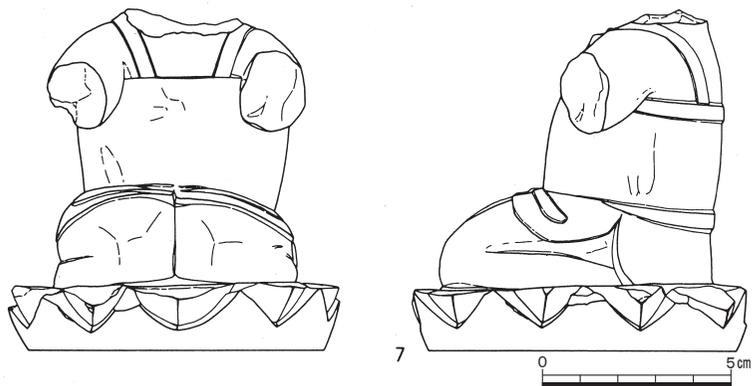
### I 期の土製品

I 期の遺構 (SD29) から出土した土製品には陶製坐像、陶硯、大小の土馬、籠の破片、土錘などがある。小型の籠と瓶については小型土製品の項で取り扱う。

これらの中で、陶製の坐像 (挿図 24-7) や大型の土馬 (図 31-1) は他に類例がなくきわめて特異なものである。

**陶製坐像** SD29B から出土した須恵器の坐像 (挿図 24-7) である。胎土は灰色を呈し、長石、石英などの砂粒を含み、良く焼け締まっている。頭部と両腕を欠失している。着衣と両肩の帯、腰帯はヘラで削り出して表現している。この着衣は一見、鎧に似るが不明である。胴の部分は入念にヘラミガキされている。台座は花卉状に削り出されている。これは仏像の蓮花座に似るが、花卉の表現方法が少し異なっている。この像の性格については、

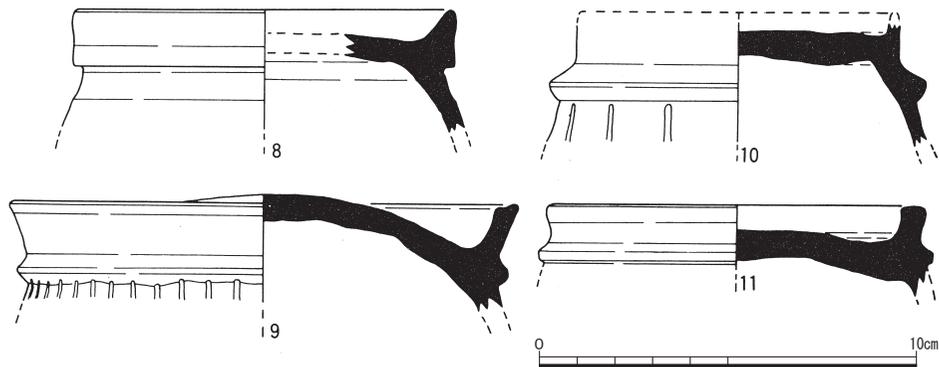
仏像の一種とも、人物を写した像であるとも結論し難いが、正座する像は鬼神像、仏弟子像などがあり、当時の土俗信仰に関連する遺物かも知れない。



挿図 24 陶器座像 (1:2)

**陶硯** SD29 その他から 6 個体の須恵器の円面硯が出土した (挿図 25-8 ~ 11)。すべて破片で全体を窺えるものはない。この内 3 個体を SD29B から検出した。圈台のみの 1 点を除き凸面をなす陸部に外堤部を巡らす。外傾する外堤部の直径は 13.5cm で陸部が笠形をなし外堤より高いもの (9)、外堤部直径が 9.5 ~ 11cm で、陸部が平坦なもの (8・11)、外堤部の器壁が薄く直径 8.5cm 前後で、陸部と海部の比高差がなく調整が粗雑なもの (10) がある。圈台にヘラで幅の狭い縦長の飾りを施すものが 4 点認められた。これらはすべて淡灰色 ~ 暗灰色をなし、胎土はわずかに砂を含むものもあるがほぼ精良である。また陶硯の他に須恵器の杯蓋、杯身、鉢、壺、甕の破片を使用した転用硯 85 点、灰釉陶器の皿、碗を使用した転用硯を 17 点検出した。

**土馬** SD29 その他より 24 個体が出土した。これらはすべて土師器の質感を持つもので 2 点を除き破片である。その内 17 個体が SD29 から出土しているが、SD29A からは 1 個体検出したのみである。特殊な土馬 (図面 31-1) を除けば大小 2 種に分けられる。大 (図面 31-2、3) は 17 個体である。胴、脚部を手づくね成形し、ナデで仕上げる。頭部は粘土

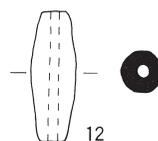


挿図 25 陶硯 (1:2)

板を二つ折りにして貼り付け竹管で眼を入れる。頭頂部が長くのび、たてがみを表すための横顔が三日月形に見えるものがある。顎の部分から首にかけ粘土紐を貼り付け、手綱を表す。小（図面 31-4～6）は 6 個体である。小ぶりで脚部が短いのみで、成形・調整方法は大と同様であるが、より簡略化しているといえよう。特殊な土馬は、長さ 25.2cm、高さ 13.4cm と大型のもので写実的である。鞍を装着し、鐙の痕跡がみられる。下腹部に陽物を表現している。竹管で眼、鼻、面繫、胴繫、手綱、尻繫などの装具を表現する。

**竈** SD29D から焚口を含む上半部の破片が出土した。<sup>注47</sup>破片のため全体を知ることはできないが、復元口径は 30cm 前後のものと思われる。内面は簡易にハケ調整を施した後、ナデ調整をする。外面はオサエとナデ調整する。わずかにハケメの痕跡が残る。焚口はヘラで切り抜く。内面に煤が付着している。

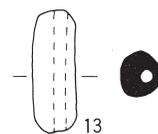
**土錘** SD29 その他から 4 点の土錘が出土した。土師器の質感を持ち、長さ 3.5cm を越すものではなく、いずれも中空の管形である。手づくねで調整している（挿図 26-12・13）。



Ⅱ期の土製品は数量も少なく、きわめて小破片で、全体の形を窺うことのできるものがないため説明を省略する。

### Ⅲ期の土製品

Ⅲ期の遺構、遺物包含層（第 1 層・第 2 層）から出土した土製品には、仏像、陶硯、咄埴、鋳型、小型土製品の他に生産用具と思われる用途の不明なものがある。

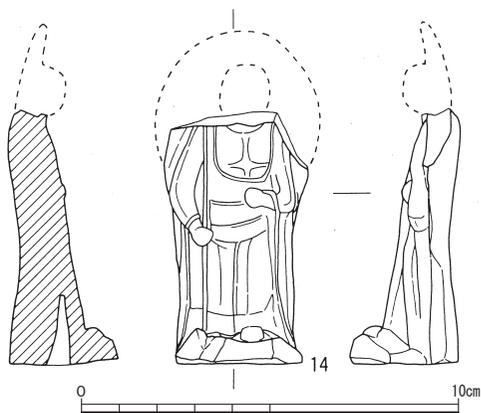


**仏像** SX5 より出土した土師器の質感を持つ型抜き立像で、頭部が欠損する。残存長 6.5cm である。（挿図 27-14・28）。胸元が



挿図 26 土錘 (1:2)

大きくあき、袂が長く、裾が足下に余る二重の長衣を着装する。右手の持ちものは錫杖と思われる、左手の持ちものは確認できない。像の前面には、白色の顔料を塗布した痕跡が残っている。残余部から光背を持つと推定できる。<sup>注48</sup>台座の底部に径 1 × 0.6cm、深さ 1.8cm の穴がけられている。硬く焼き締めており胎土は淡赤褐色をなし、やや砂を多く含むがほぼ精良である。



挿図 27 仏像 (1:2)

**陶硯** 第1層から出土した陶器 I 類の質感を有する 1 点<sup>注49</sup> (挿図 39-22) のみである。緩やかな円弧を画く陸部の破片であり全体の形は判らない。

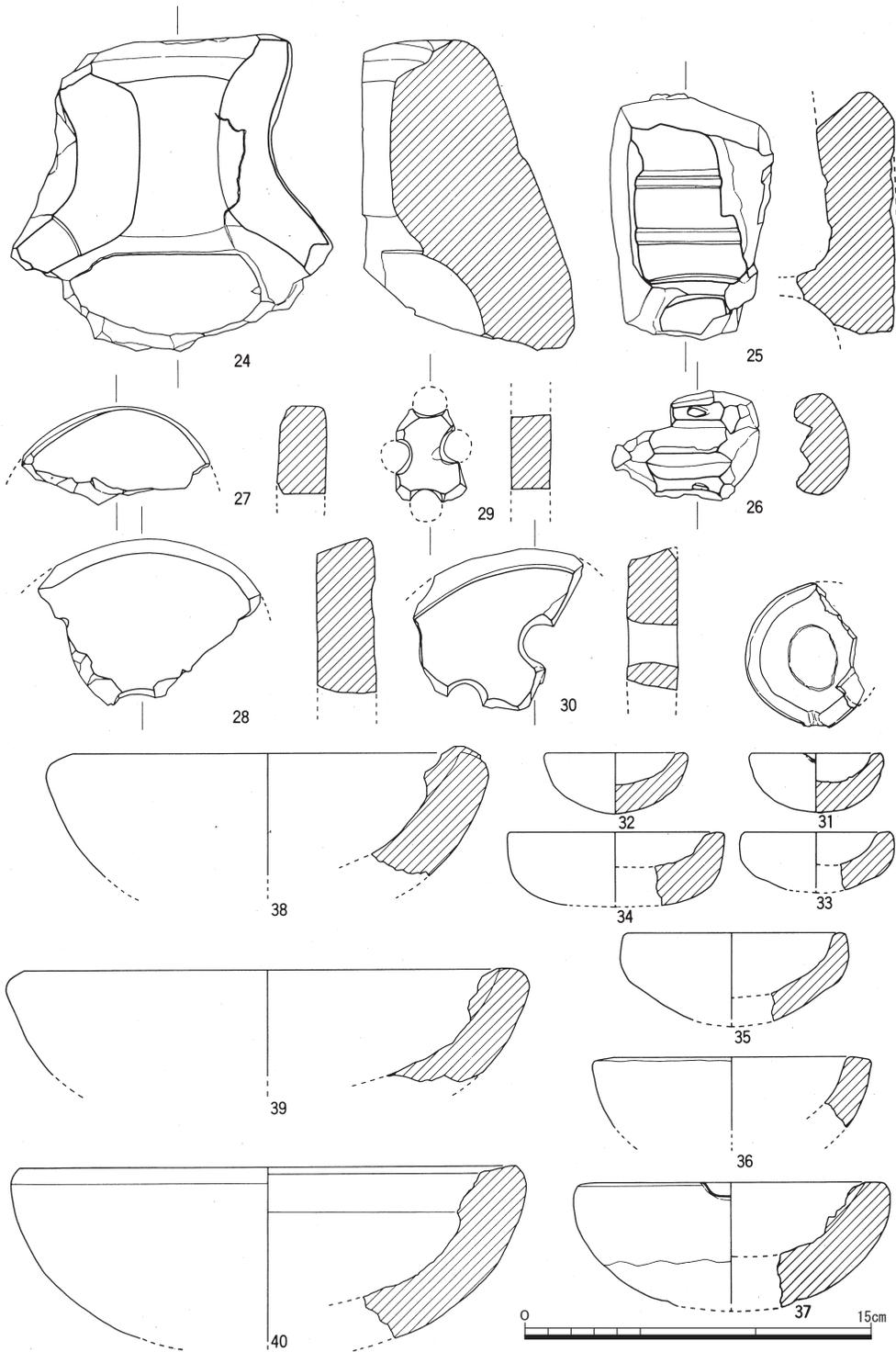
**埴塼** III期の遺構、包含層から 304 片が出土した。完全な形を残すものはないが、ここでは実測と観察可能なものについて触れたい。埴塼は椀形をなし、大きさ、用途によって三種に分けられるが、いずれも成形法は手づくねで、オサエと簡易なナデを施している。



挿図 28 仏像

Aは小型のもの(挿図 29-31～33)で9点が確認できる。大きさは口径 5.6cm～6.3cm、高さ 2.5cm～2.6cm を測る。注口を二箇所を持つものが1点、片口が認められるもの2点がある。胎土は細砂をかなり含み粗い。内面の金属残滓の分析結果では、金、銀の付着するものが4点認められた。Aは使用に際して生じる損傷の程度はわずかである。Bは中型のもの(挿図 29-34～37)で9点が確認できる。口径 9.3cm～13.3cm、高さ 3.2cm～5.6cm を測る。片口を持つものは1点ある。胎土はAより砂粒が大きく多くなっている。青銅の溶解に使われたものが2点認められる。Bは外面の底部に火熱による損傷を受けるものが多い。Cは大型なもの(挿図 29-38～40)だが、実測可能なものは5点がある。口径はほぼ 19.0cm～22.7cm で、高さは 7.5cm～8.0cm である。器壁は厚く 2.0cm～3.0cm である。片口を持つものが1点みられる。胎土は砂、小石などを含み粗い。スサ、籾殻などが器壁の外表近くに多くみられる。Cは破片なども合わせ、すべて青銅の溶解に使われた痕跡がみられる。外面では特に底部が強い火を受け破損している。

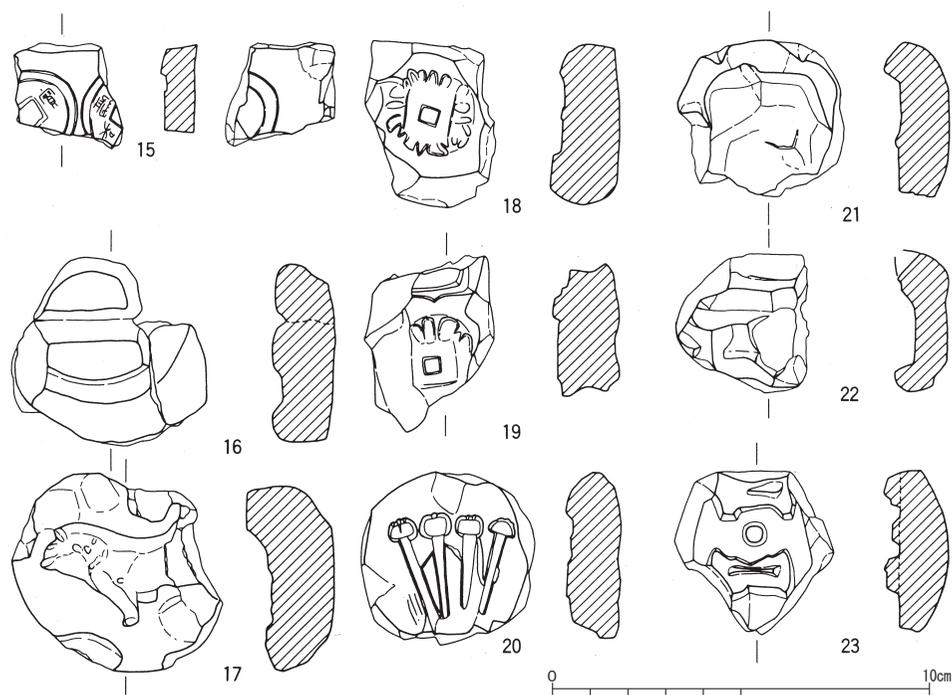
**鑄型** III期の遺構、遺物包含層を合わせ 102 片が出土した。全形が判るものはないが、釘、釘隠しなどの飾り金具、銭貨、水瓶の鑄型がみられ、水瓶などの大きいもの(挿図 29-24～26)と、釘、飾り金具などの小さいもの(挿図 30-15～23)に分けられる。大きい鑄型は裏型に砂、小石、スサが混じった粘土を用い、表型に微砂の混じる粘土を用い



挿図 29 鑄型・坩堝・その他の道具類 (1:3)

母型を成形している。外面には強い火を受け赤色化した痕跡があり、一部剥離している。小さい鑄型は裏型に細砂を多く含む粘土を用いる。表型は密な粘土を薄く延ばし、凸部などは粘土を貼り付けるなどの手法で母型を成形している。外面は火を受け赤色化している。小さい鑄型には、円頭部に2～3条の削りのある角釘4本の釘先を要にして扇状に配置をした鑄型(20)、中央に方形の2段の高まりを持ち周縁部を八葉の花弁形に割りふるもの(18・19)、私鑄銭を鑄出したと思われ「和・通」の逆字が読めるもの(15)や、用途の良く判らないもの(16・17・21～23)がある。大きい鑄型には水瓶の鑄型(24)がある。口頸部から肩部にかけての破片と体部の破片で、細い頸部と大きく広く開く口縁部がみられる。2枚合わせの型で、合わせの部分に粘土を用いて隙間を充填する。他に断面形が山型をなす輪状の鑄型(25・26)がある。

**その他の道具類** 遺構、遺物包含層から56片が出土した。原形を留めるものはないが、単孔式のもの(挿図29～27・28)と、多孔式のもの(挿図29-29・30)に分けられる。直径は約10cm～18cmまでで一定ではない。厚さ1.5cm～2.6cmであるが、単孔式のものやや厚い傾向がある。単孔式のもの胎土に粗い砂が多く、スサを含んでいる。片面が強



挿図30 鑄型(1:2)

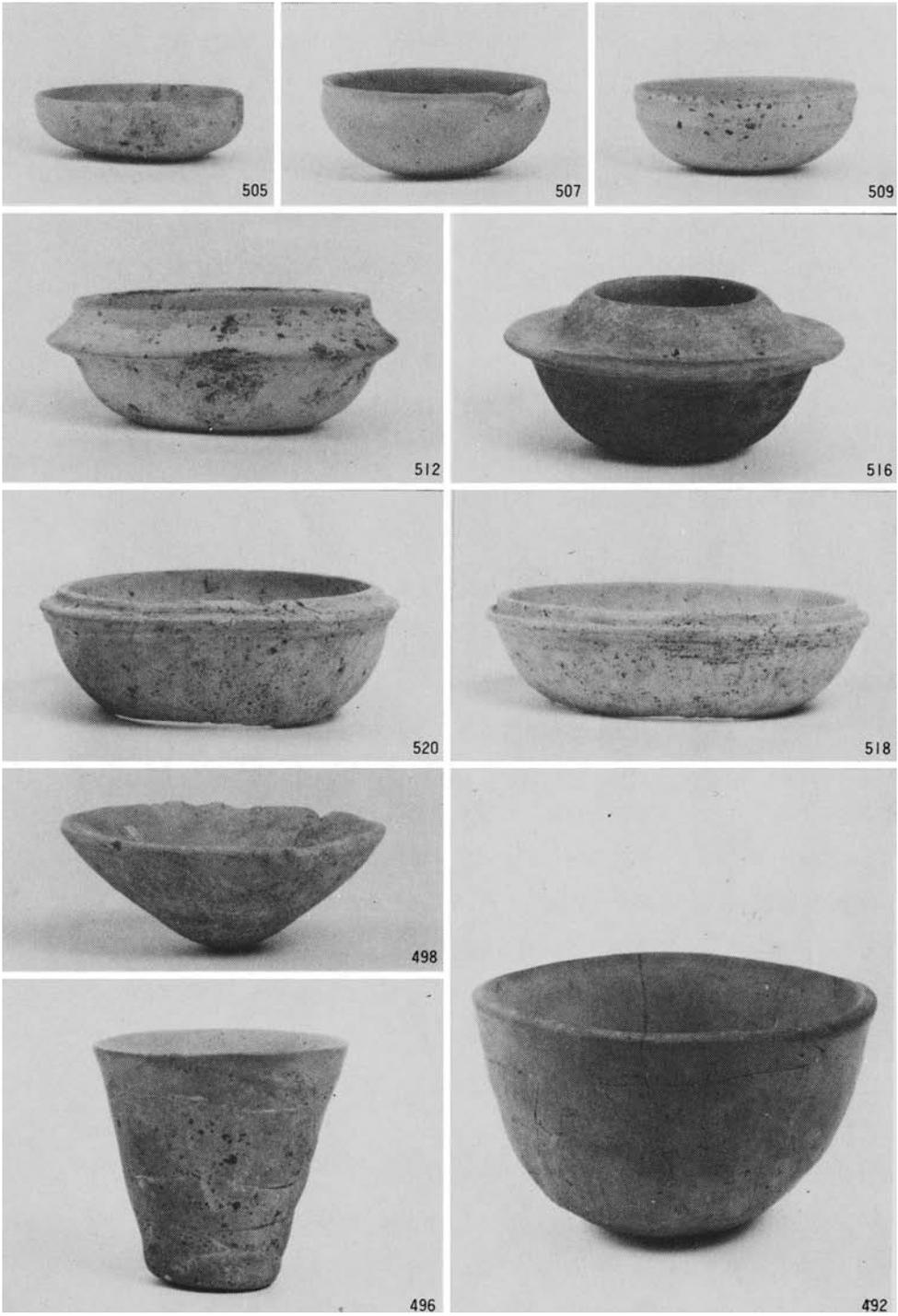


插图 31 小型土製品

い火を受け剥離している。多孔式のもの胎土も同様であるが、密な胎土を持つものも3点みられる。使用目的、部位の違いによるものと考えられ、多孔式ものは強火による剥離がみられず、赤色を帯びるだけである。これらはすべてナデ調整している。炉などに使用したと思われるが、使用部分、用途などは判らない。<sup>注51</sup>

**小型土製品** 土師器と瓦器（竈、鉢、鍋、釜など）の形態を模した小型の土製品がある。ここではⅠ期～Ⅲ期の区分にかかわりなく、形態から、それぞれが大型のどの器形に類似するか、またその特徴を備えているかにより、鉢、鍋と呼称した。

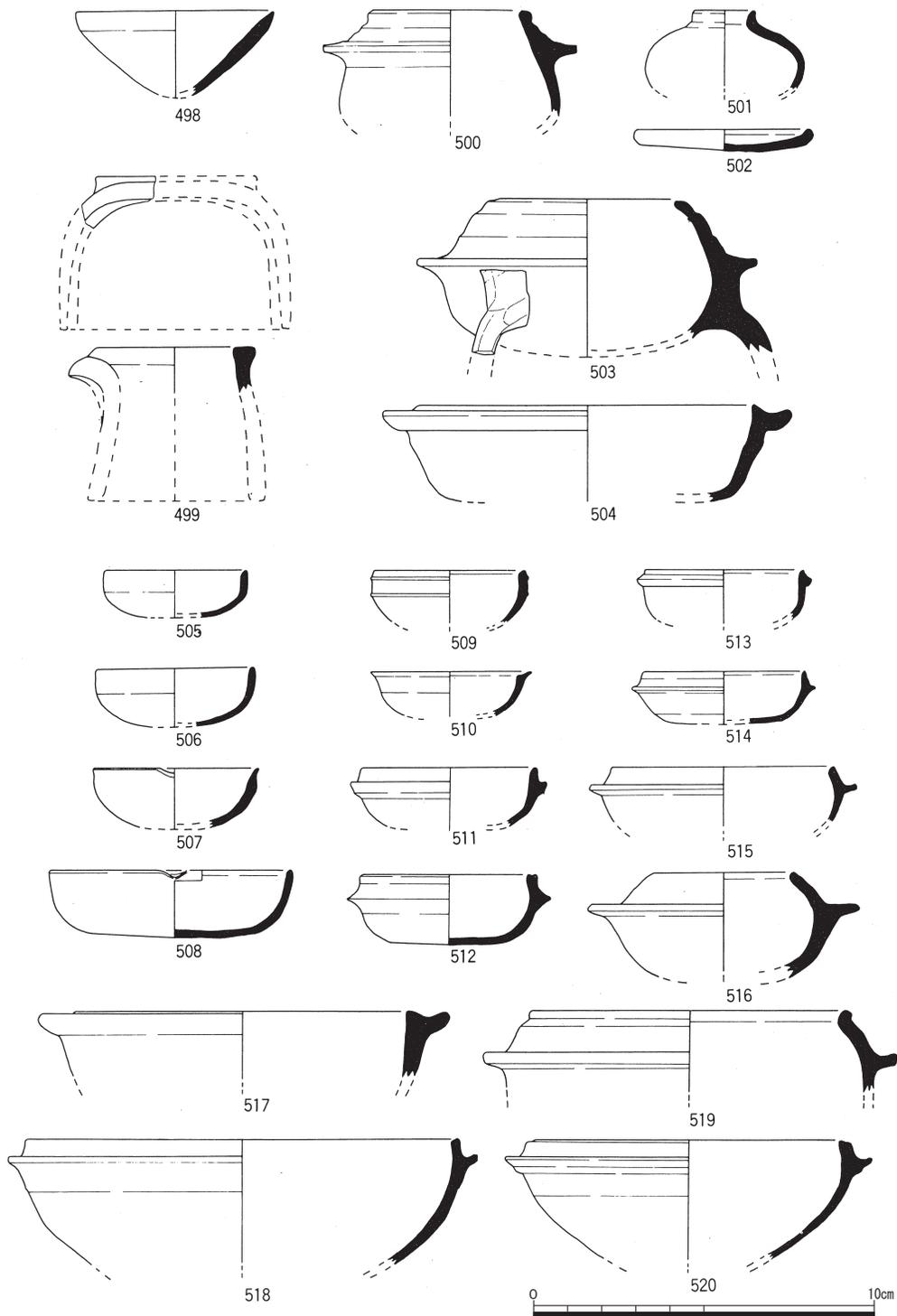
挿図 32 の 498 は甔、499 は竈の模型でⅠ期に属する土師器である。498 は、尖底部と大きく開く口縁部を持つ。手づくねで成形、内面と口縁部外面にナデを施し、体部下半は未調整である。淡黄灰色で精良な胎土である。SD29B から出土。499 は竈焚口上半左側の破片で底を持っている。手づくねで成形、ナデ調整する。胎土はきわめて精良である。SD29B から出土。

挿図 32-500～504 は瓦器で、Ⅲ期の遺構、第1面、第2面から出土した。501 は頸部の短い肩部の張った壺である。口縁部、体部上半をナデ、体部下半をオサエで調整する。胎土は精良である。502 は平底から口縁部が上方に低く突出する浅い皿である。内面をナデ、外面をオサエで調整、胎土は精良である。500・503 は羽釜で、503 は三足を持ち、鏝と足は貼り付けである。口縁部、体部内面をナデ、鏝部より下部をオサエで調整する。胎土は精良である。これらはⅡ期の羽釜の形態を留めている。504 は平底の浅い鍋である。底部外面のオサエ以外はナデで調整する。胎土は精良である。

挿図 32-505～515 は色調が淡黄灰色から淡黄褐色の精良な胎土の土師器で、特記するものを除き、手法的にはSK14 出土の杯Aに類似する。これらはすべてⅢ期の遺構、第1面、第2面から出土した。505～509 は鉢形である。丸底の505～507 と、平底の508 がある。507・508 は片口を持つ。509 は体部外面上半に二条の凸帯を貼り付けている。510 は口縁端部が外方に折れ曲がり、鍋を模している。511～515 は鏝を貼り付け、羽釜を模している。口縁部が内傾するものと、ほぼ直立するものがある。底部がやや丸味を帯びるものもあるが、底部まで観察できたものはすべて平底である。

挿図 32-516 は色調が淡赤褐色をなし、手法的には他と異なり、鏝部より下をヘラミガキする。また体部下半に煤が付着している。

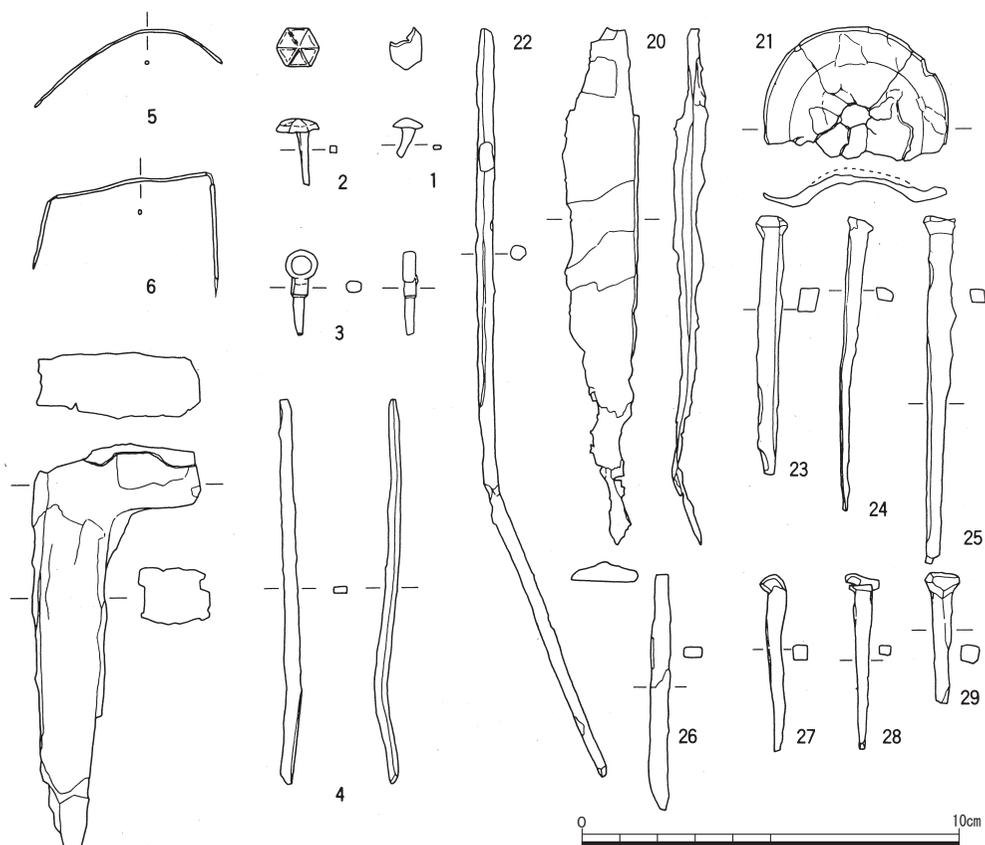
挿図 32-517～520 は前記のものに比べ大型のものである。517 は鍋で、外方に折れ曲がった口縁端部が肥厚する。518～520 は羽釜である。519 は内傾する口縁が端部に至り、上



挿図 32 小型土製品 (1:2)

方に折れ曲がっている。518・520 はやや内湾する体部とわずかに内傾する口縁部を持つ。体部外面、口縁部近くに鏝部を貼り付ける。いずれも 505～515 同様の色調、胎土の土師器である。

これら小型の器形のもは大きさで二分でき、さらに特殊な用途のものと同様に区別できる。I 期の甑、竈などは祭祀用であろう。瓦器はこれらの中でも大きいものは日用品として使用可能と思われるが、明確な使用痕の認められるものは今回出土していない。土師器の小さいものは瓦器の鉢、鍋、釜の形態を移したと考えられる。これらは特殊な用途に用いたものであろう。516 は体部外面と鏝部に煤が付着している。これは同器形のもの 3 点に共通してみられ実用品であるとも考えられる。517～520 (杯 A の大きさ) は実用品であったものか、518・520 などが底部内面に使用痕の磨減がみられる。しかし煤の付着や火を受けた痕跡はなく、鍋、釜として本来の用途に使用したものではなかろう。ま



挿図 33 金属製品 (1:2)

た 518・520 は同時期の杯 A に鏝部を貼り付けたものと考えて良い製品である。<sup>注62</sup>

### I 期の金属製品

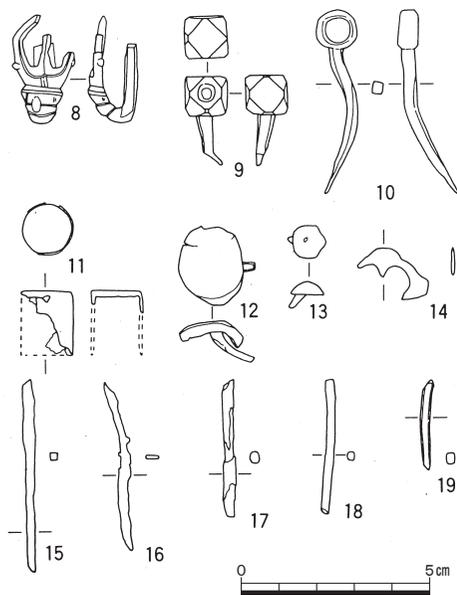
I 期の金属製品（挿図 33-1～7）には銅製品、鉄製品、銭貨がある。すべて SD29 から出土したものである。

**銅製品** 飾り金具、鋷、針金などの他、形態不明のものを合わせ 28 片がある。しかし原形を留めるものはない。環頭の金具 3 は、直径 8mm の環頭部、柄部、先端部を一体に鑄造する。鋷 1・2 は、頭部が六角形をなすものと弁数不明の 2 点がある。鋷頭は笠形をなし、弁間の彫りが浅く断面方形の鋷部は中心を外している。針金はすべて断面形が角形で太いもの 4 と、細いもの 5・6 がある。5 は湾曲しており、両端を尖らせる。6 は本来まっすぐのものであったと思われる。両端を尖らせている。

**鉄製品** 釘の他に鉄製品で形態の判るものはない。15 点が出土した。SD29B 出土の釘 7 は鍛造の角釘である。全長 11.5cm 以上の大きいもので、長方形の頭部を一方に折り曲げる。他にも鍛造の小さい釘が 6 点ある。

**銭貨** SD29 から 8 点が出土した。隆平永寶、寛平大寶（写真 59-30・31）の 2 点は確認できたが、他は腐食が激しく銭種を判別するには至らなかった。

II 期の金属製品は、鉄製品では釘、その他があるが、非常に量が少ない。銭貨は、天聖元寶の他、字画不明の 3 点がみられるのみである。



挿図 34 金属製品 (1:2)

### III 期の金属製品

III 期の遺構、第 1 層、第 2 層から出土した金属製品（挿図 33・34-8～29）には銅製品、鉄製品、銭貨などがある。

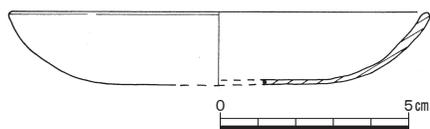
**銅製品** 飾り金具、鋷、環頭釘、針金、その他がある。飾り金具には円筒形の 11 や、雲形の薄版 14 がある。鋷は笠形の円頭部に鍍金を施す 13 や、円頭部が 2cm の大きさの 12 がある。環頭釘 10 は、直径 1cm の環頭部と角形の釘部を一体に鑄出するものである。針金は、断面形が角形のもの 15・16・19 と、丸形の 17・18 がある。何らかの器物の一部と考えられる断片ばかりで、先端部のあるものはない。17 は鍍

金を施している。その他に五銖杵の一部と考えられる 8 や、短い釘部と頭部を 14 面に面取りした有孔の 9 がある。また小破片が 29 点あるが、原形の判るものはない。

**鉄製品** 刀子、釘、針金、その他がある。刀子 20 は、錆化が激しく全体の形は判らないが、刃部の残存長 11.5cm、幅 2cm で小刀の部類であろう。釘は 261 点出土した。大小はあるが、いずれも断面形は角形である。頭部は片側に折り曲げた 25・27 と、両側に短く突出する 23・24・28・29 の 2 種がみられる。すべて鍛造品である。針金 22 は長さ 20.5cm で、断面形は丸形で片方の端を尖らす。断面形が角形の 26 もある。その他、直径 5cm で円形の陣笠形の金具 21 がある。他は断片であり原形の判るものはない。

**銭貨** SE1・SK10・146・SX5・第 1 層・第 2 層などから計 79 点が出土した。その中から残存状態のよいもの 35 点を写真 59 に取り上げた。銭種は元豊通寶、開元通寶、祥符元寶、元祐通寶、太平通寶、淳熙元寶、景德元寶、皇宋通寶、熙寧元寶、嘉祐元寶、至道元寶、永樂通寶<sup>注53</sup>などの宋銭、明銭があるが明らかに国産銭貨と認められるものはない。

**木製品** I～III 期の遺構と遺物包含層を通じて、漆器、木製品の破片、木杭、板片、曲物（井戸底部に設置されたものを含む）など計 61 点が出土した。このうち説明不要と思われる木杭、板片などを除いた 18 点が漆器、木製品の破片である。いずれも残存状態が不良であり、原形を留めるものがないため、図示や写真掲示が可能なものは SD29C から出土した漆器の皿（挿図 35）のみである。この漆器の皿は非常に薄い器壁で、緩やかに内



挿図 35 漆器 (1:2)

湾する体部が口縁端部に至り肥厚しており、全体を削って形を整えたのち丁寧に磨き仕上げる。黒漆を均一に刷毛塗りする。他に SD29 から 5 点の漆器片が出土した。

II 期は SE11 から漆器片、形態不明の木器片が出土したのみである。III 期は SE1、SK7、その他の井戸、土壙などから漆器片、形態不明の木器片、乾漆の箱形をなすと思われるものが出土した。

**I 期の石製品** I 期の遺構、その他から出土した石製品に

は石銚帯と石銚帯未製品、砥石がある。ここでは石銚帯と未製品について触れたい。

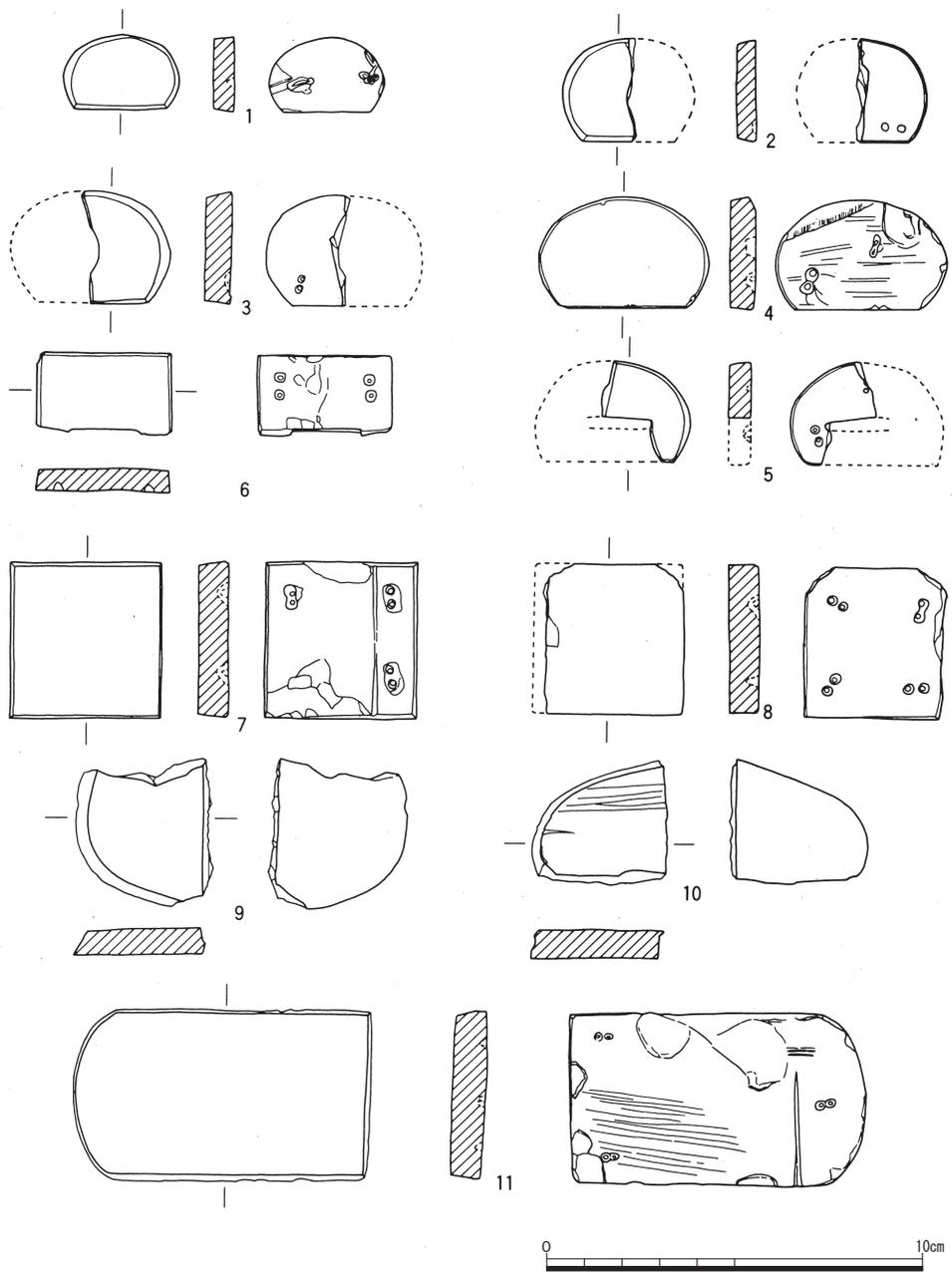


插图 36 石鑄帶 (1:2)

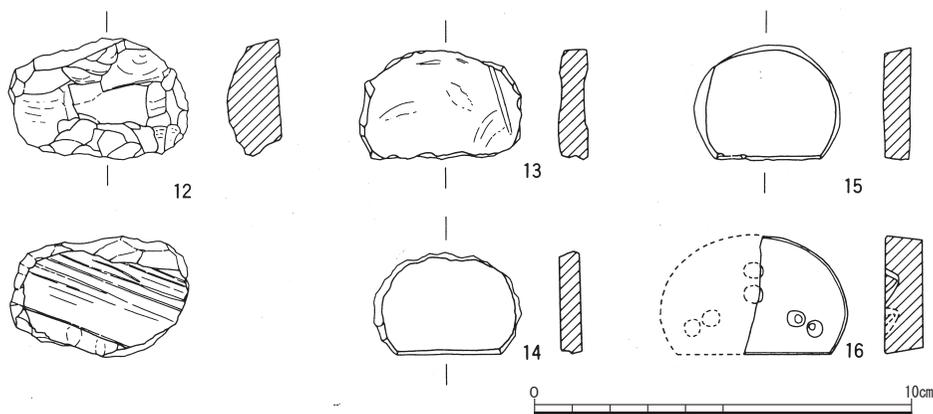
**石銚帯** SD29 その他から丸靱 11、巡方 9、鉞尾 3、これらの未製品 26 を含めて 49 点  
 が出土した。SD29 からは 35 点が認められ、A は 3、B、C が 14、D が 18 点である。石材  
 は、サヌキトイド、チャート、石英片岩、流紋岩、凝灰岩などを使用している。丸靱（挿  
 図 36-1～5）は表面を丁寧に研磨し、光沢を出す。側面も同様に磨いており、潜り穴は三ヶ  
 所であるが、小型のもので二箇所のもの（1）もある。透かしのあるもの（5）が 1 点みられる。

巡方（挿図 36-6～8）は丸靱同様の調整を施し、裏面は粗く研磨するのみで光沢はない。  
 四隅に潜り穴がある。透かしのあるもの（6）が 1 点みられる。鉞尾（挿図 36-9～11）も  
 調整方法は同様に、三ヶ所の潜り穴を持つ。出土した石銚帯の中で、実際に使用していた  
 と考えられるのは 3 点ある。潜り穴に銅線が残るものは丸靱に 1 点、巡方に 1 点みられ、  
 鉄線が残るものは巡方に 1 点確認できた。

石銚帯については、銅銚帯と共に『平城宮発掘調査報告VI』で分類、考察されているの  
 で、ここでは石銚帯を、平城宮VIの基準に従い分類したい。出土した石銚帯はすべてb類で、  
 A-I に類するものは丸靱 2 点（挿図 36-4・挿図 37-16）、巡方 3 点（7・8）である。A-II  
 では丸靱 2 点（2・3）、巡方 2 点（挿図 38-20・21）である。A-IVでは丸靱 1 点（1）を確認  
 した。しかし巡方でこの基準にあてはまらないものが 3 点ある。また鉞尾（11）はCに類  
 似するが、縦の長さ 4.5cm と A-1 類より大きい。もう 2 点ほど鉞尾（9・10）があるが、い  
 ずれも未製品である。

石銚帯の未製品が多く出土していることから、加工の過程について若干触れておきた  
 注54  
 い。

丸靱（挿図 37-12～16）の原材（12）は、片面を平らに切りとった状態で、すでに丸靱

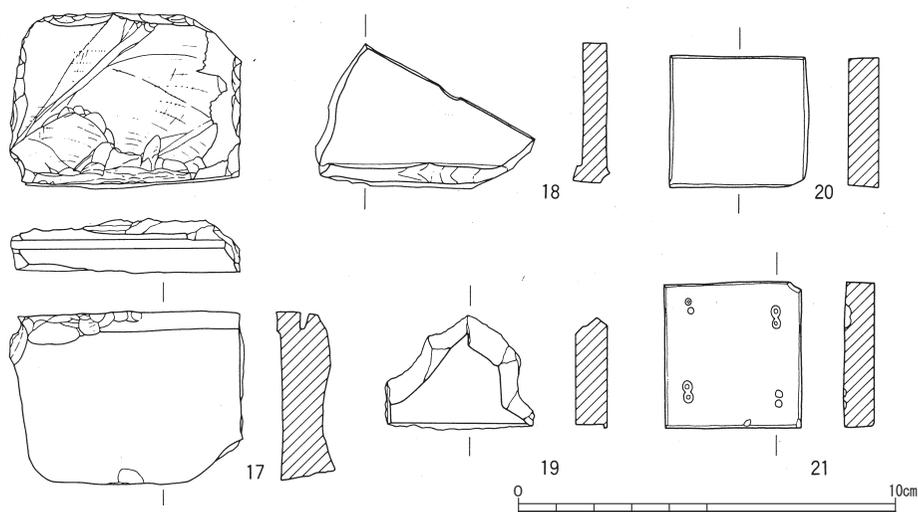


挿図 37 丸靱製作工程 (1:2)

を意識して楕円形に打ち欠いている。(13)は両面を切り取り、板状にしたものである。(14)は丸靱の形を整える段階で下辺をまっすぐ切り揃えている。(15)はさらに細かい調整を行い、周縁部の下辺を研磨して面を整えている。この段階で潜り穴を穿つ。(16)は丹念に研磨し、仕上げた完成品である。巡方(挿図38-17~21)の原材(17)は、片面を平らに切り取り、さらに片面に切れ目を入れている。(18)は両面を切り取り、板状にしたものである。(19)は巡方の形を整える段階で二方向の切断面がみられる。ここまでの切断は、石材を完全に切り離すのではなく、一部を残して最後におりとなっている。(20)は仕上げに入った段階で、側面の面取りを行うが、一面が未調整のままである。(21)は潜り穴を穿ち、表面や側面を丹念に研磨し、完成したものである。これらの石材の中には黒曜石<sup>注55</sup>な

遺物番号	種類	石材	遺物番号	種類	石材
挿図36-1	丸靱	サヌキトイド	挿図37-12	丸靱	チャート
2	丸靱	酸性凝灰岩	13	丸靱	石英片岩
3	丸靱	半花崗岩	14	丸靱	角閃石安山岩
4	丸靱	サヌキトイド	15	丸靱	緑色凝灰岩
5	丸靱	石英片岩	16	丸靱	紅簾石石英片岩
6	巡方	流紋岩	挿図38-17	巡方	黒曜岩
7	巡方	石英片岩	18	巡方	サヌキトイド
8	巡方	流紋岩	19	巡方	輝緑凝灰岩
9	鈍尾	チャート	20	巡方	角閃石安山岩
10	鈍尾	チャート	21	巡方	角閃石安山岩
11	鈍尾	サヌキトイド			

表1 石鈔帯の材質



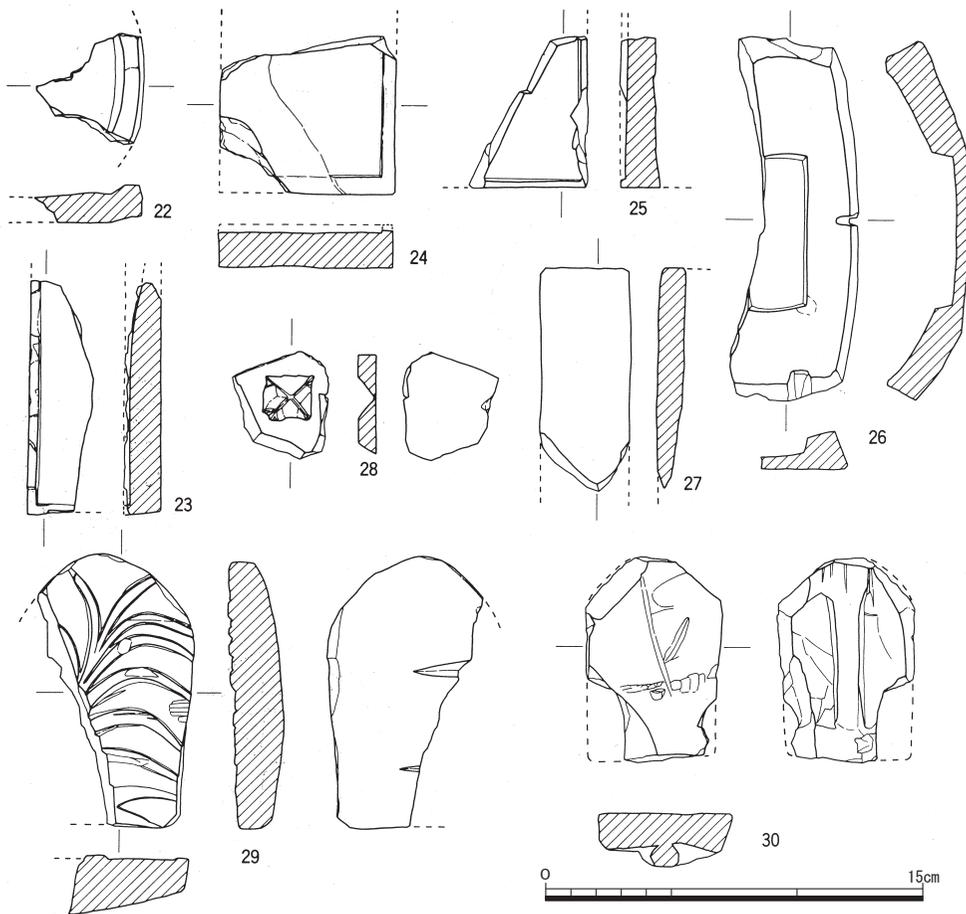
挿図38 巡方製作工程(1:2)

どもあり、これを見事に切断、研磨することは、当時の技術の一端を物語るものである。

**Ⅲ期の石製品** Ⅲ期の遺構、第1層、第2層より出土した石製品には、石硯、滑石製釜、石臼、砥石、その他がある。

**石硯** 7点（挿図 39-23～25）が遺構、第1層、第2層より出土した。原形を留めるものはなく破片ばかりであるが、形態はすべて方形をなすと考えられる。各辺を平滑に研磨しており、陸部に使用痕が認められる 25 などがある。すべて粘板岩系の石材である。

**滑石製釜** 体部外面上半に鏝を持つ羽釜と認められるものが、断片ばかり 19 点ある。他に底部 2 点、体部片 7 点があり、これらは便宜上釜に含めている。口径を確実に求められるものはないが、大小各種あると推定できる。ここでは第1層より出土した 2 点（挿図 40-31・32）を取り上げる。31 は復元口径 17cm 程度と考えられる。32 は復元口径 25cm 程



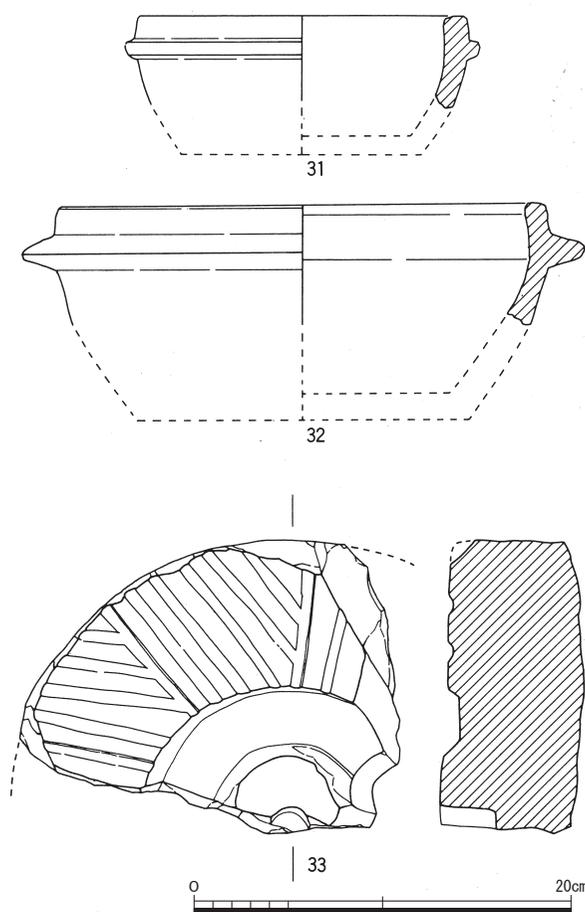
挿図 39 石製品・陶製品 (1:3)

度であろう。これらはすべて口縁と鏝部を削り成形したのち滑らかに磨き、底部は削りの痕跡をそのままとどめる。煤が付着するものが多い。

**石臼** 遺構や第1層、第2層から5点が出土した。臼は直径19cmのもの、SX3より出土した直径28cmのもの（挿図40-33）がある。その他の3点は受け皿部分の破片である。これらすべての石材は花崗岩である。

**砥石** SE1より出土したもの（挿図39-27）を始め、使用痕の認められるものが大小各種25点ある。これらのほとんどは短冊形をなすことが判るが、すべて断片で原形を留めるものはない。石材には砂岩系と粘板岩系のものがある。

**その他の石製品** 遺構や第1層より特異な形態のもの（挿図39-26・28～30）が出土



挿図40 石製品 (1:4)

した。26は滑石製釜の口縁部の破片を再利用したもので、内面は中央部に長方形の凹が削り取られている。外面は鏝部を削り落とし、平坦に調整する。28は一部欠損しているが側面3辺を面取りし、表面の中央に四角錐形の削り込みがみられるものである。裏面は加工していない。また熱を加えられた痕跡がみられる。石材は粘板岩である。29は平坦面に秋草文風の図柄を浮き彫りするが、断片のため全体の形は判らない。背面を削り、柔らかな丸味を付ける。滑石製である。SD12より出土の30は背面につまみを持ち、前面を平坦に削る。中央部が滑らかになっており、線刻画がある。長方形の一边を山形に造るものと思われ、5ヶ所の面取りがみられる。滑石製である。

## 自然遺物

平安京の発掘調査報告の中で、自然遺物は左京四条一坊の他、数例報告されているにすぎない。<sup>注56</sup>しかしながら最近の発掘調査では、各時代の遺構から当時の食生活や植生を彷彿とさせる動物の骨や、植物の種実・葉などが多数出土している。特に水分の多い井戸や溝には植物遺体が良好に残存しており、栽培植物や雑草の種実が多い。<sup>注57</sup>雑草の種実はその大きさが数ミリと小さなものが多く、調査中に発見されることはまずない。そこで、井戸や溝の土をサンプルとして採取し、屋内で1mmメッシュの篩で水洗いし、ピンセットあるいは筆で拾い出し、同定を行っている。拾った種実はすべてサンプル瓶にエチルアルコール漬けにして保存している。動物骨は保存状態の悪い場合が多く、5%前後の水溶性アクリル樹脂を繰り返し塗布して固定し、保存している。

今回の発掘調査の結果、各時期の遺骨や包含層から多数の魚骨、動物骨、植物の種実を上記の方法を用いて検出している。以下はその報告である。

**I 期** SD29B 他の流路から総数 200 本以上（破片を除く）のウマの臼歯と、数本のウシの臼歯を確認した。これらの臼歯は溝の中で概に顎骨から離れてバラバラになっており、調査中にウマの頭数を推定できる状態ではなかった。そこで、溝に流されていたウマの頭数を、臼歯の中で最も特徴のはっきりしている下顎第三臼歯（略称 M<sub>3</sub>）の本数で推定した。

その結果、左右とも 11 本の M<sub>3</sub> を数えることができた。したがってこの溝には、少なくとも 11 頭分のウマの歯が流されていたことになる。この頭数は、臼歯の総本数が 200 本を超えていることから肯定できる。<sup>注58</sup>ところで、この溝からは歯以外に四肢骨をまったく確認していない。<sup>注59</sup>ウシの歯はわずかに数本を数えたのみで 1 頭分を超えることはないであろう。

植物遺体では、タデ属、ナス、ウリ、ホタルイ属の種子、オニグルミ、モモの核を検出している。オニグルミには、焼痕があり、子葉の摘出方法を示唆するものである。モモは、先端が尖っており、平安時代以前にみられるような丸いタイプではない。<sup>注60</sup>

**II 期** SK478 に代表される 100 近い土壌の土をサンプリングし、多数の魚骨片、炭化物を得ている。魚骨片のほとんどは、小さな骨がさらに小さく折れた状態を示し、種の同定をするに至らない。同定可能な魚骨にはタイ類の歯骨 1、ハモ類の前上顎骨 2 があり、これらの個体は、現生の標本と比較したところかなり大型である。

植物遺体では、火熱を受けて炭化したマメ類 4 粒、オオムギ 154 粒、コムギ 82 粒、ムギ類 90 粒、イネ 17 粒、イネらしいものが固まったもの 6 個、ウメ破片、カキ 2 粒、ガマズミ属 1 粒の種実と、まったく火熱を受けていないスミレ属 (?) 2 粒、シソ 1 粒、ナス科 4 粒、

ヤエムグラ属(?)1粒、ウリ1粒、ホタルイ属4粒、クワ4粒の種実がある。

**Ⅲ期** Ⅱ期と同様に、同定の困難な魚骨の破片や炭化物などがある。SK14ではウマの切歯本数を、SD12ではウマの尺骨1を確認している。

**まとめ** Ⅰ期の溝から11頭分のウマの歯と、1頭分のウシの歯を確認した。平安京内の溝からウマあるいはウシの歯や四肢骨を検出した例はこれまで何例かあるが、このように多量に検出したのは今回がはじめてである。今後さまざまな見地から検討を要する問題である。Ⅱ期の土壌から検出した魚骨、炭化物については食料残渣であると考えている。

時代	出土遺構	動物	植物
Ⅰ期	SD29B	ウマ <i>Equus caballus</i> LINNAEUS 下顎破片 臼歯 (上・下)	タデ <i>Polygonum</i> sp. ナス <i>Solanum melongena</i> L. ウリ <i>Cucumis melo</i> L. ホタルイ <i>Scirpus</i> sp. オニグルミ <i>Juglans ailanthifolia</i> CARR. モモ <i>Prunus persica</i> BATSCH.
	SD29C SE20・21	ウマ 臼歯 (上・下) ウシ <i>Bos taurus domesticus</i> GMELIN 臼歯 (上・下)	
Ⅱ期	SD25	トリ? <i>AVES</i> 小動物 ホ乳類 大腿骨 (遠位端) ウマ 臼歯	モモ
	SE11	ヒト? <i>Homo Sapiens</i> LINNAEUS 上顎の一部	
	SK478	タイ <i>Pagrus major?</i> 歯骨 ハモ類 <i>Muraenesox</i> sp.? 前上顎骨 魚 椎骨 ネズミ <i>MURIDAE</i>	マメ <i>LEGUMINOSAE</i> スマレ? <i>Viola</i> sp. シソ <i>Perilla frutescens</i> BRITTON ナス ヤエムグラ? <i>Galium</i> sp. ウリ オオムギ <i>Holdeum unlgae</i> L. var. <i>hexastichon</i> ASCHERS. コムギ <i>Triticum aestivum</i> L. イネ <i>Oryza sativa</i> L. ホタルイ クワ <i>Morus bombycis</i> KOIDS. ウメ <i>Prunus mume</i> SIEB. Et ZUCC. カキ <i>Diospyros kaki</i> THUNB. ガマズミ <i>Viburnum</i> sp.
Ⅲ期	SD12	ウマ 尺骨	
	SE1	ウマ 歯	
	SE10	小骨片	
	SK14	ウマ 歯	
	SX5	魚骨片	

表2 自然遺物

タイ類の骨は平安時代の数ヶ所<sup>注62</sup>の井戸でも確認しており決して珍しいものではなかったようである。その他の植物遺体は、平安京内の発掘調査で普通に確認される人里植物ばかりである。

## 6 小 結

**遺物の年代** 時期区分は、調査時の遺物包含層の区分に従ったため、土器型式分類による時期区分と一致しない部分もある。ここでは時期区分の目安として、各期に含まれている土器群の年代を検討する。

I 期は SD29 に代表される。SD29 は A・B・C に分かれ、SD29A の遺物は平城京の東三坊大路の側溝 SD650 に類似し、9 世紀末から 10 世紀初頭の年代を与えることができる。

SD29B・C の遺物の大半は SD29A と同様であるが、新しい要素を有する土師器 (82・114) や緑釉陶器 (102) などが出土している。このことから中層の成立年代は 10 世紀前半から中頃と推定することが可能である。SD29 が埋没した後に第 3 層が形成される。この層中にも SD29 の各層に含まれているものと同形式の遺物が多量に含まれている。しかしわずかに検出された須恵器 (挿図 18-476) や土師器 (挿図 18-468・471・472) などは寛治五年 (1091) 銘の墨書の鉢や、これに伴う土師器の皿より新しい形式であることから、この層の成立年代を 12 世紀代に求めることができる。I 期の年代は SD29 の年代を中心に、第 3 層成立までの期間で、ほぼ平安時代に相当する。上限については SD29 に含まれる 9 世紀の前半の遺物が指標になるが、この時期の遺構がまったくないことから、この遺跡では SD29 の年代を上限と考えても良いであろう。SD29 の土器群と第 3 層出土の遺物との時間的空白を埋める資料は検出されず、遺物の質量ともに大きな差異が認められる。

第 II 期は第 3 層を切り込む遺構 SD24 を上限に考えることができる。SD24 出土の土師器や陶器の甕は 12 世紀後半から末に属するものである。鉢、甕などの耐用年数の長いものと輸入陶磁器は、製作された年代より少し新しい 12 世紀末から 13 世紀初頭を埋没年代と考えることができる。SD25 は、SD24 に近似する土器群で、器種構成の点ではこの土器群の方が中世の様相を良く示している。SD28 の土器群は SD25 に後続する形式で、土師器の口径の小型化、灰褐色の色調を呈する杯の出現など、新しい要素が認められる。この土器群を第 II 期の後半として、13 世紀後半の年代を考えている。

第 III 期は SX2 を前半、SK14 を後半とし、II 期の SD28 と SX2 の間に SE1 の土器群を配したが、この中間的な形態の土器群も存在している。SE1 の遺物の年代を 14 世紀前半に比定し、SX2 を 14 世紀中頃、SK14 を 14 世紀後半～15 世紀初頭、挿図 21 に示した杯 487 を

15世紀とし、490・491は、<sup>注65</sup>二条城出土の遺物と山科本願寺出土の資料から、16世紀前半の年代を与えられる。この遺物はSX5上面の遺構から検出されたもので、この遺跡の終末期に属するものである。以上のことから、Ⅲ期は鎌倉時代の後半から室町時代の後半に推定でき、14世紀を中心とした年代を考えている。

**墨書土器** 墨書のある土器類には土師器、黒色土器、須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器などがある。線刻のものもここでまとめて取り扱うこととする。文字の読みとれるものは2点だけである。他の2点は破片から推定したものである。

「細工」 第3群に属する緑釉陶器の底部外面に墨書されている。SD29出土。(写真29)

「突」 土師器(541)の底部外面に墨書されている。(写真29)

「菅」(?) 灰釉陶器の底部外面に配されている。草冠と傍の一部を残す。(写真29)

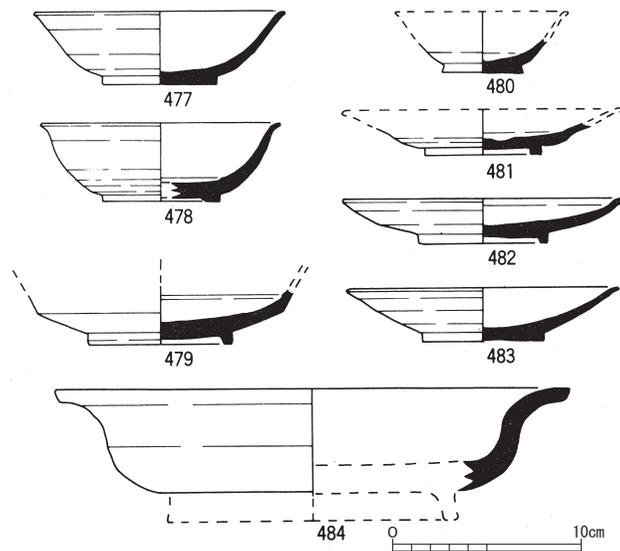
「北泉」 焼成前に線刻している。灰釉碗(72)底部外面に記されている。(写真23)

他の墨書は墨書の一部が落書きと考えられるものである。(写真29)

**特殊な土器類** 焼成から土師器(483・484)と須恵器(477～482)に分類できる。

須恵器はロクロ成形し、480は底部が糸切りのままで、124・152などと共に須恵器であるが、252の緑釉と同形で、ヘラミガキ手法も認められないなどの共通点があり、ここで扱った。外面と底部をヘラで削り、内面はヘラミガキを施し緑釉陶器と同様の手法が観察できる。胎土は灰色～淡青灰色を呈する。

土師器もロクロ成形し、483は内面をヘラミガキ、外面と底部をヘラケズリする。484は内面にヘラミガキの痕は認められず外面下半はヘラケズリする。輪高台か獣脚の付く器形である。胎土はいずれも淡黄灰色で、土師器の杯、皿より焼け締まっている。今回は出土していないが碗の器形もある。製作手法は緑釉陶器の第3群に類似する。



挿図 41 特殊な土器類 (1:4)

これらは、緑釉陶器に器形、

手法ともきわめて似ているが、施釉された痕跡はなく、この状態で京内へ運ばれたものである。須恵器については京都西南部の小塩窯跡、亀岡市の篠窯跡出土の遺物に類似している。

**須恵器のタタキメ** 須恵器の甕にはさまざまな文様のタタキ板と当て板の痕跡が残っている。タタキ板の文様には平行 (521～532) と格子 (533～536) がある。内面の当て板には細かい青海波 (521) や、青海波 (522・523・530～534) と木目のはっきりしないもの (524・526・535) がある。528 は甕の底部で内面はナデ調整するので当て板の痕は残っていない。536 も内面にナデ調整が観察できるが、当て板の痕は不明である。

青海波の当て板の中には木目を残すもの (532) と、木目は残っていないがひび割れによって木製であることを確認できるもの (533・534) がある。また 523 は青海波の中心に「メ」がある。当て板の痕で注目すべきものは、平行と青海波が重複するもの (525・

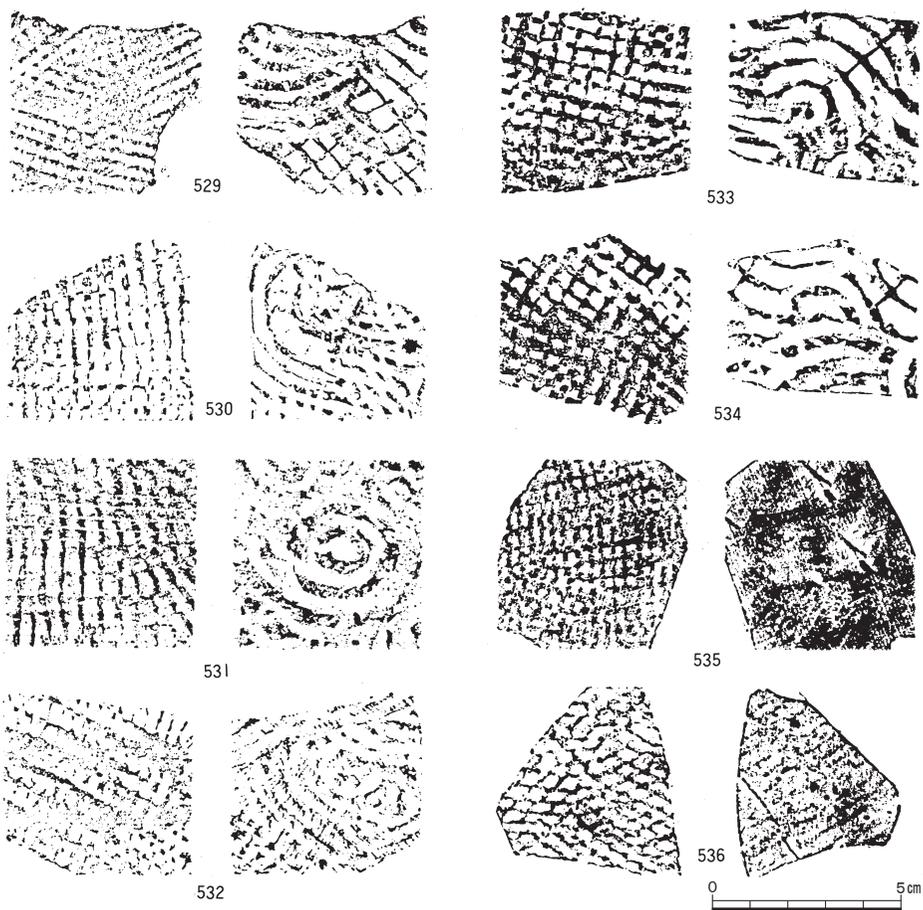


挿図 42 須恵器甕タタキメ (1:2)

527・529) がある。このような現象は甕 48 に認められ、部分によって当て板に差異がある例が確認できた。この例は平安京右京六条二坊でも発見されている。49 は青海波であるが上と下の文様が異なり、これも 48 と同様のものである。

タタキ板と当て板に木製と陶器のものがあるが、まったく木目のない 524 などは陶製の可能性もある。また格子、斜格子のタタキメを有する甕は SD29 にも認められるが、第 3 層、第 2 層から多く検出されている。甕の内部に、部分によって当て板の文様の異なる例が検出されたが、外面は内面ほど差異がなく識別が困難である。これが甕の分割成形と関連するか否かは課題として残った。タタキメが格子、斜格子状を呈するものは SD29 (534・535・536) からも出土し、第 3 層から出土している 533 と共に新しい要素と考えられ、I 期の終末頃から灰褐色の軟らかい胎土の甕類などと共に増加する傾向がある。

**土器の法量** 第 II 期と第 III 期の代表的な遺構を取り上げ、土師器の器高と口径の変化



挿図 42-2 須恵器甕タタキメ (1:2)

を観察した。計測に使用した個体数は SD28 が 90 個体、SD25 が 454 個体、SE1 が 535 個体、SK14 が 152 個体である。表は縦軸を横軸の 2 倍の間隔で作図したため、器高の差が強調されてみえるが、実際には器高の差より口径の差幅の方が大きい。SD28 の皿 A は 12 ～ 13cm の口径が最も多く、SD25 に比べ皿 A の小型化は明確になっている。小皿 A は SD25 も SD28 も大きな差異はないが、SE1 では 8cm 前後のものが中心となる。SE1 では皿 A も 12cm を中心に分布し、SD28 より小型化する傾向がある。この SE1 の土器群では杯 A、小杯 A と皿 A、小皿 A の比率が等しくなる。この杯 A は口径 11 ～ 13cm、器高 2.5 ～ 3.5cm の範囲に集中し、小杯 A は口径 6.5 ～ 7.5cm、器高 1.5 ～ 2cm の範囲に集中する。SK14 では皿 A、小皿 A の数量が減少し、杯 A、小杯 A に対する比率は 49:103 となり、杯 A、小杯 A は SE1 と大きな差異はないが、杯 A に器高、口径とも大型のものが認められる。

皿 A の口径に変化が認められる SD25 と SD28 の間には土器の製作手法にも大きな差異があり、SD25 ではほとんどみられない体部外面下半のオサエ手法による凹凸が顕著になり、皿 A 類の形、手法の変遷過程の一区切りと考えることができる。また SE1 で増加している杯 A 類は瓦器椀 B が減少する器種変換の時期に当たり、法量の類似する器形であるため、これとの関連を考慮する必要がある。

**遺物の数量** 検出した遺物の量を表す目安として、検出した遺物の破片をすべて数えた。遺物の総量は 318,950 点で、その内訳は土師器 219,213 点、黒色土器 3,330、瓦器 11,517、須恵器・陶器 I 類 25,097、陶器 II 類 15,447、緑釉陶器 3,075、灰釉陶器 3,615、施釉陶器 I 類 105、施釉陶器 II 類 612、輸入陶磁器 5,336、瓦類 29,137、その他 2,466 である。

この中で I 期に属するものは土師器 21,711、黒色土器 3,330、須恵器 18,281、緑釉陶器 3,075、灰釉陶器 3,615、輸入陶磁器 189、瓦 1,481 である。各遺構の出土遺物の破片数を表にした（表 4）。計測することによる初歩的なデータとして、各遺構の遺物の器種・器形破片数を示したものである。

SD29 は I 期の遺構で数値が異なるが、他は II ～ III 期の遺構である。SD29 を除けば陶器 I 類の比率は一定の範囲に収まる。この時期の陶器 I 類は大半が鉢形の器形である。これと関連して、食器類に対する調理具類（鍋、釜、鉢など）の比率にも一定の傾向がある。

#### 土器・陶器類の問題点

土師器の煮沸形態には甕と羽釜があり、これらは SD29 の時期に共存している。しかし器形や厚い器壁、砂の多い粗い胎土など、羽釜 B と甕 D、竈は共通の特徴を有するが、これは甕 A などとはまったく異なるものである。この道具は産地によるものかも知れないが、

使用法の差異とも考えられる。

使用方法によるものと仮定すると、羽釜 B、甕 D は胎土や手法の類似から可動式の竈との組み合わせが考えられる。これは羽釜 B、甕 D、竈の消滅がほぼ同時であることも照合する。

この消滅の時期については脚付きの羽釜の出現と密接に関連し、平安後期に求めることができる。京都では中世に入ると煮沸形態が鍋、羽釜に分化し、瓦器の代表的な器形となる。羽釜 A は中世の羽釜に至る過渡期的な形態と考えられるが、地域によっては羽釜 A が室町時代にも存在し、地域差が明確に認められる。また器種が土師器から瓦器を主流としたものに変化するため、羽釜 A から中世の羽釜への移行は一元的に規定することはできない。

小型の器形で、杯は I 期に所属するものと III 期に所属するものが類似する。しかし III 期の杯は表面の凸凹が少なく、I 期に比べて完成度の高いオサエ手法で、むしろ同時期の瓦器碗の器表外面処理に似ている。瓦器碗の古式のものは、器表外面の指頭痕跡はヘラミガキ調整した後にも残るが、12 世紀頃から指頭による外面の凹凸は少なくなり、ヘラミガキ手法が退化する。13 世紀には、内面のヘラミガキを除けば杯と良く似た手法となっている。10 世紀以来途絶していた杯が出現するのは、土師器皿の変化したものとするより、瓦

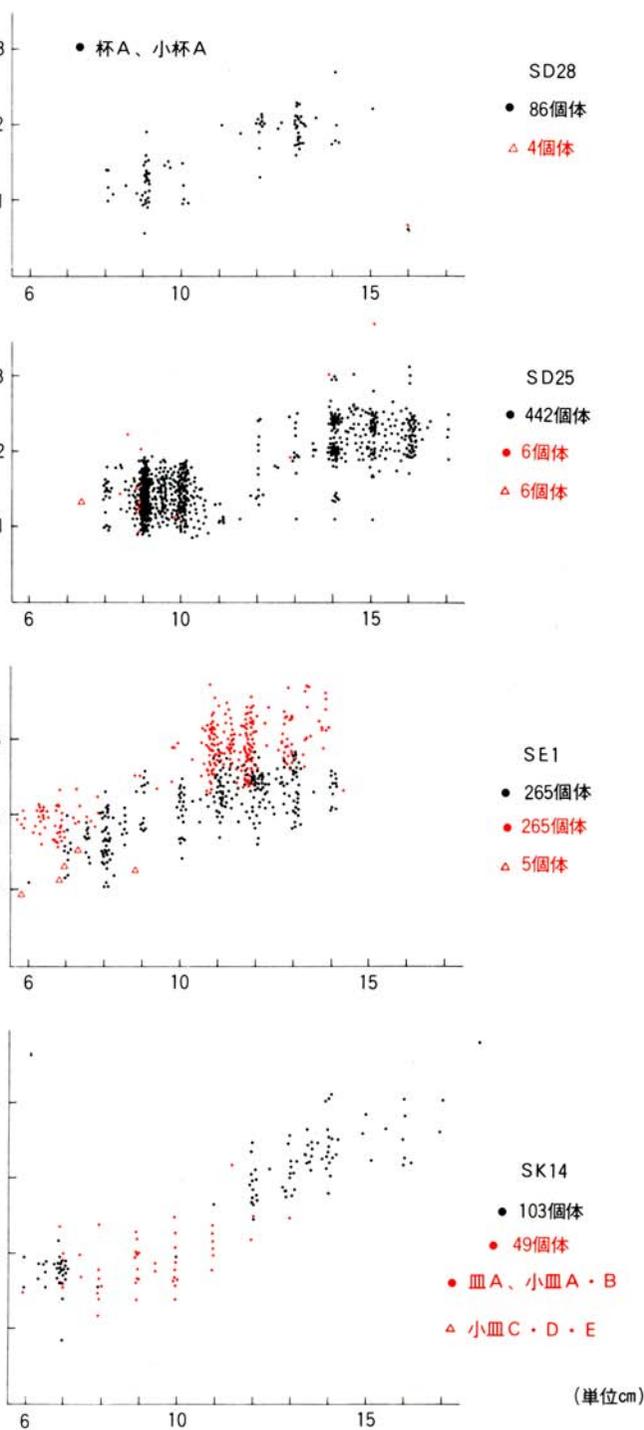


表 3 土器の法量

器椀の減少する時期がその出現期であり、手法、法量も類似することなどから、瓦器の系譜に連なるものと考えて良いのではないだろうか。

瓦器は13世紀末から14世紀前半にかけて、椀の消滅、壺、鍋、釜などの小型器形の出現、大型の器形では鍋、釜に鉢類が加わる。中世の前半では椀、皿、鍋、釜を中心とした器形であったが、中世の後半には鍋、釜、鉢を中心とした器形の構成となる。特に鉢類は機能は単一ではないが、鉢Aを除く他の鉢類では手法、形態の画一化が認められ、これが「座」などの生産組織とどのように結びつくかは今後の課題である。

須恵器は小型の器形が減少する傾向にある。宝珠つまみの付かない蓋や、29のような形の杯Bは須恵器の小型の器形としては後出のものである。墨痕や研磨痕のある蓋が15点検出されている。杯蓋は97点検出された中で、つまみの付けられていない蓋が20点あり、硯に転用された蓋の多いことと考え合わせると、宝玉つまみの有無は機能上問題にならなかったものと推定できる。鉢類はA、Bのように古い様相を呈するものがある。鉢Cと第3層出土の鉢との関係は明らかにできなかった。須恵器の甕は52・53・54のような古い要素を有するものと、48・49・51のような一群がある。これが新しい要素なのか地域差なのかは明らかでないが、後者は中世の須恵器（陶器Ⅰ類）に形の類似を求めることができる。須恵器の甕には当て板の文様が上半部と下半部で異なる例（図10-48・54）がある。これから分割成形が行われていた可能性を推定できる。

施釉陶器は、SD29とその周辺から1,500点が出土している。緑釉陶器と灰釉陶器の比率を共膳形態で比較すると、緑釉978点に対し、灰釉555点であるが、遺跡全体で壺、鉢などを含めた総量では3,075:3,615であり、5:6で灰釉陶器の方が上回る。

緑釉陶器を5群に分類したが、これを特色の少ない口縁部を除き、底部で数量を数えた。これによると京都周辺産544片、東海地方産32片、滋賀県産10片、不明（耳皿、香炉など特殊な器形）41片となる。これは10世紀前半～中頃の様相を示すものであるが、東海地方産と考えられるものが京都周辺産の10分の1にも満たない。ここで東海地方産としたものはさらに細分が可能であり、他地域で生産されたものを含んでいる可能性がある。

平安京は消費地であるため、各地の製品が流入している。Ⅱ期以降の陶器は産地の問題が重要であるが、今回は時間的な理由から産地の同定に十分な検討をしていない。生産地と京内出土の遺物の比較検討は今後の大きな課題である。

**輸入陶磁器** 輸入陶磁器の中で特に注目されるものは、SD29（Ⅰ期）から出土した絞胎陶の陶枕と長沙銅官窯の黄釉褐彩陶の水注である。両者とも出土例が少なく、きわめて

貴重な資料である。現在までに平安京跡で確認された銅官窯の製品は4例、絞胎陶は3例である。SD29からは他にも越州窯系の青磁、中国南方産の白磁などがかなり出土している。

平安京跡の9世紀後半から10世紀の遺構、あるいは遺物包含層から輸入陶磁器が発見される例は多く、平安京跡の一般的傾向となっている。また絞胎陶の陶枕、長沙銅官窯の製品のように、特殊でしかも類例の少ない陶磁器が含まれている例も増加しており、都としての平安京跡の特徴を如実に示している。

SD24(Ⅱ期)から出土した輸入陶磁器は、12世紀末の一括資料である。総個体数では42個体を数え、龍泉窯系の碗・皿類が13個体、同安窯系の碗・皿類が14個体を数える。その他に堆線文で蓮弁を表した青磁碗が3個体あり、越州窯系青磁の水注1個体も出土している。青磁の碗・皿類はほとんどが片切り彫り、櫛描き、堆線で文様が描かれており、無文のものは少なく3個体のみである。白磁では中国南方産の碗・皿類6個体、壺2個体があり、加えて黄釉盤が2個体ある。出土輸入陶磁器の個体数での比率は、青磁が78%を占め、青磁の量が圧倒的である。

SD24から出土した輸入陶磁器の総量は一遺構内から出土した例としては多い。12世紀後半から13世紀にかけて、中世京都の各遺跡から出土する輸入陶磁器の量は、各地方の出土量と比較すると群を抜いている。SD24の輸入陶磁器はそれを反映しているものとみて良い。

Ⅲ期の遺構、遺物包含層からも、類例の少ない輸入陶磁器が発見されている。朝鮮の鉄絵青磁や吉州窯系の鉄絵文の陶磁器がそれである。また、第一面から出土した青磁の馬上杯も出土例が少ないものである。その他に朝鮮の象嵌青磁が2片出土している。

多くの青磁、白磁に混じって、このような類例の少ない陶磁器が出土することは、各時代を通じていえることであり、政治、経済、文化の中心である京都を知る資料的価値の高いものであることを示している。

## 第4章 総括

### 1 遺跡の変遷

検出した遺構を遺物包含層によって3期に大別した。遺物包含層は大きく3層とし、4面の遺構面を検出した。この報告書で用いている遺構面という語は、単に調査の都合上設定した面を示しているにすぎず、生活面を意味するものではない。

第Ⅰ期は、図面2の模式図中のⅡ～Ⅷからなる第3層と、これを排除した段階の第4面を切り込む遺構(SD29ほか)がある。第4面は無遺物の礫層が全面に広がり、Ⅰ・Ⅸ層はこの一部である。第3層は複数の層があり、この堆積は新しい方からⅤ→Ⅳ→Ⅲ→Ⅶ→Ⅵ→Ⅱの順となり、ⅧはⅦより古くⅨより新しい。Ⅳ、Ⅴ、Ⅵ、Ⅶの層には挿図18(468～476)に示した遺物が含まれている。

第Ⅱ期は、第3層上面から切り込む遺構から成り立つ。これを第3面(図面2)とした。

第Ⅲ期は、第2層の上面(図面3)から切り込む遺構から成り立つ。第2層の上面では土層が6層で、同一平面に分布している。これらの層(図面3の模式図)は、Ⅵが図面2の模式図のⅨ層と同じものである。第2層を形成する各層の堆積の順は、新しい方からⅡ→Ⅳ→Ⅲ→Ⅴ→Ⅵとなり、ⅠはⅡ・Ⅲより古い。

第Ⅲ期の後半は、第1層の上面(図面4)を切り込む遺構から成立している。第1層は3層(図面4の模式図)からなり、堆積の順は新しい方からⅢ→Ⅱ→Ⅰとなる。Ⅰの層は第2層のⅠと同一の層と考えている。

**土層模式図について** 京内の遺跡は土層堆積がきわめて複雑である。これらの層は成立の過程にも埋没の過程にも複雑な要因がある。これを多少でも理解するため、小範囲に分布する層の水平分布を記録し、断面観察によって時間的前後関係を決定した。分布の状態は図面2・3・4の模式図に示した。この図は、図示した層の範囲の中にさらに小さく分布する層があり、それらを大まかにまとめたものである。

現場では100分の1の平面図に土層分布を記入し、掘り下げ時に6m区画の地区を四分して断面の観察を行った。この結果膨大な量の断面図が得られた。これらの資料は、発掘作業の精度や現場での点検が充分でなければ真価を発揮しないものである。今回の調査では、多量の資料の処理や点検作業などに不備があり、期待した成果が得られず、土層の水平分布を図示するに留まり、今後に大きな課題を残した。

**I 期** 井戸と土壙、溝が検出された。これらの遺構は、本来の遺構成立面が無遺物の礫層まで削平された状態で検出されたものである。溝は平安京の条坊とは方向が異なり、池などの排水路か、洪水などによって形成された自然の流路であろう。溝は9世紀末から10世紀に埋没が始まり、12世紀までには完全に機能を停止した。この溝の上面には、溝の窪地を埋め立てた整地層（第3層）が堆積する。この層には9～10世紀の遺物を多量に含むが、わずかながら整地された年代の遺物（挿図18）が検出され、整地の年代を12世紀に比定した。

**II 期** 井戸、溝、土壙、柱穴などが検出されているが、代表的遺構は溝（SD24）である。これは溝としては短く、土壙としては異様に長い形態であり、遺構内に投棄された多量の輸入陶磁器などの出土状況も特異である。この他に井戸があり、付近に建物が存在したはずであるが、検出した柱穴の並びからは、建物と確認できる遺構は検出されなかった。

**III 期** 第2面（図面3）は13世紀～14世紀、第1面（図面4）は14世紀～15世紀に相当し、SX1のように第1面の上面で検出された遺構や、第1層を切り込む遺構の中には、15世紀～16世紀に属する遺物を出土するもの（挿図21）がある。

この時期は遺構数、遺物量共に多く、この遺跡の最盛期である。柱穴は多数検出されたが、中世の民家の実態が良く判っていない現在、鋭意検討中である。柱穴は大きく二群に分かれ、調査区の北部と東部に集中することから、特定の場所で何度も建て替えられたことが指摘できる。また工房ができる前には、鉢などを棺とした墓が造られ、II期を通じて建物が建てられなかった場所が存在した可能性もある。今回の調査で金属加工に関するIII期後半の遺構が検出された。上部は破壊されてまったく不明であるが、残された部分の構造や破壊されて周辺に散らばった坩堝、炉壁、鋳型の破片の存在を考え合せると、工房跡と推測できる。中世の京都を性格づけるものの一つに手工業が挙げられ、この遺跡はそのような職人の居住していた七条町に含まれ、今回発見された資料はその一端を示すものである。

特殊な遺構としては、礫を敷き詰めたSX5がある。この遺構は備前焼の甕が据えられた土壙の上に成立し、礫層中にIII期の初めの土師器や、吉州窯の磁器、鉄絵盤の破片を含み、III期の中では遅く成立したものである。この遺構は16世紀の土壙に切られているので、下限は明確である。遺構の性格については確証を得ていないが、柵例（SA1）との関連からこれを地業の一種と推定している。

## 2 遺物について

SD29から発見された石鍔帯は、これまで完成品しか京内では発見例が報告されてい

いが、今回の調査で多数の未成品を検出した。未成品には加工工程の各段階のものがあり、京内で石銚帯の加工が行われていたことを示す貴重な資料である。

また土製品の中で、陶製坐像と土馬は平安時代の土製品としてはやや異質なものであり、今後検討を進める必要がある。土製品には祭祀用品としての性格を有するものがあり、土馬、小型の竈などがこれに相当するが、Ⅱ、Ⅲ期にみられる調理具を小型化したものも、同様の性格が想定できる。今回発見された土製品の中で、Ⅲ期の金属加工に関する遺物は注目できる。炉壁、轆の羽口など生産施設に関連する遺物と鋳型の破片があり、鋳型の破片から判断すると、壺、釘、飾り金具などを生産し、金の付着した埴塙はこれらに鍍金していた可能性を示すものである。

### 3 遺跡の保存状況

平安京左京八条三坊に相当する地域の、現在の建築物による埋蔵文化財の破壊実態を調査した。これは、昔から削平、整地、盛土などで遺跡を破壊しながら生活が営まれてきたが、明治以降は建物が大きく深い基礎を必要とするものが増加し、昭和30年(1955)代から始まる都市開発はこの傾向を一層明確にした。

調査には都市計画局発行の2,500分の1の地図を用い、地図は写真から製作されるので現状と異なる場合があるため、現地を歩いて確認した。地下の破壊状況を把握するため、木造建物、駐車場、空地、グラウンドを一群にし、高層ビル、ガソリンスタンド、プールなどを一群にした。この結果を図面1に示した。

調査終了地点と開発により地下の遺構が破壊された地域は全体の60%に達し、これに上下水道、ガス、電気、電話などの工事による破壊の著しい道路部分を加えると、約80%が破壊されていることになる。しかし道路部分の工事による破壊は通例では面積の半分くらいの場合が多く、これを割り引くと実際には70%あまりの地域が完全に破壊されていることになる。したがって残された20~30%の地域の調査は慎重に進められなければならない。30%という数字は推定できる最大値で、現実には江戸時代の攪乱(現在みえなくなっている破壊の跡)がこの遺跡で約5%に達した。これを差し引いて考える必要がある。

左京八条三坊は、これまでに烏丸線遺跡調査会(地点1)、京都市埋蔵文化財研究所(地点2~9)、平安博物館(地点10)などによって調査され、発掘面積の合計は約6,500㎡で、立会調査の面積は30,000㎡(地下街“ポルタ”の範囲を含む)を超える。

今回の調査で、対象地に国鉄京都駅を含むとはいえ、埋蔵文化財が70%あまりが完全に破壊されており、それに対し発掘調査は約7%が終了したにすぎず、立会調査を含めて

も 20%に満たないという事実は驚くべきことである。この調査区は市内で開発の進んだ地区の一典型であり、住宅街の地域と比較すると、その差異は明瞭である。今後、この種の資料は京都市全域について作成する必要がある、しかも定期的に調査し、分析することによって、今後の埋蔵文化財の調査計画、保護計画に大いに役立つものと思われる。

#### 4 まとめ

調査地は平安京左京八条三坊七町に相当し、中世の京都では七条町の西南の外れに位置する。溝、土壙、井戸などの遺構や 318,950 点に及ぶ土器、陶器を始めとする各種の遺物は、平安時代から室町時代に所属している。

平安時代には南北に溝が走るが、これは平安京の条坊とは異なるものである。この溝に埋没していた遺物から、この溝の上流か両岸に、輸入陶磁器や多量の緑釉陶器を保有した人々の邸宅の存在が推定できる。

白河、鳥羽に宮殿が造営される一方で、京内には空地が増加した。この空地には商工業に従事する者が住み始め、今回の調査地に隣接する八条院町や今回の調査地は、このようにして形成されたものである。八条院町は建武元年(1334)に後宇多天皇によって東寺へ施入された。八条院町に関する記録は東寺百合文書にみられる。その中の八条院地子帳には、金屋、薄屋、番匠などの職人の存在を示す記事があり、これが遺跡の第Ⅲ期に相当する時期のものである。このような記録と今回検出された金属加工跡は、職人層の居住範囲が、商工業の中心地を離れた広い範囲に分布していたことを示すものである。

金属の加工に関連する事柄で、銭貨の銭型が発見されたことは、京内で生産が行われていた可能性を示すものである。商工業の発展に伴い銭貨の流通が増大している。『京都の歴史 2』によると、売買の決済を銭貨で行ったことを示す資料が、鎌倉時代初期では 39.7%であったが、後期には 84.2%に増大している。銭貨の鋳型は、需要の増大した社会的な背景に対応したものと考えることができる。

この遺跡は遺構、遺物共に 14 世紀代を中心としている。中心地を離れるとはいえ、中世京都の先駆的な形態を示している。その後、空地か耕作地となり、明治時代の東塩小路村に至っている。

器種	機能	器形	破片数	%	破片数	%	破片数	%	
SD29 (Ⅰ期)	土師器	食器	皿・杯・碗	5,782	27.77	6,014	28.89	9,191	44.15
			高杯	232	1.11				
		調理具	鍋・釜	42	0.20				
		貯蔵具	壺	33	0.16				
			甕	2,825	13.57				
			盤	210	1.01				
黒色土器	土師器	食器	皿・杯・碗	1,001	4.81	1,348	6.47	1,348	6.47
		調理具	鉢	1	0.01				
		貯蔵具	壺	31	0.15				
			甕	301	1.45				
		その他	盤	1	0.01				
			甕	13	0.06				
須恵器	土師器	食器	皿・杯・碗	640	3.07	7,411	225	8,439	40.53
		調理器	鉢	225	1.08				
		貯蔵具	壺	2,959	14.21				
			甕	4,452	21.38				
		その他	蓋	72	0.35				
			瓶	24	0.12				
			平瓶	55	0.26				
			盤	8	0.04				
			盤	4	0.02				
			蓋	4	0.02				
灰釉陶器	土師器	食器	皿・杯・碗	557	2.67	820	3.94	820	3.94
		貯蔵具	壺	230	1.10				
		瓶	6	0.03					
		その他	平瓶	21	0.10				
緑釉陶器	土師器	食器	皿・碗	978	4.70	1,003	4.83	1,003	4.83
		貯蔵具	壺	20	0.10				
		その他	蓋	5	0.02				
		青磁	皿・碗	13	0.06				
		白磁	皿・碗	3	0.01				
		その他	碗	1	0.01				
輸入陶磁器	食器	青磁 皿・碗	13	0.06	17	0.08	19	0.09	
その他	白磁 皿・碗	3	0.01	0	0.00	0	0.00		
その他	鉄絵 壺	2	0.01	2	0.01	2	0.01		
合計					20,820	100.00			

器種	機能	器形	破片数	%	破片数	%	破片数	%					
SD24 (Ⅱ期)	土師器	食器	皿	260	37.09	261	37.23	264	37.67				
			高杯	1	0.14								
		その他	鉢	3	0.43								
瓦部	土師器	食器	皿・碗	2	0.29	10	1.43	20	2.85				
		調理具	鍋・釜	9	1.28								
		その他	鉢	8	1.14								
陶Ⅰ	土師器	調理具	鉢	37	5.28	124	17.69	124	17.69				
		貯蔵具	甕	72	10.27								
		その他	壺	15	2.14								
		その他	蓋	16	2.28								
陶Ⅱ	土師器	貯蔵具	甕	24	3.42	43	6.13	43	6.13				
		その他	鉢	3	0.43								
施Ⅱ	土師器	調理具	卸皿	1	0.14	1	0.14	1	0.14				
		輸入陶磁器	食器	青磁 皿・碗	179					25.54			
				白磁 皿・碗	12					1.71			
				青磁 水注	37					5.28			
		その他	白磁 壺	8	1.14					58	8.27	249	35.52
			白磁 壺	8	1.14								
鉄絵 盤	5		0.71										
合計					701	100.00							

器種	機能	器形	破片数	%	破片数	%	破片数	%		
SD25 (Ⅰ期)	土師器	食器	皿	2,789	95.91	2,810	96.63	2,816	96.83	
		貯蔵具	甕	1	0.03					
		その他	鉢	5	0.17					
		食器	碗	5	0.17					
瓦器	土師器	調理具	鍋・釜	11	0.38	43	1.48	48	1.65	
		調理具	鉢	32	1.10					
陶Ⅰ	土師器	調理具	鉢	2	0.07	6	0.21	6	0.21	
		貯蔵具	甕	4	0.14					
陶Ⅱ	土師器	貯蔵具	甕	15	0.52	15	0.52	15	0.52	
		輸入陶磁器	食器	青磁 碗	9					0.31
				白磁 壺	11					0.36
				白磁 壺	1					0.03
その他	鉄絵 盤	2	0.07	3	0.10	23	0.79			
合計					2,908	100.00				

器種	機能	器形	破片数	%	破片数	%	破片数	%					
SE11 (Ⅱ期)	土師器	食器	皿・碗	718	87.24	718	87.24	724	87.97				
		貯蔵具	塩壺	1	0.12								
			壺	2	0.24								
		その他	鉢	3	0.36								
		食器	皿・碗	5	0.61								
		調理具	鍋・釜	9	1.09								
瓦器	土師器	その他	鉢	1	0.12	15	1.82	15	1.82				
		調理具	鉢	21	2.55								
陶Ⅰ	土師器	貯蔵具	甕	7	0.85	33	4.01	33	4.01				
		その他	甕	5	0.61								
陶Ⅱ	土師器	貯蔵具	甕	27	3.28	27	3.28	27	1.28				
		輸入陶磁器	食器	青磁 皿・碗	11					1.34			
				白磁 碗	10					1.22			
				青磁 水注	1					0.12			
		その他	鉄絵 盤	2	0.24					3	0.36	823	100.00
		合計											

器種	機能	器形	破片数	%	破片数	%	破片数	%		
SD12 (Ⅲ期)	土師器	食器	皿	2,272	65.76	2,276	65.88	2,320	67.14	
			高杯	4	0.12					
		調理具	鉢	9	0.26					
		貯蔵具	塩壺	11	0.32					
			甕	12	0.35					
		その他	鉢	12	0.35					
瓦部	土師器	食器	皿・碗	26	0.75	61	1.77	230	6.66	
		調理具	鍋・釜	59	1.71					
		その他	鉢	2	0.06					
		その他	鉢	143	4.14					
陶Ⅰ	土師器	調理具	鉢	125	3.62	125	3.62	208	6.02	
		貯蔵具	甕	77	2.23					
		その他	鉢	6	0.17					
		調理具	播鉢	20	0.58					
陶Ⅱ	土師器	貯蔵具	甕	570	16.50	575	16.64	595	17.22	
		その他	鉢	5	0.14					
施Ⅰ	土師器	食器	皿・碗	4	0.12	14	0.41	14	0.41	
		調理具	おろし皿	1	0.03					
		貯蔵具	壺	9	0.26					
施Ⅱ	土師器	食器	皿・碗	4	0.12	9	0.26	9	0.26	
		その他	鉢	2	0.06					
			壺	3	0.09					
		輸入陶磁器	食器	青磁 皿・碗	33					0.96
				白磁 皿・碗	19					0.55
				その他 碗	4					0.12
その他	青磁 壺	3	0.09	23	0.67	79	2.29			
	白磁 壺	10	0.29							
その他	鉄絵 鉢	1	0.03	9	0.26	3,455	100.00			
合計										

器種	機能	器形	破片数	%	破片数	%	破片数	%	
SE1 (Ⅲ期)	土師器	食器	皿	4,325	91.17	4,325	91.17	4,330	91.28
		貯蔵具	塩壺	2	0.04				
		その他	鉢	3	0.06				
瓦器	土師器	食器	碗	3	0.06	120	2.53	128	2.70
		調理具	鍋・釜	120	2.53				
		その他	鉢	5	0.11				
陶Ⅰ	土師器	調理具	鉢	50	1.05	83	1.75	83	1.75
		貯蔵具	甕	30	0.63				
		その他	鉢	3	0.06				
		食器	碗	1	0.02				
陶Ⅱ	土師器	調理具	播鉢	3	0.06	3	0.06	158	3.33
		貯蔵具	甕	154	3.25				
		食器	碗	1	0.02				
施Ⅰ	土師器	食器	碗	1	0.02	2	0.04	2	0.04
		その他	鉢	1	0.02				
施Ⅱ	土師器	食器	碗	1	0.02	3	0.06	4	0.08
		その他	鉢	1	0.02				
			小壺	2	0.04				
輸入陶磁器	土師器	食器	青磁 皿・碗	20	0.42	26	0.55	39	0.82
			白磁 皿・碗	6	0.13				
		青磁 鉢	1	0.02					
		白磁 壺	4	0.08					
		青磁 香炉	1	0.02					
		白磁 壺	2	0.04					
		三彩 盤	1	0.02					
		鉄絵 盤	4	0.08					
合計							4,744	100.00	

表4 遺物の数量

器種	機能	器形	破片数	%	破片数	%	破片数	%	
SE10 (Ⅲ期)	土師器	食器	皿	883	87.00	883	87	884	87.09
		その他	盤	1	0.10	1	0.1		
瓦器	食器	皿・椀	12	1.18	12	1.18	33	3.25	
	調理具	鉢	21	2.07	21	2.07			
陶Ⅰ	調理具	鉢	31	3.05	31	3.05	44	4.34	
	貯蔵具	甕	10	0.99	10	0.99			
	その他		3	0.30	3	0.3			
陶Ⅱ	貯蔵具	甕	46	4.53	46	4.53	46	4.53	
輸入 陶磁器	食器	青磁 皿・椀	4	0.40	7	0.69	8	0.79	
		白磁 椀	3	0.30					
	その他	三彩 盤	1	0.10	1	0.1			
合計							1015	100	

器種	機能	器形	破片数	%	破片数	%	破片数	%	
SK14 (Ⅲ期)	土師器	食器	皿	1,415	95.29	1,415	95.29	1,415	95.29
		食器	皿・椀	6	0.40	6	0.4	29	1.95
瓦器	調理具	鍋・釜	6	0.40	6	0.4			
	その他		17	1.14	17	1.14			
陶Ⅰ	調理具	鉢	12	0.81	12	0.81	12	0.81	
陶Ⅱ	貯蔵具	甕	21	1.41	21	1.41	21	1.41	
施Ⅰ	食器	椀	1	0.07	1	0.07	2	0.14	
		壺	1	0.07	1	0.07			
輸入 陶磁器	食器	青磁 皿・椀	2	0.14	5	0.34	6	0.4	
		白磁 椀	3	0.20					
	その他		1	0.07	1	0.07			
合計							1485	100	

器種	機能	器形	破片数	%	破片数	%	破片数	%	
SK16 (Ⅲ期)	土師器	食器	皿	1,163	86.79	1,163	86.79	1,166	87.01
		その他		3	0.22	3	0.22		
瓦器	食器	皿・椀	20	1.49	3	1.49	60	4.48	
	調理具	鍋・釜	13	0.37	15	1.12			
陶Ⅰ	調理具	鉢	2	0.15			24	1.79	
	その他		25	1.87	25	1.87			
陶Ⅱ	調理具	鉢	14	1.04	14	1.14	58	4.33	
	貯蔵具	甕	8	0.60	8	0.6			
施Ⅰ	調理具	掃鉢	2	0.15	2	0.15	9	0.67	
	その他		8	0.60	8	0.6			
輸入 陶磁器	食器	青磁 皿・椀	49	3.66	49	3.66	23	1.72	
		白磁 皿・椀	4	0.30	4	0.3			
	その他	おろし皿	1	0.07	2	0.15			
合計							1,340	100	

器種	機能	器形	破片数	%	破片数	%	破片数	%	
SK5 (Ⅲ期)	土師器	食器	皿・杯	6,855	77.88	6,859	77.93	6,891	78.29
		高杯	4	0.05					
瓦器	調理具	鍋・釜	6	0.07	6	0.07	726	8.26	
	貯蔵具	塩壺	3	0.03	3	0.03			
陶Ⅰ	調理具	掃鉢	29	0.26	23	0.26	133	1.51	
	その他		648	7.36	648	7.36			
陶Ⅱ	調理具	鉢	79	0.90	79	0.9	810	9.2	
	貯蔵具	甕	110	1.25	110	1.25			
施Ⅰ	調理具	掃鉢	23	0.26	23	0.26	6	0.07	
	その他		7	0.08	7	0.08			
施Ⅱ	食器	椀	795	9.03	795	9.03	71	0.81	
		皿・椀	8	0.09	8	0.09			
	調理具	片口鍋	6	0.07	6	0.07			
輸入 陶磁器	食器	おろし皿	20	0.23	20	0.23	164	1.86	
		鉢	6	0.07	7	0.08			
	貯蔵具	壺	11	0.12	11	0.12			
	鉢	21	0.24	33	0.38				
	その他		12	0.14					
	青磁 皿・椀	71	0.81	114	1.3				
白磁 皿・椀	40	0.46							
褐釉 皿・椀	3	0.03							
青磁 壺	1	0.01							
白磁 壺	7	0.08	50	0.57					
褐釉 壺	13	0.15							
合計							8,802	100	

I 期	食器	9,207	44.22
	調理具	268	1.29
	貯蔵具	10,851	52.12
	その他	494	2.37
	合計	20,820	100

SD29

II 期	食器	2,835	97.49
	調理具	45	1.55
	貯蔵具	20	0.69
	その他	8	0.27
	合計	2,908	100

SD25

食器	454	64.76
調理具	48	6.85
貯蔵具	112	15.98
その他	87	12.41
合計	701	100

SD24

食器	744	90.39
調理具	30	3.65
貯蔵具	37	4.50
その他	12	1.46
合計	823	100

SE11

III 期	食器	2,366	68.48
	調理具	216	6.25
	貯蔵具	684	19.80
	その他	189	5.47
	合計	3,455	100

SD12

食器	4,367	91.84
調理具	173	3.65
貯蔵具	186	3.92
その他	28	0.59
合計	4,744	100

SE 1

食器	902	88.87
調理具	52	5.12
貯蔵具	56	5.52
その他	5	0.49
合計	1,015	100

SE10

食器	1,203	89.78
調理具	39	2.91
貯蔵具	57	4.25
その他	41	3.06
合計	1,340	100

SK16

食器	1,427	96.10
調理具	18	1.21
貯蔵具	21	1.41
その他	19	1.28
合計	1,485	100

SK14

食器	6,999	79.52
調理具	778	8.84
貯蔵具	809	9.19
その他	216	2.45
合計	8,802	100

SX 5

注

## 第2章 1

- 注 1 都合上整地と記したが、人為的に土を入れ均したのか、自然に堆積した土が整地したようにみえるのか、識別できていない。
- 注 2 図面 2 に第 3・4 面の平面実測図を統合した都合上、第 4 面の土層分布模式図は省略した。
- 注 3 第 4 面から約 2m の深さまで掘り下げた。

## 第2章 2

- 注 4 形状から溝としたが、細長い土壌とも考えられる。
- 注 5 挿図 8、SE1 断面図の 5～8 が上層、9 が下層に相当する。同図中の 1 と 4 は基本的に同じ層であるが、4 は鉄分の滲み出し部分が堀形との境界部を環状に取り巻く形でみられるため、別層扱いで図示した。また SE1 は第 1 面で検出したため図面 4 で図示したが、遺物の検討を行った結果、第 2 面の時期にあてはまることから、文章中は第 2 面の遺構で扱っている。
- 注 6 切り合い関係を SK12 → 11 → 13 と捉えたが、同一遺構の可能性はある。また包含する遺物の時期差は認められない。
- 注 7 『平安京跡発掘調査報告 - 左京四条一坊 -』1975 年 平安京調査会。同様の遺構が SK12 として報告されている。
- 注 8 挿図 10、SK10 の平面図は、土壌内の堆積土を取り除いた状況である。断面図 1 層上面の瓦分布状況は写真 9-3 に示した。
- 注 9 挿図 10、SK75 平面図は断面図 1 層を取り除いた状況である。したがって 1 層内に混入していた甕の肩部以上の破片分布状況は省略した。
- 注 10 分析を行ったが、人骨という結果は得ていない。
- 注 11 挿図 10、SK132 平面図の甕片分布状況は断面図 1 層を取り除いた状況である。
- 注 12 挿図 10、SK304 平面図は土壌内の堆積土をすべて取り除いた状況である。
- 注 13 SK146 の骨片も SK75 同様に人骨という結果は得ていない。
- 注 14 類似した遺構は、同志社大学校地学術調査委員会が実施した『常盤井殿町遺跡発掘調査概要』1978 年、『同志社中学校体育館建設予定地発掘調査概要』1977 年などに、地下式石積み貯蔵庫としてあげられている。また当研究所が行った『常盤東ノ町発掘調査報告』1977 年でも検出している。
- 注 15 挿図 12、SX3 平面図に南北の溝状部分の輪郭を、礎石とも思われる平坦な自然石との関係を表すため実線で記入した。また西側は削平を受けており、東側同様の礫の分布範囲を明確につかめなかったため図示しなかった。
- 注 16 挿図 15、SX4 平面図は断面図 1・2 層を取り除いた状況である。断面図 1 層に包含する遺物は 2 層以下との時期差がみられ、しかも 2 層以下の池、沼などの堆積状況と異なり、一時に埋められた状況を呈する。第 1 面を整地する際の埋土と考えられることから、1 層を SX4 の堆積土から除外した。

## 第2章 3

- 注 17 挿図 29 の 27～30 は有孔円盤であるが適当な名称を得られなかった。
- 注 18 分析は奈良国立文化財研究所にお願いした。
- 注 19 挿図 16 の断面図は、図面 2 の B-B' 間を部分的に図示したものである。本来は調査区全域にわたる断面図を掲載すべきである。今回は調査区の長さに較べて各堆積層が薄く、図が不明瞭になるため、代表的な堆積状況を示す部分の断面図を図示するに留めた。

## 第3章 1

- 注 20 『平城宮発掘調査報告Ⅱ・Ⅳ・Ⅵ』などでは杯 B に分類される緑釉陶器、須恵器の一部をここでは碗と称している。各器形に付した記号は整理上付けたもので、奈良国立文化財研究所などと共通ではない。
- 注 21 須恵器の伝統を引く陶器を須恵器と呼ぶことに問題はないが、中世の須恵器と古代の須恵器が遺物包含層などで混在する場合があります、これを区別するため、中世の須恵器を陶器Ⅰ類と仮称し、六古窯系の焼き締め陶器を陶器Ⅱ類とする。施釉陶器もこれと同様に古代の灰釉陶器の伝統を引くものを施釉陶器Ⅰ類、古瀬戸を始めとする中世に新たに出現する施釉陶器を総称して施釉陶器Ⅱ類とした。

### 第 3 章 3

- 注 22 粘土紐の接合を良くするために指頭で器壁を押圧するのは普遍的な手法で、ここではこれをオサエ手法と呼ぶ。この手法は、かつて奈良国立文化財研究所の小型器形の分類で e 手法とされていたものである。これが最近 a 手法に含まれた。a 手法はヘラケズリと組み合わせあって器壁を整える (c 手法) 場合がある。指頭で器壁を押圧し、外面の調整と器壁の厚さを整える手法をオサエ手法とし、10 世紀代に盛行する杯、皿類にみられる手法に繋がるものと考えている。
- 注 23 普遍的に存在する甕 A が京都周辺の製品であると仮定すると、甕 B は量的に少なく他地域からの搬入品とみられる。
- 注 24 田辺昭三編『平安京跡発掘調査報告 - 左京四条一坊 -』1975 年 平安京調査会
- 注 25 器形の名称は異なるが『平城宮発掘調査報告Ⅵ』SD650 出土の黒色土器に類例がある。
- 注 26 注 25 の文献に同じ。
- 注 27 田辺昭三の区分による古代須恵器の終末期である。『須恵器大成』1981 年、角川書店
- 注 28 平安京主水司跡 SK8 出土の須恵器に類似し、古い様相を呈する。『平安京跡発掘調査概報』京都市埋蔵文化財研究所概報集 1978-Ⅱ
- 注 29 『平安京発掘資料撰』1981 年 京都市埋蔵文化財研究所
- 注 30 安藤信策他「篠窯跡群」『埋蔵文化財発掘調査概報』1978 年 京都府教育委員会
- 注 31 平城宮跡 SK219 や慍原遺跡 (注 10 に収録) で類例がある。
- 注 32 奈良時代の遺物であるが正倉院御物の中に認められる。単純に緑釉陶器の起源を中国製陶器に求める説 (坂野和信「日本古代施釉陶器の再検討Ⅰ」『考古学雑誌 65-2』) があるが、緑釉陶器の成立にはさまざまな要因があると考えている。
- 注 33 小皿 E は、小皿 D が焼け締まっているのに対し、灰白色の砂っぽい胎土で、緑釉陶器と同一の器形 (小結の特殊な土器参照) に共通性を求めることができる。平安京左京四条一坊の SE8 出土の杯と小皿 E は同様であるが、小皿 D は胎土、焼成が異なる。
- 注 34 橋本久和『上牧遺跡発掘調査報告書』1980 年 高槻市教育委員会
- 注 35 色調は淡い赤味を帯びるものと、白っぽい杯と同様の色調のものがある。
- 注 36 No. 47 土壇 4 や No. 54 溝 2 などに同様の例が報告されている。『京都市高速鉄道烏丸 (からすま) 線内遺跡調査年報Ⅱ』1981 年 京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会
- 注 37 通常ヘソ皿と呼ばれているが、分類の都合で小杯とした。
- 注 38 注 34 の報告書に同じ。
- 注 39 成形時に台から器体の離れを良くするためと推定している。鉢 B・C・D の内面に粘土をヘラ状のものでカキ取った痕跡を残すが、外面は平滑に調整するため一次成形の痕跡は残らない。

### 第 3 章 4

- 注 40 当研究所が昭和 53 年 (1978) に発行した『臨川寺旧境内遺跡発掘調査報告』の用例に習い、

巴文の頭部のまわる方向を「巻き込む」あるいは「巻き込み」という言葉で表した。

- 注 41 図 28-12 は瓦当面に筈割れによると思われる亀裂がみられる。  
注 42 形態の名称として理解の補助のため使用した。厳密には類似するが、木瓜形とはいえない。  
注 43 上原真人『古代研究 13・14』1978 年 元興寺文化財研究所、『京都市埋蔵文化財年次報告 1974- II、1976- II』京都市文化観光局文化財保護課  
注 44 注 43 の文献を参照  
注 45 注 40 の報告書を参照  
注 46 離れ砂、注 40 の報告書を参照

### 第 3 章 5

- 注 47 実測の可能な破片でないため図化せず、文章による報告に留めた。  
注 48 地藏菩薩像に類似する仏像であるが、頭部を欠くことなどから結論し難い。  
注 49 挿図の構成の都合上、石製品の図に掲載した。  
注 50 注 18 に同じ  
注 51 有孔円盤の他、写真 58 に掲載した鞆（ふいご）の羽口 41 や羽口の固定に使用したと考えられる素焼きの 42・43 などがある。明確に図化できる破片でないため写真のみに留めた。  
注 52 成形手法、胎土が 43 ページに記した杯 A に類似する。しかし形態では口縁端部を内傾させるなどの変化を加えている。  
注 53 国産の永楽銭と混同しがちであるが、今回の調査で出土した永楽通寶は明銭である。  
注 54 加工の工程を、打ち欠いて成形、鋸状のもので裁断、研磨と配列したが、裁断と打ち欠く手法が時間的な差のある工程かは不明である。  
注 55 石材の鑑定は、京都大学理学部 理学博士石田史朗氏にお願いした。  
注 56 注 24 の報告書、『遺跡調査年報 1』1979 年 京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会、『平安京六角堂発掘調査報告』1977 年 古代学協会  
注 57 当研究所が昭和 53 年（1978）に西大路七条の道路部分で実施した平安京西市跡の発掘調査において、井戸跡（10 世紀頃）からナス、ウリ、ヒョウタン、ソバ、ヤマモモ、ナツメ、ウメ、モモ、アンズ、スモモ、ナシなどの種子や核の他、マダイの歯骨、イノシシ、ウマの歯・四肢骨・距骨などを検出している。（未報告）  
注 58 成獣の臼歯は、上・下・左・右ともに小白歯 3 本、大白歯 3 本で、合わせて 24 本である。  
注 59 普通残りの良い骨として距骨がある。  
注 60 平安京西市跡から出土したモモは丸いタイプがほとんどである。  
注 61
- |        |              |        |    |          |
|--------|--------------|--------|----|----------|
| 西寺跡    | 南区唐橋西寺町      | 平安時代前期 | 溝  | ウマ 歯     |
| 右京五条二坊 | 中京区壬生西檢町     | 平安時代中期 | 溝  | ウシ 歯     |
| 右京一条三坊 | 中京区西ノ京大炊御門町  | 平安時代中期 | 溝  | ウシ 歯     |
| 右京二条二坊 | 中京区西ノ京冷泉町    | 平安時代中期 | 溝  | ウマ 四肢骨   |
| 西市     | 下京区西七条北依田町   | 平安時代中期 | 井戸 | ウマ 歯・四肢骨 |
| 右京六条一坊 | 下京区中堂寺南町中央市場 | 鎌倉時代前期 | 溝  | ウシ・ウマ 歯  |
- 注 62
- |        |            |        |    |    |
|--------|------------|--------|----|----|
| 西市     | 下京区西七条北依田町 | 平安時代中期 | タイ | 歯骨 |
| 西市     | 下京区西七条南中野町 | 平安時代中期 | タイ | 歯  |
| 左京九条三坊 | 南区東九条西山王町  | 平安時代後期 | タイ | 歯  |

### 第 3 章 6

- 注 63 SD650、注 25 の報告書に同じ。  
注 64 平安京左京三条三坊（中京区烏丸六角東入下る）の土壌から青磁碗と共に多量の土師器を

検出した。昭和 53 年 (1978) 当研究所調査。(未報告)

注 65 注 36 の報告書に同じ。

注 66 山科本願寺跡で六勝寺研究会が検出している。(未報告)

注 67 横山浩一「須恵器にみえる車輪文タタキの起源」『九州文化史研究所紀要第 26 号』1981 年

注 68・69 注 29 の文献に同じ。

#### 第 4 章 3

注 70 嵐山の住宅街での調査例がある。ここでは遺跡の残存する可能性のある地域が 90%である。

注 40 の報告書に同じ。田中琢「論集平安京研究 2 号」1975 年 所収の論文を参考に、この図を作成した。

注 71 「中世の明暗」『京都の歴史 2』1971 年

附表 土器・陶器類遺構別一覧

土器番号	器種	器形	出土遺構	口径	器高	図面番号	写真番号	関連記事	付記
1	土師器	杯 A	SD29A	17.3	3.1	7		32、36	小破片から復元。
2	"	"	"	14.3	3.2	"		"	
3	"	"	"	13.8	3.5	"		"	
4	"	皿 A	"	16.8	2.0	"	13	"	小破片から復元。
5	"	"	"	17.2	1.6	"	"	"	"
6	"	杯 B	"	17.6	4.5	"	"	"	類例は少ない。
7	"	甕 A	"	17.8		"	15	"	
8	"	"	"	14.4		"	"	"	胎土は第1群に属する。
9	"	"	"	14.2		"	15	"	粗いタタキメを残す。胎土は第3群。
10	"	高杯 (脚)	"		残存 18.2	"	13	" 36	他に類例はない。胎土は第1群。
11	"	甕 A	"	18.8		"	15	"	内面をへらで調整する。
12	"	"	"	23.6		"	"	"	
13	黒色土器	杯 A	"	18.0	5.1	"	16	" 34	内面は磨減している。入念なへらミガキを施す。
14	"	"	"	20.2	7.25	"	挿図 19	" "	
15	"	壺	"	14.1		"	"	"	破片が他に1例あるが、同一個体かどうかは不明。
16	土師器	甕 A	"	28.8		"	15	32	口縁が内側へ突出する。類例は20点余。
17	"	"	"	28.8		"	"	"	
18	黒色土器	"	"	13.2	9.5	"	16	34	
19	"	"	"	17.4		"	挿図 19	"	
20	土師器	鍋蓋	"	39.6	17.0	"	13	33	
21	須恵器	"	"	13.2	2.3	8	17	35、80	約1/2残存している。
22	"	"	"	22.3		"	"	"	小破片から復元。
23	"	杯 A	"	13.2	3.5	"	"	"	
24	"	杯 B	"	12.4	4.5	"	"	"	
25	"	"	"	12.1	4.2	"	17	"	
26	"	"	"	14.8	5.45	"	"	"	
27	"	"	"	13.4	3.75	"	17	"	器高の低いものは他に検出されていない。
28	"	"	"	13.4	4.3	"	"	"	
29	"	"	"	12.3	5.2	"	"	" 80	直立する口縁と外方へ開く高台に特色がある。
30	"	"	"	14.2	5.8	"	17	"	
31	"	鉢 A	"	21.2	12.75	"	18	36	検出されたのはこの1点だけである。
32	"	鉢 B	"	22.2		"	挿図 20	"	底部に高台のつく器形であろう。
33	"	鉢 D	"	26.0		"	"	"	糸切痕と推定される。
34	"	鉢 C	"	22.6	8.75	"	18	"	鉢Bより古い要素と考えている。
35	"	"	"	26.4	10.6	"	"	"	
36	"	"	"	30.5	10.5	"	"	"	
37	"	平瓶	"			"	"	35	156に類似する。
38	灰釉	壺 D	"			"	"	36	断面円形の取手がはずれた痕跡がある。
39	須恵器	短頸壺A	"	10.8		"	21	"	

40	須惠器	壺	C	SD29A		残存 20.55	9	20	36、38	淡灰色を呈する。粘土紐を貼り付けた双耳壺。
41	"	壺	A	SD29C	9.8	24.9	"	"	"	
42	"	壺	C	SD29A	9.3	29.3	"	"	"	38
43	"	壺	E	SD29B	15.8		"	"	"	
44	"	短頸壺	C	"	11.8		"	21	"	
45	"	短頸壺	B	SD29A	8.9	21.0	"	"	"	
46	"	短頸壺	A	"	14.6		"	"	"	
47	"	甕	A	"	18.0		"			38
48	"	"	"	"	19.6	46.25	10	22	"	80
49	"	"	"	"	21.7	39.85	"	"	"	"
50	"	"	"	"	17.9		"	"		
51	"	"	"	"	22.0		"	"		38、80
52	"	"	"	SD29B	20.1		"		"	"
53	"	"	"	"			"	22		"
54	"	"	"	"	14.0		"	"		"
55	"	"	"	"			"			38
56	緑釉	椀	B	SD29A	17.2	5.6	11	25	39	硬陶、施釉後重ね焼き。
57	"	"	"	"	17.5	5.9	"	"	"	軟陶、トチンを使用。
58	"	"	"	"	17.8	5.0	"	25	"	硬陶、施釉後重ね焼きか？
59	"	"	"	"	19.0	6.2	"	"	"	軟陶、トチンを使用。
60	"	"	"	"	21.2	6.25	"	25	"	"
61	"	"	"	"	22.0	5.7	"	"	"	" 表面は著しく剥離している。
62	"	皿	B	"			"	28	"	" 黄褐色の砂っぽい胎土。埋没後、釉薬が変化して黒斑がある。
63	"	"	"	"			"	27	"	40
64	"	瓶	A	"			"	26	"	軟陶、62に似た胎土、外面をヘラミガキ、施釉、底は糸切り。
65	灰釉	"	"	"			"	24	"	
66	輸入	椀	"	"	15.2	4.9	"	"	41、81	青磁。
67	灰釉	瓶	A	"			"	"	39	黄緑褐色の釉が施される。
68	"	皿	B	"	15.0	2.5	"	23	"	内面にハケで施釉。
69	"	椀	B	"	16.0	5.3	"	"	"	浸し掛け、重ね焼きの跡がある。
70	"	"	"	"			"	"	"	外面ヘラケズリ、蛇の目高台を貼り付ける。内面だけ施釉。
71	"	"	"	"	17.8	5.95	"	23	"	外面ヘラケズリ、高台を貼り付ける。内面だけ施釉。トチンの跡がある。
72	"	"	"	"	20.4	7.3	"	"	"	75
73	"	平瓶	"	"			"	"	"	灰褐色の胎土、天井部に釉を施す、類例は10数点。
74	"	短頸壺	A	"			"	"	"	底部はヘラケズリ、高台を貼る。
75	須惠器	短頸壺	B	"	10.5		"	"	36	45と同形である。
76	"	"	"	"	8.6		"	"	"	"

77	灰 釉	壺 B	SD29A			11		39	底部糸切り。
78	"	短頸壺A	"			"		"	
79	土師器	杯 A	SD29B	13.6	3.2	12	14	32	
80	"	"	"	13.6	3.2	"	13	"	
81	"	"	"	15.2	2.9	"	"	"	器壁が薄く、器高が低くなる。
82	"	"	"	15.0		"		" 74	" "
83	"	椀	"	7.2		"			口縁端部は上方へ突出する。ナ デは口縁部のみ、胎土は杯Aに 似る。
84	須恵器	杯 B	"	8.6	4.8	"	17	35	
85	"	杯 A	"	13.4	3.7	"	"	"	口縁端部が肥厚する。他に類例 なし。
86	"	杯 B	"	12.4	4.6	"		"	
87	"	"	"	16.4	6.1	"		"	
88	輸入	椀	"			"		41、81	青磁、黄緑色の釉が施される。
89	"	皿	"	15.5	3.0	"	24	"	" 緑灰色の釉、暗灰色の 胎土。
90	黒色土器	杯 A	"	17.6	4.45	"	16	34	内面は入念にミガキ、外面は粗 いヘラミガキ、内面に暗文。
91	"	"	"	15.6	4.0	"	挿図 19	"	内面は入念にヘラミガキ、外面 はヘラケズリのまま。
92	"	杯 B	"	14.8	4.6	"	16	"	外面は磨減している。
93	"	甕 A	"	22.0		"		32、34	
94	土師器	"	"	24.2		"	15	"	
95	"	羽釜 B	"	22.0		"		33、78、79	粗い胎土、縦方向の粗いハケメ を有する。
96	須恵器	壺 G	"	4.0	9.8	"		36	
97	"	"	"			"	19	"	
98	"	"	"	4.4	11.6	"	"	"	
99	"	小鉢	"	9.8	5.0	"	18	"	
100	"	鉢 B	"	16.2		"		"	
101	緑 釉	皿 B	"			"	28	39	225 に類似、トチンの跡があり、 第3群に属する。硬陶。
102	"	"	"			"		" 74	硬陶、第4群、トチンを用いる。
103	須恵器	"	"	13.6	3.0	"		" 75	硬陶、第3群の緑釉に似るが釉 薬はまったく施されない。
104	緑 釉	"	"	14.6	2.6	"	26	"	硬陶、第3群。
105	"	椀 B	"			"		"	軟陶、第4群。底部内面に二重 の圏線、トチンの跡。
106	"	"	"	15.2	4.5	"		"	硬陶、第3群。
107	"	"	"	16.4	5.9	"	25	"	硬陶、第1群。三又トチンの跡。
108	"	壺	"			"		"	軟陶、椀類の第1群に相当、外 面ヘラミガキ、施釉、底部糸切り。 浸し掛け、重ね焼。
109	灰 釉	皿 B	"	14.4	3.1	"		"	
110	緑 釉	椀 B	"			"	28	"	硬陶、胎土は62に似る。ヘラミ ガキを施さず、底は糸切り、底 部外面以外施釉。
111	"	耳 皿	"		1.9	"	26	"	軟陶、ヘラミガキ、ヘラケズリ を施さず、底は糸切り。
112	灰 釉	壺 A	"			"		"	胎土は灰褐色で、緑褐色の釉が 肩部にかかる。

113	灰 釉	壺	A	SD29B				12		39	下半ヘラケズリ、底はヘラで調整、高台を貼る。
114	土師器	杯	A	SD29C	15.4	2.7		13	15	32、74	口縁端部は内上方へ突出、81、82に似る。
115	"	皿	A	"	15.5	1.6		"		74	"
116	緑 釉	椀	B	"	17.2	5.2		"	25	39	軟陶、第1群、口縁の内側に沈線。
117	"	"	"	"	21.4	7.7		"	11	"	硬陶、" トチンの跡。
118	"	皿	B	"	14.3	2.7		"	26	"	軟陶、第3群、トチンの跡らしい痕跡がある。
119	"	椀	B	"				"		"	硬陶、第4群、"
120	"	耳 皿	"	"		1.9		"	26	"	高台の内下端に凹みがある。
121	灰 釉	瓶	A	"				"		"	軟陶、ヘラミガキ、ヘラケズリを施さない。底は糸切り、施釉は浸し掛け。
122	"	"	"	"				"		"	64の小型品、明灰色の胎土、緑褐色の釉薬。
123	"	椀	B	"	6.9	1.9		"		"	"
124	須恵器	椀	"	"				"		75	小型の灰釉椀、浸し掛けをする。緑褐色釉薬。
125	灰 釉	皿	B	"	14.2	2.8		"		39	暗青灰色の胎土、形は緑釉252に似る。底は糸切り。
126	"	椀	B	"				"		"	内面だけを施釉、外面はヘラケズリ、高台を貼る。
127	"	壺	A	"				"	24	"	浸し掛け、重ね焼き、底はヘラで調整、高台を貼る。
128	土師器	甕	A	"	20.5			"		32	外面下半と底をケズリ、高台を貼る。灰白色の砂混りの胎土。
129	"	"	"	"	28.6			"		"	外面は粗いハケ、頸部内面はケズリ。
130	"	甕	D	"	27.8			"	15	" 33、78、79	内面を細かいハケで調整。砂の多い胎土、内面の一部もハケ調整。
131	"	羽 釜	B	"	22.6			"		33	小破片、95に類似。
132	須恵器	鉢	D	"	24.6			"		36	小破片から復元。
133	"	壺	G	"				"		"	97と似た肩の張る器形、壺FとGの過渡的な形態か？
134	"	"	"	"	4.2	11.0		"	19	"	
135	"	壺	H	"		13.0		"	"	"	8C後半～9C前半にみられる器形。
136	"	壺	G	"	6.2	15.1		"	"	"	
137	灰 釉	壺	A	"		20.5		"	24		112に類似、胎土は灰褐色、砂を多く含む。底部は糸切り、高台を貼る。
138	須恵器	"	"	"				"		36	暗青灰色、底はヘラで調整、高台を貼る。
139	"	壺	B	"				"	20	" 38	
140	土師器	杯	A	SK508	14.8	2.5		14		32	81などに類似。
141	"	"	"	"	14.2	2.8		"	14	"	"
142	黒色土器	"	"	"	16.8	4.4		"	16		内面はヘラミガキ、暗文を加える。外面はヘラケズリ。
143	土師器	皿	A	"	16.5	16.5		"	14	32	115に類似。
144	"	盤	"	"				"		"	外上方へ開く体部、鉢か？

145	緑釉	耳皿	SK508		3.4		14	26												硬陶、第3群か第4群、ヘラミガキ、ケズリは施さない。糸切り。29と類似する。
146	須恵器	杯	B	"	11.4	4.7	"	17	35											
147	"	小鉢	"	"	10.4	5.2	"	18	36											
148	緑釉	椀	B	"	13.0		"													軟、第3群。
149	土師器	杯	A	SD29B	13.3	3.1	"	14												141に類似。
150	"	皿	A	"	17.0	1.6	"	"	32											
151	須恵器	杯	B	"	12.0	3.9	"		35											
152	緑釉	椀	B	"			"		75											軟陶、ヘラミガキ、ヘラケズリは施さない。底は糸切り。
153	須恵器	壺	F	"			"		36											
154	緑釉	皿	B	"	15.2	2.4	"	26												軟陶、第1群。
155	"	椀	B	"	16.2	5.0	"	25												硬陶、 "
156	須恵器	平瓶	"	"	8.6	15.5	"	19	38											
157	"	鉢	D	"	22.8		"		36											
158	"	"	"	"	25.8		"		"											
159	黒色土器	杯	B	第3層	15.6	4.5	"	16	34											外面はヘラケズリ。
160	"	杯	A	"	17.4	4.0	"	"	"											
161	"	"	"	"	16.0	5.0	"	"	"											内面ヘラミガキ、磨減。
162	"	"	"	"	20.8	5.3	"	"	"											内面ヘラミガキに暗文を加える。外面は粗いヘラミガキ。
163	"	鉢	"	"	25.1	10.0	"	挿図 19	"											内面ヘラミガキ、外面は粗いヘラミガキ。
164	"	小鉢	"	"	6.6		"	"	"											ナデ調整。
165	"	"	"	"	9.2		"	挿図 19	"											内面ヘラミガキ、外面ナデ調整。
166	"	"	"	"	10.6		"	"	"											内、外面とも粗いヘラミガキ。
167	"	甕	A	"	16.0		"	16	32、34											
168	"	"	"	"	18.3		"	"	"											
169	土師器	高杯	"	"	22.0			15	32											
170	"	"	"	"			残 17.8	"	14											
171	"	盤	"	"				"	"											144と同型である。
172	"	甕	B	"	20.9			"	"											
173	"	"	"	"	19.0			"	15											胎土第3群。
174	"	羽釜	B	"	21.0			"	"											
175	"	"	"	"	21.0			"	"											外面は磨減、内面ヘラで調整、胎土第3群。
176	"	甕	C	"	12.0			"	"											外面タタキメ、内面は当て板の痕を残す。
177	"	"	"	"	13.2			"	13											"
178	"	"	"	"	12.0			"	15											"
179	"	甕	B	"	12.5			"	"											"
180	"	甕	C	"	15.1			"	"											"
181	"	"	"	"	14.4			"	13											"
182	"	"	"	"	19.0			"	15											"
183	"	甕	A	"	18.6			"	"											口縁内側を粗いハケで調整。
184	"	甕	B	"	24.1			"	"											
185	"	羽釜	B	"	20.8			"	"											
186	"	"	"	"	21.0			"	"											33、78、79

187	土師器	羽釜 A	第 3 層			15	15	33、78、79	胎土第 1 群、甕に鏝のついた形である。
188	須恵器	壺	〃	12.8	1.8	16	17	80	宝珠つまみは付かない。
189	〃	〃	〃	15.8	1.6	〃	〃	〃	
190	〃	皿 A	〃	16.6	1.8	〃		36	底部はヘラで調整、他に類例なし。
191	〃	杯 A	〃	13.2	3.5	〃	17	35	
192	〃	杯 B	SD29B	13.4	4.0	〃	〃	〃	
193	〃	杯 A	第 3 層	13.8	4.0	〃	17	〃	
194	〃	杯 B	〃	12.3	4.4	〃	〃	〃	
195	〃	鉢 B	〃	10.4		〃	挿図	36	小破片から復元。
196	〃	壺 F	〃			〃	19	〃 38	
197	〃	椀 A	〃			〃	挿図	〃	淡青灰色、ヨコナデ、底は糸切り。
198	〃	小鉢	〃	13.4		〃	〃	〃 38	灰褐色の軟らかい胎土。
199	〃	平瓶	〃	5.2	9.2	〃	19	〃	取手の跡が残る。
200	灰釉	椀 B	〃	10.0	3.5	〃	23	39	69 などに類似、底部は糸切り、胎土は灰褐色、精良。
201	〃	〃	〃	13.0	4.4	〃	〃	〃 75	浸し掛け、「田」の墨書あり。底部はヘラケズリ。
202	〃	瓶 A	〃			〃			64 の小型品、底部は糸切り。
203	須恵器	甕 B	〃	32.0		〃	挿図	35、38	
204	〃	〃	SD29B	33.5		〃	〃	〃 〃	
205	灰釉	椀 B	第 3 層			〃		39	
206	〃	〃	〃			〃		〃	69 と同じ群に属する。
207	〃	〃	〃	16.5	4.6	〃	23	〃	胎土は灰褐色、砂多い、ハケ塗り、底部ヘラ切り。
208	〃	〃	〃	12.4	5.7	〃	〃	〃	胎土は灰褐色、浸し掛け、釉薬白濁、底部はヘラ切り。
209	〃	〃	〃			〃		〃	糸切底に高い高台、釉薬がわずかに認められる。
210	〃	〃	〃	15.0		〃		〃	
211	〃	〃	〃			〃		〃	
212	〃	皿 C	〃	19.0	3.2	〃	23	〃	内面だけ施釉、外面下半はヘラケズリ。
213	〃	皿 B	SD29B	13.8	2.5	〃	〃	〃	底はヘラケズリ。
214	〃	〃	第 3 層	15.0	3.4	〃	〃	〃	底部ヘラケズリ、高台を貼りつける。浸し掛け。
215	〃	〃	〃	14.0	2.4	〃	〃	〃	内面にだけ施釉、底部はヘラケズリ。
216	〃	〃	SD29C	15.2	3.0	〃	〃	〃	〃
217	〃	〃	第 3 層	14.2	3.4	〃	23	〃	胎土は淡灰色、砂を含む。底部糸切り。ハケ塗り。
218	〃	〃	〃	14.6	2.7	〃	〃	〃	胎土は淡灰色、精良、浸し掛け。
219	〃	〃	〃	15.0	3.4	〃	〃	〃	浸し掛け、重ね焼き。
220	〃	短頸壺 A	〃	17.8		〃		〃	
221	緑釉	皿 B	〃	13.8	2.1	17	26	〃	硬陶、第 3 群、施釉後重ね焼き。
222	〃	〃	〃	14.8	2.1	〃	〃	〃	〃 〃
223	〃	〃	SD29C	15.0	2.5	〃	〃	〃	〃 〃
224	〃	〃	第 3 層	14.2	2.5	〃	〃	〃	〃 〃 トチン、重ね焼き跡不明。

225	緑	釉	皿	B	第3層	14.8	2.9	17	26	39	硬陶、第3群、トチン、重ね焼きの跡不明。
226	"	"	"	"	"	15.2	3.15	"	"	"	軟陶、第3群、施釉後重ね焼き。
227	"	"	"	"	"	13.7	2.9	"	"	"	硬陶、 "
228	"	"	"	"	"	12.5	3.2	"	"	"	" " 重ね焼きか？
229	"	"	"	"	"	13.0	2.6	"	"	40	" 第4群、トチンを用いる。内面底部に圏線、貼り付け高台。
230	"	"	椀	B	"	13.2	3.5	"	"	"	硬陶、第3群、施釉後に重ね焼き。
231	"	"	"	"	SD29C	13.1	3.6	"	25	"	"
232	"	"	"	"	"	14.2	4.5	"	"	"	軟陶、第3群、三又トチンを用いる。
233	"	"	"	"	第3層	12.8	3.8	"	"	"	硬陶、 " 施釉後重ね焼き。
234	"	"	"	"	"	14.0	3.3	"	26	"	軟陶。 " トチン、重ね焼きの跡不明、口縁に煤が付着。
235	"	"	"	"	"	14.0	4.0	"	25	"	"
236	"	"	"	"	"	14.2	4.45	"	28	"	硬陶、第3群、施釉後重ね焼き。高台部に糸切痕が残る。
237	"	"	"	"	"	13.7	4.4	"	26	40	硬陶、第3群、トチンか重ね焼きか不明、印刻花文を施す。
238	"	"	"	"	"	12.6	4.05	"	25	39	軟陶、第4群、トチンを用いる。内面の体部と底部に圏線。
239	"	"	"	"	"	11.8	3.6	"	"	"	硬陶、第4群、類例は検出されていない。
240	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	硬陶、第5群、トチンを用いる。底部内面に圏線。
241	"	"	"	"	"	"	"	"	28	"	" 第4群、 "
242	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	" " " 底部に2重の圏線
243	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	軟陶、第2群、トチンを用いる。
244	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	硬陶、 " " 印刻花文の一部が残る。
245	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	硬陶、第2群、トチンを用いる。内底部に圏線。
246	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	軟陶、第2群、トチンを用いる。内底部に圏線、印刻花文。
247	"	"	"	"	SD29C	"	"	"	28	"	硬陶、第4群、トチンを用いる。内底部に圏線。
248	"	"	"	"	第3層	"	"	"	"	"	軟陶、第5群。トチンを用いる。内底部に圏線。
249	"	"	唾	壺	"	"	"	"	27	"	硬陶、外面ヘラミガキ。高台はヘラで削る。
250	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	硬陶、ヘラミガキを施さない。高台部をヘラでケズリ、底は糸切り。
251	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	硬陶、厚い灰緑色の釉を施す。灰白色の胎土。
252	"	"	小	椀	第3層	"	"	"	"	75	硬陶、ヘラミガキを施さない。底は糸切り。
253	"	"	"	"	"	9.5	2.8	"	25	39	硬陶、(暗青灰色)
254	"	"	壺	"	第3層	6.0	"	"	27	"	軟陶、取手の外れた跡がある。外面にヘラミガキ。
255	"	"	香	炉	"	"	"	"	"	"	軟陶、上・下端を欠失、1/4の破片。
256	"	"	"	"	"	"	"	"	27	"	軟陶、上・下端を欠失、すかしがある。

257	緑釉	椀	B	第3層			17			硬陶、胎土、釉薬は250に類似、第2群の中では特異である。
258	"	"	"	"	20.2	6.75	"			硬陶、第3群、施釉後に重ね焼き。
259	"	"	"	SD29C	17.45	5.5	"	25		硬陶、第2群、257に類似。
260	"	椀	A	第3層	21.8	6.5	"		39	硬陶、第3群、外面はヘラケズリ、内面ヘラミガキ。内面に圏線。
261	"	椀	B	"			"	27	"、40	硬陶、第2群、トチンを用いる。輪花は内面に粘土を足す。
262	"	皿	C	"			"	28	"	硬陶、第2群、トチンを用いる。暗灰色の胎土で261と共に典型的な第2群。
263	輸入	皿		SD24	10.9	2.4	18		42、81	
264	"	"	"	"	10.9	2.5	"		" "	
265	"	"	"	"	11.0	2.4	"	31	" "	
266	"	"	"	"	11.0	2.3	"	"	" "	
267	"	"	"	"	11.0	2.4	"		" "	
268	"	"	"	"	10.3	2.3	"		" "	
269	"	"	"	"	11.0	2.3	"	31	" "	
270	"	"	"	"	10.7	2.2	"		" "	
271	"	"	"	"	11.0	2.4	"		" "	
272	"	"	"	"	9.9	2.6	"	31	" "	
273	"	"	"	"	10.0	2.6	"	"	" "	
274	"	"	"	"	11.2	2.5	"		" "	
275	"	"	"	"	11.0	2.0	"		" "	
276	"	"	"	"	10.5	2.1	"		" "	
277	"	"	"	"			"		" "	
278	"	椀	"	"			"		" "	
279	"	"	"	"			"	33	" "	
280	"	"	"	"			"	"	" "	
281	"	"	"	"			"	"	" "	
282	"	"	"	"	15.7	6.2	19		" "	
283	"	"	"	"	16.0	6.5	"	32	" "	
284	"	"	"	"			"	33	" "	
285	"	"	"	"	16.6	6.8	"	32	" "	
286	"	"	"	"	16.4	6.9	"	33	" "	
287	"	"	"	"	16.5	6.9	"	32	" "	
288	"	"	"	"	15.6	6.7	"	"	" "	
289	"	"	"	"			"	33	" "	
290	"	"	"	"			"	"	" "	
291	土師器	皿	A	"	14.2	2.8	20		41	内面と外面上半をナデ、オサエ手法で成形。
292	"	"	"	"	15.3	2.56	"		"	"
293	"	"	"	"	10.4	1.75	"		"	"
294	輸入	椀	"	"	18.2		"	33	42、81	白磁。
295	"	"	"	"	16.0		"	"	" "	"
296	"	"	"	"	15.6		"		" "	"
297	"	"	"	"			"		" "	"
298	"	"	"	"			"		" "	"
299	"	壺	"	"	10.3		"	31	" "	青磁。
300	陶器	I	鉢	"	28.2		"		"	

301	施釉 I	鉢	SD24	28.5		20		42	灰釉は掛かっていない。II期の遺構中に類例はある。	
302	陶器 I	〃	〃	19.0	10.6	〃	30	〃	暗灰色、底は糸切り。	
303	〃	甕	〃	20.3		〃	〃	〃	赤褐色を呈し、焼成はあまい。	
304	陶器 II	〃	〃	20.8		〃	〃	〃		
305	〃	壺	〃	11.3	22.1	〃	〃	〃	灰色の胎土、肩部に自然釉。	
306	土師器	皿 A	SD25	14.3	2.6	21	〃	41、79	オサエ手法で成形、内面と外面の上半をナデ、胎土は第1群。	
307	〃	〃	〃	14.5	2.8	〃	〃	〃		
308	〃	〃	〃	14.3	2.8	〃	〃	〃		
309	〃	〃	〃	14.9	3.0	〃	30	〃		
310	〃	小皿 A	〃	10.2	2.0	〃	〃	〃		
311	〃	〃	〃	9.0	1.75	〃	〃	〃		
312	〃	小皿 D	〃	8.9	1.9	〃	〃	〃	ロクロ成形、赤褐色、底は糸切り。	
313	〃	小皿 E	〃	8.9	2.1	〃	〃	〃	ロクロ成形、底は糸切り。	
314	〃	小皿 A	〃	9.2	1.5	〃	〃	〃		
315	〃	小皿 C	SD25	9.2	1.3	21	30	〃	79	オサエ手法で成形、口縁と内面はナデ、胎土は第4群。
316	〃	〃	〃	7.4	1.2	〃	〃	〃	オサエ手法で成形、口縁と内面はナデ、胎土は第4群。	
317	〃	高杯	〃	13.0	19.4	〃	30	〃	〃	脚部はヘラケズリ、皿部の成形痕は313に似る。胎土は第4群。
318	輸入	小皿	〃	7.0		〃		41、81		
319	〃	皿	〃			〃	34	42	〃	
320	〃	椀	〃	13.2		〃	〃	〃	〃	
321	〃	〃	〃	13.2		〃	〃	〃	〃	
322	〃	〃	〃	14.6		〃	〃	〃	〃	
323	〃	〃	〃			〃	〃	〃	〃	
324	〃	〃	〃	16.4		〃	〃	〃	〃	
325	〃	〃	〃	14.2		〃	〃	〃	〃	
326	〃	〃	〃	14.3		〃	34	〃	〃	
327	〃	壺	〃			〃	〃	〃	〃	
328	瓦器	椀 B	SD25	14.5		〃		41	指頭痕の目立たないオサエ手法、外面は粗いヘラミガキ。	
329	〃	鉢 A	〃	19.8		〃	38	〃	オサエ手法で成形、内面と口縁部はナデ、ヘラミガキの有無は不明。	
330	〃	羽釜	〃	16.4		〃	38	〃	内面をハケ調整、脚は三足と考えられる。	
331	〃	鉢 A	〃	21.4		〃	39	〃	内面ヘラミガキ、外面上半はナデ、下半はオサエのまま。鉢Bに似る。	
332	〃	鉢 B	〃	52.0		〃		42	内面ヘラミガキ、外面上半はナデ、下半はオサエのまま。鉢Bに似る。	
333	輸入	盤	〃		7.8	〃	34	41、42、81		
334	土師器	皿 A	SE10	12.5	1.9	22		41	オサエとナデ調整、外面下半のオサエによる指頭痕が明確に残る。胎土は第2群。	
335	〃	〃 A	SD28	12.6	2.3	〃		79	〃	
336	〃	〃 A	〃	11.8	2.0	〃	35	〃	〃	
337	〃	〃 A	SK478	12.6	2.5	〃	〃	〃	〃	

338	土師器	皿 A	SK478	12.8	2.3	22	35	41	334 と同。
339	"	小皿 A	SD28	9.0	1.7	"	"	" 79	オサエ手法、内面と口縁部をナデ調整、310、311 に類似。
340	"	皿 A	"	12.7	2.1	"	"	" "	胎土は第1群。
341	"	杯 A	"	10.6	3.1	"	"	" "	指頭痕が目立たないオサエ手法、内面と口縁をナデ、胎土は第4群。
342	"	小皿 A	SK478	8.7	1.6	"	"		339 に類似。
343	"	" A	"	8.9	1.6	"	"		
344	瓦器	小椀 B	SE10	7.8	3.0	"	36		オサエとナデによる調整、内面にヘラミガキ。
345	"	小皿 A	SX5	8.4	1.8	"	"		オサエとナデによる調整、内面にヘラミガキ（鋸歯状）。
346	"	" A	SE12	8.0		"	36		"
347	"	小椀 A	SE12	7.2	2.45	"	"		オサエとナデによる調整、内面にヘラミガキはない。
348	"	椀 A	SK185	11.9	2.9	"	"	44	内面に幅広い原体で粗いヘラミガキ。
349	"	" B	SE12	12.8	4.0	"	"		内面に粗い渦巻状のヘラミガキ、低い高台を貼りつける。
350	"	" B	SK120	11.6	3.4	"	"	44	"
351	"	" B	SK185	13.0	3.4	"	"	"	低い高台、胎土は352 に似る。ヘラミガキは348 に似る。
352	"	" B	SK185	12.4	3.4	"	"	"	低い高台、灰色の砂混り胎土。
353	"	羽釜	SE12	15.6		"	38	41	
354	"	" "	"	20		"	"	"	
355	"	鍋	"	22.2		"	"	" 42	
356	"	羽釜	SK89	27.5		"	37	"	
357	"	鍋	SK144	27.6	11.2	"	"	42	
358	"	壺	第1層	3.65		"	"	44	
359	"	"	第2層	4.2		"	38	"	
360	"	"	"	5.65		"	"	"	肩部に暗文。
361	"	鉢 B	SK478	41.0		"	39	42	内面と口縁はナデ、外面はオサエのまま。362 のような脚付く？
362	"	"	SK493	47.0	10.7	"	37	"	内面と口縁はナデ、外面はオサエのまま、内面に粗いヘラミガキ。
363	"	"	第2層	41.6		"	"	"	外面にヘラケズリ風のミガキ、内面は入念にヘラミガキ、胎土は灰白色。
364	土師器	小皿 A	SE1	8.6	1.7	23	35	43、79	オサエとナデ調整、外面下半に指頭痕、胎土は第2群。
365	"	皿 A	"	10.2	2.1	"	"	"	オサエとナデ調整、外面下半に指頭痕、胎土は第2群。
366	"	杯 A	"	11.6	3.0	"	"	44	オサエとナデ調整、指頭痕が目立たない。胎土は第4群。
367	"	"	"	12.2	3.0	"	35	" 79	オサエとナデ調整、外面下半に指頭痕、胎土は第1群。
368	"	小杯 A	"	6.6	1.9	"	35	44 "	オサエとナデ調整、胎土は第4群。
369	"	"	"	7.0	2.1	"	"	" "	"
370	"	"	"	7.5	2.1	"	35	" "	"
371	"	小皿 C	"	6.2	1.2	"	"	43 "	"

372	輸入	皿	SE1	11.1		23	46	81	
373	"	椀	"			"	"	48、81	象嵌青磁。
374	"	"	"	19.8		"	"	81	
375	"	壺	"	10.2		"	"	"	
376	"	"	"	6.2		"	"	"	
377	"	盤	"			"	"	"	
378	"	"	"			"	"	"	
379	"	椀	"			"	46	"	
380	"	"	"			"	"	"	
381	瓦器	羽釜	"	16.0		"	38	44、45	
382	"	鍋	"	26.0		"	"	"	
383	"	"	"	30.0		"	"	"	
384	土師器	小杯 A	"	7.0	1.9	"	"	44	364 に類似。
385	"	小皿 A	SX2	8.5	1.8	23	35	43	364 に類似。
386	"	杯 A	"	11.5	2.8	"	"	"	指頭痕の目立たないオサエ成形、内面と外面上半をナデ調整、胎土は第4群に属するが、第1群に属する個体も少量ある。
387	"	"	SK14	12.2	3.1	"	"	79	
388	"	"	"	13.7	3.4	"	35	"	"
389	"	"	"	13.9	3.0	"	"	"	"
390	"	"	"	15.4	4.0	23	35	"	398 に類似。
391	"	"	"	16.8	4.2	"	"	"	"
392	"	"	"	17.6	5.2	"	"	44 79	"
393	"	小杯 A	"	6.6	1.7	"	"	44、79	368 に類似。
394	"	"	"	7.0	1.8	"	"	"	"
395	"	"	"	7.2	1.8	"	"	"	"
396	"	小皿 A	"	9.2	2.1	"	"	43	365 に類似。
397	"	"	"	9.7	1.8	"	35	"	"
398	施釉 II	椀	SX2			"	44	46	灰色の焼け締まった胎土、黒褐色の釉薬を施す。高台は貼りつけ。
399	"	"	"			"	"	"	黄灰色の砂の多い胎土、灰緑色の釉薬を施す。高台は貼りつけ。
400	陶器 I	鉢	SE1	30.4		"	"	"	407 に類似。
401	"	"	SK14	28.1	10.2	"	36	"	"
402	瓦器	鉢 B	SE1	26.8	10.7	"	39	45	内・外共にヘラミガキ。
403	"	"	SK14	39.8	11.8	"	"	"	"
404	"	鍋	第1層	21.0		24	37	"	
405	"	"	SK146	34.9		"	"	"	類例は他にない。
406	陶器 I	鉢	SK147	27.4	9.0	"	36	"	
407	"	"	SK146	28.6	9.4	"	"	"	
408	土師器	羽釜	第1層	23.7		"	38	"	
409	瓦器	"	SX5	22.6		"	"	"	本来は瓦器で2次焼成によるものか？
410	陶器 II	鉢	SK259	33.9		"	42	"	備前焼き。
411	瓦器	鉢 A	SE5	26.0		"	"	"	良く焼け締まった灰白色の胎土、表面は黒色、内面には筋がある。
412	"	鉢	D SE5	26.6		"	39	"	

413	瓦器	片口鉢	第2層	15.0	4.4	24		45	小破片から復元。
414	"	"	SX5	22.5		"	37	"	
415	"	鉢 B	Pit18	27.4		"	39	"	小破片、押圧して輪花をつくる。 花文を押印する。
416	"	鉢 C	SX5	23.0		"	37	"	外面を平滑に調整、内面はナデ。
417	"	"	SX1	49.6		"	39	"	外面を平滑に調整、内面はナデ、 花文を押印する。
418	施釉 I	椀	第1層	8.8	3.3	25	43	46	山茶碗である。糸切り、輪花。
419	"	"		12.0	4.4	"	"	"	山茶碗である。糸切り、低い高 台をつける。
420	施釉 II	"	SK40	14.8		"	44	"	古瀬戸。
421	"	"	第1層	15.8		"	"	"	"
422	"	壺	第2層			"	43	"	
423	"	香炉	SK118	7.5		"	"	"	緑灰色の釉薬を施す。
424	"	"	第1層	8.8		"	"	"	"
425	"	"	SX5	6.6		"	44	"	黒褐色の釉薬を施す。
426	"	壺	第2層			"	"	"	
427	"	小皿	第1層	6.3	1.5	"	43	"	
428	"	"	"	7.8	2.0	"	"	"	
429	"	香炉	"			"	44	"	
430	"	"	第1層			"	"	"	
431	"	片口鉢	SK147	14.5		"	44	"	
432	"	皿	SX5	14.4		"	"	"	
433	"	"	第1層	14.9		"	43	46	
434	"	"	SK5	18.0	3.4	"	"	"	
435	"	"	SK246	18.0	3.6	"	44	"	436 と類似した形態、片口皿。
436	"	"	第1層	12.0	2.7	"	43	"	
437	"	"	"	16.2	4.0	"	"	"	
438	"	椀	第2層	9.8	4.3	"	"	"	
439	"	"	SK18	12.4	6.3	"	"	"	
440	"	"	第1層	13.4	6.8	"	"	"	
441	輸入	皿	SK115	8.5	2.3	"	45	"	
442	"	"	SK42	10.2	2.8	"	"	47、81	
443	"	馬上杯	第1層			"	"	"	
444	"	壺	SK260	5.5		"	"	"	
445	"	"	第1層	6.4		"	"	"	
446	施釉 II	鉢	SD12	22.6		"	"	"	
447	"	"	SK35	23.8		"	"	"	
448	"	"	SX5	26.1		"	44	"	
449	"	"	第1層	29.0		"	"	"	
450	陶器 I	"	SK147	26.2	9.6	26	36	"	407 に類似。
451	陶器 II	"	第1層	25.8		"	42	"	信楽焼き、淡赤褐色で、砂粒を 含む粗い胎土。
452	"	"	"	25.6		"	"	"	
453	"	"	"	29.2		"	"	"	
454	"	甕	SD12	44.4		"	"	"	
455	"	"	"	38.0		"	"	46	
456	"	"	"	49.2		"	"	"	
457	"	"	"	47.8		"	"	"	備前焼？

458	陶器 II	甕	SK132,304	48.0	26	41	46	備前焼、復元した器高はやや高い。	
459	"	"	Sk10		"	"	"	"	
460	"	"	SK75		"	40	"	常滑焼。	
461	"	"	SK147		"	"	"	"	
462								欠番。	
463	弥生	壺	第2層		挿図		31		
464	"	甕			17		"		
465	"	"	第3層		"		"		
466	須恵器	杯	第2層		"		"		
467	"	"	SE5		"		"		
468	土師器	小皿 A	第3層		挿図	14	" 33、74	オサエ成形、内面と口縁をナデ調整する。オサエによる指頭痕はわずかに残る。胎土は第1群。	
469	"	"	"		18	"	" 31、33	"	
470	"	"	"		"	"	" "	"	
471	"	" B	"		"	14	" " 74	"	
472	"	皿 A	Pit77		"	"	" " "	"	
473	"	杯	第3層		"	"	" "	オサエ成形、内面と口縁をナデ調整、指頭痕を明確に残す。胎土は第2群、40点検出。	
474	"	"	"		"	"	" "	"	
475	"	"	"		"	"	" "	"	
476	須恵器	鉢	"		"		34、74	他に類例1点あり。	
477	"	椀 B	SD29A		挿図	24	75	緑釉陶器第3群に似る。	
478	"	"	第3層		41	"	"	"	
479	"	"	"		"	"	"	"	
480	"	小椀 B	"		"	"	"	"	
481	"	皿 B	SD29A		"	"	"	底部をヘラケズリ、高台を貼る。緑釉陶器第4群に似る。	
482	"	"	"		"	"	"	緑釉陶器第3群に似る。内面ヘラミガキ。	
483	土師器	"	Pit105		"	24	"	"	
484	"	盤	SD29C		"	"	"	"	
485	輸入	椀	SD12		挿図	45	47、81	補修の跡がある。	
486	陶器 II	壺	"		22	"	43	46	淡褐色、良く焼け締まった胎土、釉薬はまったく施されない。油壺？
487	土師器	杯 A	SK39		挿図	35	43、74	オサエ手法で成形、内面と口縁をナデ調整。	
488	"	"	SK42		21	"	"	"	
489	"	"	SX1		"	"	"	"	
490	"	"	第1層		"		44、74	"	
491	"	"	"		"	35	" "	"	
492	"	鉢	第2層		"	挿図	" 43	"	
493	"	"	SX1		"	31	"	内面は磨減。外面はオサエの痕を残す。	
494	"	"	SD12		挿図	38	"	"	
495	"	"	SK311		21	"	"	"	
496	"	"	SK107		"	挿図	"	"	
497	"	"	SK458		"	31	"	"	
					"	38	"	"	

498	土師器	甌	SD29B	挿図	挿図	62、64	オサエ成形、口縁をナデ調整。
499	"	甕	第1層	32	31	" "	
500	瓦器	羽釜	SK57	"	"	" "	底は貼り付け。
501	"	壺	第1層	"	36	" "	
502	"	皿	SK111	"	"	" "	359と同類。
503	"	羽釜	Pit9	"	"	" "	瓦器皿より小型で、ヘラミガキはない。
504	"	鍋	第1層	"	36	" "	
505	土師器	鉢	SK80	"	"	62、64	三脚になる。
506	"	"	"	"	挿図	" "	
507	"	"	第1層	"	31	" "	
508	"	"	SK157	"	挿図	" "	
509	"	"	SK105	"	31	" "	
510	"	鍋	SK200	"	挿図	" "	
511	"	羽釜	SK157	"	31	" "	
512	"	"	SX5	"	挿図	" "	
513	"	"	第1層	"	31	" "	
514	"	"	"	"	挿図	" "	
515	"	"	"	"	31	" "	
516	"	"	"	"	挿図	" "	
517	"	鍋	"	"	31	" "	
518	"	羽釜	"	"	挿図	" "	
519	"	"	"	"	31	" "	
520	"	"	"	"	挿図	" "	
521	須恵器	甕	SD29A	挿図	31	38、76、77	
522	"	"	SD29B	42	"	" "	
523	"	"	SD29C	"	"	" "	
524	"	"	SD29A	"	"	" "	
525	"	"	SD29B	"	"	" "	
526	"	"	第3層	"	"	" "	
527	"	"	SD29A	"	"	" "	
528	"	"	第3層	"	"	" "	底部の破片。
529	"	"	"	"	"	" "	
530	"	"	SD29A	"	"	" "	
531	"	"	"	"	"	" "	
532	"	"	第3層	"	"	" "	
533	"	"	"	"	"	" "	
534	"	"	SD29B	"	"	" "	
535	"	"	SD29A	"	"	" "	
536	"	"	SD29B	"	"	" "	
537	土師器	"	第3層	"	29	75	墨書土器。
538	"	"	SD29B	"	"	"	"
539	"	"	第3層	"	"	"	"
540	"	"	"	"	"	"	"
541	黒色土器	杯	SD29A	"	"	"	"
542	緑釉	"	"	"	"	"	第3群、底部外面に「細工」の墨書。
543	灰釉	"	SD29B	"	"	"	墨書土器。
544	須恵器	"	SD29A	"	"	"	"
545	"	"	"	"	"	"	"

546	須恵器	杯	SD29A	29	75	墨書土器。
547	緑釉	椀	SD29B	28	"	第2群、貼り付け高台。
548	"	皿	第3層	27	40	第3群、陰刻花文。
549	"	椀 B	SD29D	17		241に同。
550	"			"		242に同。
551	"			"		248に同。
552	輸入		SK257	33	81	
553	"		SX5	"	"	
554	"		SK242	"	"	
555	"		SE14	"	"	
556	"		SK310	"	"	
557	"		SK20	"	"	
558	"		SK232	"	"	
559	"		SK270	"	"	
560	"		SD25	34	"	
561	"					欠番。
562	"	盤	第1層	34		
563	"	"	"	48	47、81	
564	"	"	"	"	" "	
565	"	"	"	"	" "	
566	"	"	"	"	" "	
567	"	"	SX2	"	" "	
568	"	"	SX3	"	" "	
569	"	"	第1層	"	" "	
570	"	"	"	"	" "	
571	"	"	"	"	" "	
572	"	"	"	"	" "	
573	"	壺	SE11	"	" "	
574	"	"	SK120	"	" "	
575	"	"	第1層	"	" "	
576	"	"	SD22	"	" "	
577	"	"	"	"	" "	
578	"	"	第3層	"	" "	
579	"	"	SX4	"	" "	
580	"	"	SK269	"	" "	
581	"	"	SK260	"	" "	
582	"	"	SK224	"	" "	
583	"	"	SX5	"	" "	
584	"	"	SK386	"	" "	
585	"					欠番。
586	"	香炉	第1層	45	47、81	
587	"	壺		"	"	
588	"	"	第1層	"	81	
589	"	"	第2層	"	"	
590	"	"	第1層	"	"	
591	"	"	SK66	"	"	
592	"	"	SK312	"	"	
593	"					欠番。
594	"	椀	SK312	46	81	

595	輸入	壺	SK312			46	81	
596	"	椀	"			"	"	
597	"	"	"			"	"	
598	"	盤	"			"	"	
599	"	"	"			"	"	
600	"	香炉	"			"	"	
601								欠番。
602	"	皿	SD8			46	47、81	
603	"	椀	第1層			"	"	"
604	"	"	"			"	"	"
605	"	皿	SK150			"	"	"
606	"		SD12			"	"	"
607	"		第1層			"	"	"
608	"	椀	"			"	"	"
609	"	"	第2層			"	"	"
610	"	"	"			"	"	"
611	"	蓋	"			47	"	"
612	"	壺	"			"	"	"
613	"	蓋	"			"	"	"
614	"	"	SE10			"	"	"
615	"	合子身	SK67			"	"	"
616	"	"	第1層			"	"	"
617	"	蓋	SK282			"	"	"
618	"	壺	SK13			"	"	"
619	"	蓋	第2層			"	"	"
620	"	壺	"			"	"	"
621	"	蓋	第1層			"	"	"
622	"	合子身	第2層			"	"	"
623	"	"	第1層			"	"	"
624	"	"	"			"	"	"
625	"	壺	"			"	"	"
626	"	盤	SK108			48	"	"
627	"	"	第2層			"	"	"
628	"	"	SK373			"	"	"
629	"	"	第1層			"	"	"
630	"	"	"			"	"	"
631	"	"	"			"	"	"
632	"	"	"			"	"	"
633	"	"	SK80			"	"	"
634	"	"	SK120			"	"	"
635	"	枕	SD29C			巻頭カ ラー	"	
636	"	壺	SD29A			"	"	
637	"	"	第3層			"	"	貼花文。
638	"	"	SX5			"	47	"
639	"	"	"			"	"	"
640	"	"	"			"	"	"
641	"	"	"			"	"	"
642	"	"	第2層			"	"	象嵌青磁。